

論文 / 著書情報
Article / Book Information

標題	華
Title(English)	ka
発行者	TIT 建築設計教育研究会
Publisher(English)	TIT Society of Architectural Design Education
巻号 / vol.	020
発行日 / Pub. date	2000, 12
権利情報 / Copyright	本著作物の著作権はTIT建築設計教育研究会、および、収録されている論文・記事等の執筆者に帰属します。本著作物は、TIT建築設計教育研究会の許可のもとに掲載するものです。ご利用にあたっては「著作権法」を遵守してください。

本館1F-東工大出版物

華：ka

20000000 20

大岡山 20100720 00014802 (2009)

Headline: Urban Habitat

巻頭:都市居住

これまでの都市化の流れは、居住という問題を犠牲にすることで成立してきたところがあるように思われます。そしてそのことは、都市の問題から逃れたところで居住に対する幾つかの固定化した価値観やイメージを生み出してきました。人々の居住環境は都市部を離れた郊外へと展開していき、また一方で住居に対する評価はマンションという商品形態によって定着されつつあります。しかし本当に都市と居住とはタイトに結びつけられない相反する問題なのではないでしょうか。そもそも都市とは、そこに開けながらの集約的な居住を背景としてつくられるものです。これからの都市を考えると、居住という問題を再考する必要があるのではないのでしょうか。欠如しているといわれる居住性を取り戻すのか、あるいは今の都市の魅力を居住の価値に転換していくのか。

そこで本号では「都市居住の現在」と題して、建築家として活躍され、東京における住居のプロジェクトを提案されている広島大学助教授の岡河貢氏と東海大学助教授の岩岡竜夫氏、建築プロデューサーとして建物の企画を手掛ける一方で、マンション・不動産に対する批評活動を展開されている稲葉なおと氏を迎え、現代における都市居住のリアリティーや、そこに建築家として関わることの可能性についてその展望を議論していただきました。

華[ka]2000-2001年秋冬号

【巻頭記事】鼎談:都市居住の現在(岡河貢+稲葉なおと+岩岡竜夫)/小論:都市居住の集合形式—集合住宅という全体性を超えて(足立真)/
 【99年度後学期建築設計製図】/東京工業大学工学部建築学科とRMIT建設環境工学部建築学科による1999年秋期学生交流/【99年度大岡山建築賞】/
 【ニュース・投稿】書評:「ハウジングプロジェクトトウキョウ」居住によって編集される都市環境(久野靖広)、
 寄稿:by-product-tokyo 副・産物-東京(マリカ・ネウストブニー、ナイジェル・パートラム)/
 【INFORMATION】



鼎談:都市居住の現在

Urban Habitat Today

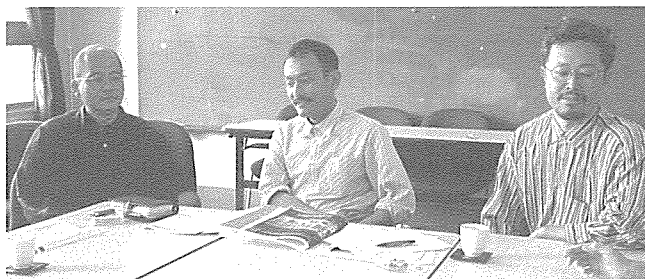
岡河貢 [広島大学助教授、パラディサスアーキテクト]

稲葉なおと [建築プロデューサー]

OKAGAWA Mitsugu (Hiroshima University, PARADISUS), INABA Naoto (Producer)

司会: 岩岡竜夫 [東海大学助教授]

IWAOKA Tatsuo (Tokai University)



岡河貢 [写真左端]

OKAGAWA Mitsugu

1953年、尾道市生まれ。1979年、東京工業大学工学部建築学科卒業。1986年、東京工業大学大学院博士課程修了。1984年、PARADISUS一級建築士事務所設立。1998年～、広島大学工学部建築設計学助教授。主な作品:尾道の家、ドミノ1994、ドミノ1995「武蔵野邸」、向島洋らんセンター展示棟。主な著書:『TOKIO計画1997, 1998』(新建築に連載)、『再読 日本のモダンアーキテクチャー』(共著/彰国社)、『予感の形式』(共著 日刊建設通信新聞社)

稲葉なおと [写真中央]

INABA Naoto

1959年、東京生まれ。1983年、東京工業大学工学部建築学科卒。1995年、マリオット・インターナショナル・ゴールドエンサール・アワード受賞。ビル、マンションの企画・プロデュースを手掛ける一方、独自のマイホーム取得法を新聞、雑誌で展開。世界のホテルを舞台にした紀行エッセイも数多く執筆。主な著書、活動:『遠い宮殿一幻のホテルへ』(新潮社)、『不動産営業マンに負けない本』(講談社)、『誤解だらけのマンション選び』(講談社)、『まだ見ぬホテルへ』(日本経済新聞社)、『こんなマンションに騙されるな』(小学館)、『インターネット上のホテル紹介番組『Web版まだ見ぬホテルへ』(http://www.yomiuri.co.jp/stream/hotels/index.htm、読売新聞社と共同制作)、など

岩岡竜夫 [写真右端]

IWAOKA Tatsuo

1960年、長崎市生まれ。1983年、武蔵野美術大学造形学部建築学科卒業。1990年、東京工業大学大学院博士課程修了。1992年、東海大学工学部建築学科専任講師。1995年、同助教授。主な作品:立休土間の家、T平面の家、アビク戸祭、対屋の家。主な著書:『パリ・メトロポールの明日』(共著/プロセスアーキテクチュア)、『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』(共著 東海大学出版会)、『図・建築表現の手法』[図2・建築模型の表現』(共著 東海大学出版会)。

東海大学岩岡研究室のHPアドレス <http://bosei.cc.u-tokai.ac.jp/~iwaoka/>

以下は2000年8月10日[本]に行われた鼎談の模様を、学生編集委員の岡村航太(M1)、横山志穂(M1)がレポートしたものであり、文責は編集部(担当:足立真)にあります(敬略)。

[都市に住むということ/都市の魅力]

岩岡——いま「都市居住」というテーマについて考えたときに、どのような可能性があるのでしょうか。すなわち、東京のように高密度に成熟した都市について居住という視点からどのように認識すればいいのか、あるいはそこで現実にはどのような居住スタイルが成立し、また新たに想定できるのか。おそらくそれらを建築の問題として考えるときには、住宅の供給システムなどの現実の制度や社会構造といった複雑な状況との関わりのなかでそのリアリティーを獲得する必要がありますでしょう。またそういった都市居住をめぐる状況の中で、建築家はどのようなポジションをとり得るのでしょうか。今回は、それぞれ立場の異なる方々との話のなかで、その可能性を探るための糸口のようなもの

が見えてくればと思います。まずはじめに、都市に住むということに関して今考えていることを個人的な観点から聞かせていただきたいのですが、岡河さんは2、3年前に宇野求さんと共同で『TOKIO計画1997, 1998』(cf.1, fig.1)というプロジェクトを発表されましたよね。そこで考えたことについて簡単にお話いただけますか。

岩岡——学生の時から僕は実際のものをつくるのと同じくらい、実際に出来るか出来ないか分からない建築を考えるのが好きでした。僕が大学院生だったときは篠原研で現代都市の研究をしているときでしたが、そのとき考えていた現代都市というのは盛り場のようなところであって、人の住んでいる場所ではなく、都市の中に住むという思考が欠落していたのではないかと思います。そこでいま都市に住むことの魅力をどう考えられるだろうか、今までの住居形式とか住まうということの制度的な既成概念が少し自由になる思考ができるかもしれないと思い、『TOKIO計画1997, 1998』という一つの提案としてまとめました。秋にはプロジェクトを追加したりした『TOKIO計画2001』が出版されます。

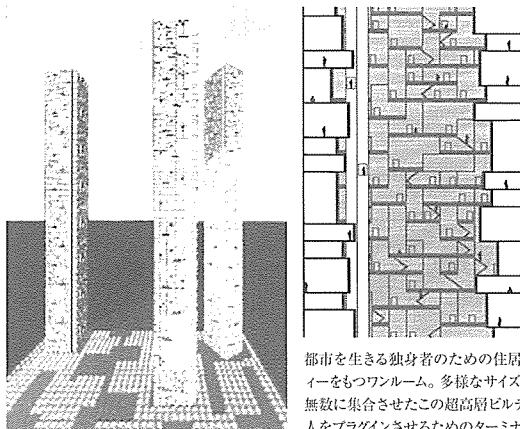
岩岡——住居を含めた都市に関心があるということで、かつてのモダニズムのつくった都市論に対する一つの批評という部分があるかと思っています。ところで、岡河さんは事務所のある東京と、大学のある広島を往来する生活をされていますが、ご自身の居住スタイルからは東京あるいは地方都市をどのように感じているのでしょうか?

岩岡——広島大学はニュータウンのような所であって、空港の近くにあるため、三田の事務所から大学まで約2時間でいけるんです。また家族とは横須賀に住んでいるので、同じように三田から約2時間かかります。そのため、この3ヶ所での分裂した生活は、航空運賃が安くなったことやメールなど通信の発達といった現代のテクノロジーが可能にしている状況の中で、僕にとっては中央の都市と地方都市という関係ではなく、ある意味等価な場所として生活しています。まだ特殊なケースだと思いますが、今の現実が十分可能にしている住まい方、生き方ではないかと思っています。

岩岡——情報や交通の発達から距離感というか場所性が広がっていて、東京という都市は特化された場所ではないということですが、同時にプロジェクトを通して都市に住むことは魅力的だと考えている。その矛盾についてどう思われますか?

岩岡——それは現代人の分裂症、多重人格性が関係していると思います。僕は東京に来るとすごく自由になる。欲望と競争、シビリアンエコノミーのなかで、家族ももちろんなく、建築家でもなく、大学の先生でもない自分になれる。そういう意味で、都市はあるゆる人を独身者にする機能をもっているのではないかと思います。そういう空間や場所

fig.1 ワンルームスカイスクレーパー(『TOKIO計画1997』より)



都市を生きる独身者のための住居形式としてリアリティーをもつワンルーム。多様なサイズのワンルーム空間を無数に集合させたこの超高層ビルディングは、都市に個人をプラグインさせるためのターミナルとして機能する。



fig.2 稲葉なおと氏による著書の数々。



「こんなマンションに願されるな」は、文庫本として再版の予定

のもっている自由に対する受容装置として都市の魅力を考えていて、そこで家族生活を営むといった風にはあまり考えたことはないんです。おそらく実体の空間としては地方都市の方が豊かではないでしょうか。分譲マンションのレベルだけを見ても、同じ値段を出せば地方の方が豊かな居住空間が手に入るでしょう。

稲葉——ものが豊かですね。父の実家が岡山県津山市という田舎町にありますが、そこでは東京で何が流行っているか全部知っているし、東京ではとても手に入らない新鮮な食材が揃っていて食生活も非常に豊かです。だからへたなお土産は持っていけないんです。

岡河——そうですね。実体としては幾つかの地方都市の方が豊かなものをもっていると思いますが、東京では「虚」が豊かだと思えますよ。おそらく世界で最も「虚」が豊かで、最も「虚」を生産できる都市だと思う。先程の独身者も「虚」の自分のリアリティー、「虚」と遊べる一種の自由ですね。いろいろなしがらみから離れてシンプルな欲望の主体となれる。それを受け入れるシステムが東京にはたくさんあって、それが「虚」であるが故に実体として関わることの困難から逃れられ自由になれる。ですから東京のような都市に住まうということの意味を考えると、おそらく近代のようにすべて実体としての空間の豊かさを構成していく論理ではあり得ないと思います。

稲葉——稲葉さんは建築プロデューサーという立場で、ディベロッパーや不動産会社といった、まさに実体としての居住空間をつくっている非常に現実的な世界と関わっていて、多くの批評やエッセイを執筆されていますが(fig.2)、そのような活動を通して、都市に住むということ、あるいはそれをめぐる現代の状況についてどのようにお考えでしょうか？

稲葉——私は設計事務所、ディベロッパーを経て、現在のような仕事をしているわけですが、いかに商売として成功させるかという価値基準を通してずっと建築に関わってきました。設計事務所ではレストランやクラブを設計し、ディベロッパーでも賃貸ビルを建てるならいかに高い家賃で貸せるか、マンションだったらいかに高額の価格で売り切れるかを考える。ずっと売りやすい建築、貸しやすい建築を考えてきたわけです。だから評価がはっきりしていて、商売として成功しなければそのデザインがダメという答えが出てしまうわけです。さらにマンションについて言えば、急速にストックの問題がクローズアップされて、資産価値を下げないための管理の問題や建て替えの問題なども考えるようになってきました。そういった中で、最近の生活者の傾向の一つは、「都心部に住みたい」ということです。この2年の間に都心部のマンションが確実に売れている。それは値段が安くなったということとは別に、生活者の志向があると思うんです。同じ値段で例えば郊外に行ったらもっと広い家、広いマンションを買い取るわけですが、例えば八王子や国分寺、場合によっては武蔵小杉で80㎡のマンションを買うよりも、できたら恵比須や中目黒で60㎡台もしくはそれ以下のマンションを買うという意識が高まってきている。そういう生活を求めている人たちにはいろいろなタイプがあるからひとくくりには出来ないと思いますが、明らかに地図上での都心部に住みたいという傾向があると思います。

岡河——そのような都心への再居住はこれからの大きな流れだと思います。少し先の話をする、21世紀の半ばには日本人の人口が9千万

人くらいになる。そうすると、今首都圏にいる人たちがいなくなった時に再び都心での高密度な都市生活が望まれ、それが可能な経済システムができあがるのではないのでしょうか。今だと建築の雑誌で東京のデザイナーがファッションブルなものをつくったといっても、行ってみると川崎の果てや千葉の果てだったり、藤沢の果てだったりするわけです。それは東京ではないけれどもイメージの中での東京なんです。けれどもこれからは実際の東京とダイレクトに関わり、そこで生活することの方が価値がある時代になると思います。人口が少なくなるという問題と同時に、住宅だけがどんなにファッションブルでも都市に住むという夢をフォローできなくなる。実際の都市にダイレクトに入っていく、これからの東京での現実の居住スタイルをつくっていく可能性に僕は期待しています。

岩岡——それは先程お話しいただいた「虚」の豊かさに、実体としての豊かさ、あるいは魅力を重ねられるのではないかとということでしょうか？

岡河——東京では仕事する所と遊ぶ所だけとして都心がつくられてきて、それで欲望が充足していた。それは住まうことと別世界なのですが、その境界をなくして一緒に考えたいです。僕がもっと年寄りになっても郊外で生活するのではなくて、都心で今のままの生活を獲得したいし、そういう意味では都市居住に対する文化の成熟が始まってよいと思う。それに対応した建築なりディベロッパーなりの応答が、いろいろな領域で始まりつつあるのかもしれない。

Cf.1『TOKIO計画1997,1998』(宇野求・岡河貢 都市居住研究共同体 新建築1997.1-1998.2に連載)

[商品の論理×建築の論理]

岩岡——都心部に価値が集約し、その都心部に住むということになると、当然集合住宅とかマンションとかたちで住むことが前提になると思いますが、その際の選択肢のバリエーションが少ない気がします。日本人は一戸建て志向が強くて、集合住宅に住むということがあまり一般化していない気がしますし、そういう実状における集合住宅またはマンションの形式について稲葉さんはどのようにお考えでしょうか？

稲葉——最大の問題は、この20年来量産されている分譲マンションのほとんどが一つの形式に集約されてしまっていることでしょうか。私はこの形式を「羊羹切・田の字プラン」(fig.3)と呼んでいるのですが、これは間取りが3LDKで北側には外部廊下に面して窓に面格子の付いた寝室が二つ、南側にはバルコニーに面してリビングと和室があるのですが、この間取りがずっとベストセラーでありロングセラーとなっているんです。なぜその間取りの物件ばかり企画されるかという、単純に言えばそれが売れているからなんです。作り手側も、そこから一歩踏み出せばコストアップにつながるかと、実際に需要があるかどうか不安だといった、様々な要因で他の形式をつくり得ないんだと思いますが、同時に日本のマンションというのはいまもうこれでいいと思いつ込んでしまっているところがある。つまり20年間同じということは、そ

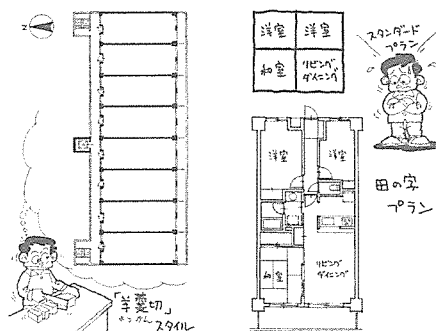


fig.3 羊羹切・田の字プラン (『誤解だらけのマンション選び 2000-2001年版』より)

ここで生まれ育ってきた人たちが次の世代の購入者やつくり手になっていて、マンションというのはこういう物だ、具体的に言えば、北側の寝室というのは窓ガラス1枚を隔てた外を年がら年中人が行き来していて、窓は開けられなくても仕方がないと思込込でしまっているんです。私はマスコミを通じて、この形式こそ住まいとしての基本性能が欠落していると訴え続けているんですが、なかなか切り崩せない。切り崩せない一番の要因はやはり、その形式のマンションが相変わらず売れていることです。建築家がディベロッパーに何かを提案しようとしても、「売れるのでしょうか」という問いが常に付いてくる。非常にやりづらい時代だろうと常に感じています。

岩岡——分譲という制度の中でマンションを考えると、どうしてもディベロッパーサイドは保守的になってしまい、できるものも固定化してしまっているんですね。

稲葉——建築家が住まいはこうあるべきだという理想や提案を唱えても、ディベロッパーはいっさい聞く耳をもっていない。建築家がマンションの設計に関わるケースがありますが、ディベロッパーにとっては、デザイン以前に建築家の名前と経歴が欲しいだけなんです。最近のパンフレットを見てもらうと分かるんですが、聞いたことのない建築家が顔写真入りでまさに大先生のように紹介されている。その大先生が過去に何をつくったかなんてどうでもよくて、設計者を大先生に祭り上げ、大先生が設計した物件だから優良物件であると、購入者に思い込ませることが重要であり、売り上げにつながるんです。

岡河——マンションそのものの内容というよりは、虚の設計の物語が必要になっていて、建築家というイメージが利用されるわけです。

稲葉——購入者には建築家が設計した建物に対する憧れがすごくあって、建設会社の設計施工よりは大先生が設計した物件の方がはるかにいい、という意識は根強いみたいですね。こういう見せ方でマンションが売られるようになったのはここ2、3年のことです。一般雑誌がインテリア特集を組むと確実に売れるという傾向があったり、マスコミの方から私自身がインタビューを受けたり、こういう建築家知りませんかと度々聞かれるようになったのもここ2、3年のことで、一般の人のインテリアや建築家に対する関心が高まってきていると思います。躯体だけをディベロッパーが用意して、各住戸内部はお客様の自由に設計していいですよという形式のマンションも最近出てきていますが、完成した物件を実際に見てみると、よくここまでつくり込んだなどと思うくらい個性的なインテリアの住戸がたくさんあるんです。各購入者がインテリア雑誌の切り抜きなどで自分たちが希望するインテリアのイメージを明確に伝えて、それをディベロッパー指定の建築家が一户一户図面化しているわけですね。都心部に対する思い入れと同時に、こういう空間に住みたい、こういうスタイルに住みたいという住み手側の欲望がますます膨らみつつあると感じています。

岩岡——稲葉さんは本の中でマンションの性能として、設備や仕様の豪華さよりもコンクリートで囲まれた箱そのものの居住性が大事だと書かれていますが、今の話の場合では建築家はその箱の設計には関わっていないんですね。

稲葉——そうですね。建築家に求められているのは購入者が集めたインテリア雑誌の切り抜き写真を図面化することであって、住居に対する提案ではないですね。

岩岡——建築家の方も、例えば民間のマンションに対して批判的に見ている、そういうものではない方向で建築や空間をつくっていくという、一種の批評的な姿勢がずっとあったと思うんです。ですがその結果、都市の中で地となるべき住居に対して、つくるという行為から非常に回避した状態になっている可能性がありますよね。そういう建築家の

立場、建築の論理というものと、現実の都市をつくっていくことに差みたいなのがあって、僕はそれを埋めていきたいと思っていますが、岡河さんはその辺をどう思っていますか？

岡河——僕は絶望的だと思ってまして、今の東京っていうのは建築家が介入できる生易しい世界ではないと思っています。ここは企業とか資本といった強いシステムが力を持っていて、建築家のロジックではなくて建築家の神話というものが商品の価値を上げることはあるだろうけども、実体としては恐らくかなわないでしょう。建築家が工務店ではないというレベルでしか認識されないんだから、建築家にとってはしんどい戦いだと思う。しんどい戦いであるが故に、今は自分のプロジェクトをメディアの中に投入することしかリアリティーがないんです。ただ、できることなら実体として関わっていききたいけれど、その理想と現実の間を橋渡しするようなもの、あるいは商品の論理を超えるようなものがないことが問題でしょう。

稲葉——メディアでということについてはよく分かります。

岡河——現状の分譲システムに対する批判的な意味もあるんですが、『TOKIO計画』の別バージョンの中でSD(9704)に発表した『マルチモデュールハウジング』(fig.4)というのがあって、それはインターネット上でプロジェクトのヴォリュームを立ち上げて、仮想で完売になったら本契約をして実際に建設するという提案です。そういったシステムと一緒に建築がメディアの中に虚像として流通すれば良いと考えています。もちろん建築家が実体の空間をつくっていくことは重要だけど、介入できない状態があるし、ディベロッパーの方もそういった方向には向かっていない。

岩岡——そういう風に言うと、稲葉さんのようなプロデューサーという立場がいい線いってることになりますよね。建築家は建てるのではなくて、いろいろコーディネートして、本を書いて……ということなんですかね。

岡河——そのとおりなんじゃないですか、現実の世界では。ただ虚の世界では建築家ができることはたくさんあって、要は実体をつくるのが建築家なのか、それとも影響を与えていくのが建築家なのかということです。例えばル・コルビュジエは実作は少ないけれど彼の影響力は今でもある。凄いことです。これからの建築家の仕事の仕方としてどうするのか。もちろん図面を描いていくらかの仕事もするが、それと平行して空間を情報化することか、状況をつくるようなロジックを構築するのか、そういったこともしていけないと建築家としてやっていけない。

[建築家の戦略/メディアポリティクス]

稲葉——私の名刺の肩書きは日本では「建築プロデューサー」としていますが、海外に行く時には“architect”としてあるんですね。なぜかという、海外では“architect”という肩書き一つで、相手からある程度以上の信頼感を得られるからです。旅先でふと知り合った外国人に、彼の国の建築家の名前を出すと当然のように知っていて、そこからコミュニケーションができたりする。どこに行っても建築家という職業が社会的に十分認知されていると感じるわけです。ところが日本では、一般の人に著名な建築家の名前をあげてもちんぷんかんぷんだったりする。

岡河——それは、やっぱり日本の建築の文化には非常に不幸があると思う。国家の近代化のイメージ・デザイナーとしての役割が近代の日本の建築家にはあって、一般にもそう認識されてきたような気がします。でもやはりヨーロッパのようにリアルな日常空間をつくることに関わるのが本当は建築家にとって一番大事なことだと思う。国家のイメージ・デザイナーとしての役割を超えて、建築家が本当に豊かな空間をつく

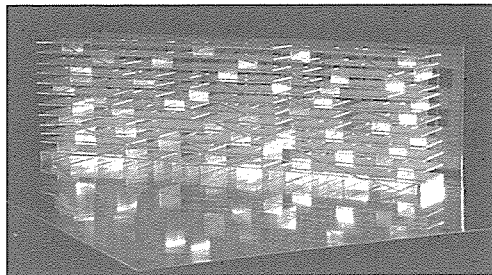


fig.4 マルチモジュールハウジング(『TOKIO計画1997』より)

るんだと認識してもらおう方向に持っていくのが正しいと思うけど、今そこに到達できないという現実があるわけです。

稲葉——そのためには今後、建築家がいかにマスメディアをうまく利用していくかが凄く大事だと思います。今はマスコミに対してとても働きかけやすい時代だと思いますよ。先程言ったように、建築やインテリアを特集した号の雑誌が売れるという現状がある。でも編集者は建築家を見極めるだけの眼をもっていないから、建築家の方から自分をうまくプレゼンテーションしてマスコミを懐の中に入れてしまい、そこから建築専門の雑誌とは別のかたちで発信していければ、世の中に対して大きな影響力をもてるのではないかと思いますね。

岡河——しかし、否定はしないですが、そうなった時にはやはり虚像としてやらなければならない。そういった葛藤がありますよね。

稲葉——最近の例では、安藤忠雄さんがうまくマスコミを利用していると感じますし、昔の例で言えば、一時期生活者に対してマスコミを通じて影響力をもったのは宮脇檀さんでしょうか。彼が言ったことはその時代の輿論方に非常に影響力をもっていたらしいですね。だから今も安藤さん以外に、もっと下の世代の建築家で影響力をもつ人がいていいんじゃないかと思います。今は宮脇さんが活躍した時代と同じくらい一般のテレビや雑誌が建築家を求めている時代だと思うので、その風潮をうまく使うべきでしょう。

岡河——それで宮脇さんは建築家としてうまくいかなかった、あるいは持続できなかったのではないのでしょうか。

稲葉——でも50代の一般女性に話を聞くと、今もって宮脇檀という名前を知っている人は多いですね。名前は知らなくても顔は知っているとか。

岡河——そういう方向になってしまうんですね。

岩岡——一般の人たちは、建築家という存在と、その人がつくる建物や空間を結びつけていないというか、建築家の個性とか作風の違いといったことをあまり考えていないんじゃないでしょうか。

岡河——簡単には言えませんが、建築家はなにかソーシャルハウジングみたいなものを失敗して来たのではないのでしょうか。要するに近代の大失敗という気がするんですよ。結局自由な住居の集合をつくるのができなかった。

岩岡——建築をつくることで自分の何かを表現するというのが、逆にマイナスになっている気がします。

岡河——それはファッションデザイナーとかと比べて建築家はマスの洗礼を受けてないからですよ。ファッションデザイナーには売れる売れないと言うのがもの凄くシビアだけでも、別に彼等がマーケティングしているわけではなく、彼等こそ今一番エゴイスティックに自分を表現しているのではないのでしょうか。でも実は建築の方がひとつひとつに楽に表現できると思うんですよ。しかしもっと大きいマスの洗礼は受けてない。本当はそのチャンスがたくさんあった方が良いのかも知れない。

稲葉——だから先ほどの岡河さんの『TOKIO計画』の提案なんかもね、いきなりディベロッパーに持っていったって見向きもされないかも知

れないけれども、いったん新聞や女性雑誌が何かマスメディアで取り上げられたりすれば、つくり手側の視線が変わってくるわけです。社会に対して発信していきたいのなら『新建築』よりも日経新聞や『サライ』『クロワッサン』でやる方がいいですね。

岡河——それは高度なメディアポリティックスでしょうけどな。

稲葉——私が本を書いたりしている活動もそうなんですけど、保守化してしまっているディベロッパーに対して直接ものを言うのではなく、生活者・購入者を教育して、彼等から言わせるという形式は、今後益々有効になるでしょう。例えばみんながマンションを買わなくなったら、ディベロッパーは変わらざるを得ないですよ。実際、97年から98年にかけてマンションが急に売れなくなった時期があったんですね。で、その時にディベロッパーは必死に売ろうと、企画内容や販売形式に新しい試みをどんどん取り入れたんです。ところが99年になって、税制と低金利のダブル効果で急に売れ始めたので、商品の進化はびたりと止まってしまった。だから私は購入者に対して買わないようにしましょう、買わなくなればマンションは進化しますから、と言っているんです。ディベロッパーの中にも、都市居住の問題とか、マンション生活の今後の在り方に対して意識の高い人たちがいて、マンションが売れなかった97年から98年にかけては彼らも知恵のしほり甲斐があったわけですが、99年以降は面倒なことを考えている間に1日でも早く売ってしまえ、という波に飲み込まれてしまっているんです。ただそういう人材もいるということで、先行きに対して絶望的とは思っていません。

岩岡——私や岡河さんは大学で建築教育をしているわけですが、私のいる東海大学ではほとんどの人が設計以外の仕事へ就職し、買う側、売る側になっていくわけです。という意味で、建築教育というのは建築をつくる論理を教えることと同時に、建築の知識を伝えること、見る目を教えることが重要ではないかと考えています。

稲葉——建築の知識をもった人が建築家ではなくどんどん一般人になってもらえれば、見る眼をもった生活者が増えるということで、何か明るいものを感じますね。やっぱり生活者の意識の問題が大きいと思うんです。生活者の意識に変革が起きて、建物を見極めるだけの眼が育てば、ディベロッパーは追従せざるを得ないんですから。

[都市居住の全体像]

岩岡——都市居住という問題を考えたとき、商品としての論理がひとつの都市をつくっているとするならば、メディアを利用して云々といった話は、商品の論理を利用して、その連続で現状を動かす可能性を考えることだと思います。同時に、商品という在り方を相対化できるような論理が成立するのかわという問題もあって、おそらく提案の方法ではなく、何を建築家が新しく提案するかというときには、そのあたりを考える必要があると思います。そのとき少し視野を広げて、商品の対象そのものである住居以外のものとの関わりによって成立する都市居住を考えるという方向がひとつあると思うのですが、例えば岡河さんは『TOKIO計画』の中で住居と非住居の混成、複合をテーマのひとつとして挙げていますよね。

岡河——あそこでは近代都市、近代建築の空間を、現代において求められている多様な生活空間に変形させることを考えていました。つまり住居と都市施設やインフラや自然環境といった住居以外のものとを混成させるという方法によってできるハウジングのアーキタイプの可能性を考えてみたんです。

岩岡——マンションの1階にコンビニなどの店舗が入っている程度の複合は現実に街中でよく見かけますが、ディベロッパーの側ではそう

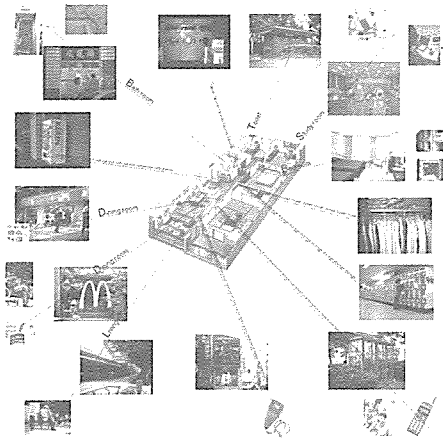


fig.5 居住空間の都市への散逸化(東海大学岩岡研究室)
都市には住宅の中で行われる様々な行為を補償するような機能をもつ空間がみられる。

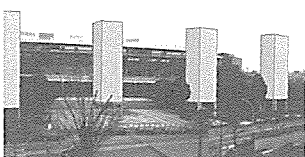
いった混成や複合といった問題に対してどのように意識されているのでしょうか。

稲葉——ディベロッパーとしては、マンションが他の用途と複合するのは、止むを得ず、というケースがほとんどです。1階は売りづらいから店舗にしたとか、もともとその土地で商売をされていた方の立ち退きに失敗してそのまま入ってもらったとかで、新しくそこに住む人たちにとって何が必要なのかと考え練られた結果というケースはなかなか見当たりません。実際、住む人の立場に立って考えた場合、1階に店舗が入っているようなマンションはオススメできません。なぜなら、今のマンションを管理するシステムがまだまだ発展途上にあるので、そこに店舗という別の要素が入ることで混乱をきたしている例が多いのです。だから、そういった現実的な問題の解決が最優先で、複合という居住形態にどういったものがあり得るのかという議論はディベロッパー側では今のところ全然ないですね。

岩岡——都心居住の場合は、マンション自体が複合化しているということもあり得るだろうし、逆に周りに商業施設や文化施設が多いので、建物の中で完結していなくても、周辺環境と相互に補完した形で生活像を描けると思うのです(fig.5)。私たちが『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』(cf.2, fig.6)という計画をやったのですが、都市には既にインフラや様々な施設があるわけで、それをいかに使うか、それを使うことで都市と一体となり、都市に住むことの面白さや利便性を最大限に活かせるようなひとつの居住の全体像ができるのではないかなと思うんです。商品の論理というものには場所性がなく、マルチな部分がありますよね。どこでもつかえるという一般解として。でも実際には場所の偏りがある中に建つんですから、個別解的な部分があるわけで、それは商品の論理に乗りにくい部分かなと思います。



「クリティカルウォール」
霞ヶ関官庁街の建物を包み込み、街路に沿った新しい建築的皮膜を構成するハウジング



「アイストップコロネード」
スポーツ施設の周囲に列柱状に配置され、神宮外苑の領域を顕在化するハウジング

fig.6 都市施設と構成関係をもつハウジング(『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』より)

稲葉——そういったプロジェクトは、土地の所有者に提案できるほど現実的な内容なのか、あくまでもヴァーチャルなものなんですか？

岡河——私が『TOKIO 計画』を湾岸でやっているのは、湾岸では工場や倉庫がもはやいらぬ状況なのに埋立地が増えているんです。そして、そのような使うのに困っている土地というのは半分公共の土地なんです。こういった税金を使ってつくったけど余っている土地があって、そのときに社会資本や都心再居住があるとすれば、そこでもう一度ハウジングやその可能性を議論すればいいと思う。商品の論理を相対化する意味でも、パブリックの問題として都市居住を考えていく方が可能性が高いと思います。

岩岡——国や市など公共に対するプロジェクトをするんですね。

岡河——そのパブリックの論理は権力構造とは違うと思うんです。なぜなら都心のいろいろな区では人に住んでもらいたいですよ。でも中心部はみんなお年寄りばかりになってしまっている。人に住んでもらいたいのにはそのロジックがないから、奇妙に空虚な中心があるんです。中心部であったり、臨海副都心であったり、もっといろんな住まい方のできる可能性がある場所はいっぱいある。そういった公共的な問題としての議論になったときにできる空間というのは、建築家が提案するものになるのではないのでしょうか。

稲葉——現実問題としてそれはどんな用途の建物になるんでしょうね。公団の賃貸住宅じゃないわけですし……。でも、建物だけを考えるのではなく、その場所や土地のことも一緒に考えるっていう話には共感できますね。私自身、土地に関する相談をよく受けるんです。土地の探し方を教えてくれとか、土地を見つけたのだが意見をくれないとか、こういう契約書にサインして良いものか教えてくれとか……。つまり不動産屋は信用されていないけど建築家は信用されているといった状況の中で、建物以外のところでも購入者が建築家に期待しているんです。しかし建築家は土地となったとたんに分からなくなってしまう。こういう家は建ちますよって設計はできても、土地に関する民法上の制限の問題や、売買取引の問題になると、あまりに知らなすぎて知ったかぶりすらもできない。

岡河——建築家がいまだに建物の実体をつくることだけに固執している部分があるんでしょうね。

岩岡——先程、購入者やつくり手の意識の話が出ましたが、それらを動かすためにも、建築家もこれまでの枠組みを超えるという意味で意識を変える必要があるということでしょうか。

岡河——おそらく、身の回りの居住空間だけなら建築家でなくても設計できてしまうような気がするんです。そのとき、これからどのようにして建築家としてあるべきかと思うと、今の非常にリアルな問題を前にしてまだ新しい状況が見えていないんです。実は制度の限界みたいな気がしないでもないけど、ヴァーチャルな水準でその制度の枠組みを破壊してでも可能性を考えてみることはまだやるべきだし、まだ始まったばかりだと思う。そして最終的には現実に動いていくような戦略があるかどうかでしょう。

稲葉——日頃、非常に現実的なことしか考えていないディベロッパー業界の人にとっては、今日の岡河さんや岩岡さんの話は非常に新鮮だと思いますね。だからうまくリンクさせれば可能性があると思います。

岩岡——実体的、空間的な問題に加えて、商品の論理やメディアの話、あるいは最初でた都市の「虚」の魅力を含めて、現実の都市で起きている様々なことをポジティブに受けとめ、その都市の魅力を引き出すことが居住環境の価値に結びつくように考えたいですね。

Cf.2『ハウジング・プロジェクト・トウキョウ』(都市環境構成研究会:奥山信一、岩岡竜夫、塚本由晴、小川次郎、足立真、寺内美紀子/東海大学出版会/1998年)

都市居住の集合形式 —集合住宅という全体性を越えて Collective Forms of Urban Habitation

足立真 [技術補佐員]
ADACHI Makoto (Research Associate)

[集合住宅という全体性]

現代の都市においては、集合住宅という建物に住むことが最も一般的な住居形式となっている。そしてその集合住宅をどのように計画し設計すべきかという問題に対して、これまで多くの人々が取り組み、様々な集合住宅像を描いてきた。集まって住むことの意味を考え、住人どうしのコミュニティの形成を想定し、敷地内の共有空間を豊かに演出する。住居の単なる集合を超えた、集合住宅ならではの生活スタイルや空間の形成を探求し、規模の大小に関わらず、その場所に一つの世界観のようなものを投影した密度の濃い全体性をつくり出している(fig.1,2)。そのような建物を見て、その計画の密度やデザイン手法に感心させられることもあるが、そこから視点をずらして、その近隣に戸建て住宅が建っていたり、公園が整備されているのを見ると、「集まって住むこと」や「コミュニティ」、「共有空間」といった集合住宅として計画された全体性って何なんだろう?と考えさせられることがある。集合住宅という建築としてのまとまりは、都市においていかなる意味をもつのか。

集合住宅とは文字どおり住宅を集合させた建物である。都市部においてなぜそのような建物が必要になるかという、そこでの居住を求める人が多くいるからであり、高密度により多くの居住空間を都市に存在させるために集合住宅という建物の形式が繰り返され、一般化している。だからドライに考えると、もともと近くに住む必然性のない家族や個人どうしが敷地と建物を共有しているだけであって、集合することは都市居住のための手段であり、目的ではないはずである。そこに居住する人々の共通の目的は都市に住むことであって、集合住宅というまとまりに住むこと

ではない。しかし先に述べたように、集合住宅という建物の形式が一般化するに従い、建築の計画や設計に関わる者にとっては、集合住宅というまとまりが意味をもち、そのまとまりを目的とした思考が生まれ展開してきた。なぜなら、一つの集合住宅という建築の単位が、実際に図面を引く具体的な設計対象としての全体だからであり、集合住宅というまとまりが切り出された瞬間から、その範囲に視野が絞られ、計画対象としてその全体性が問題となってきたように思われる。

[部分と集合の関係]

例えば学校や病院といった施設に対応する建物の場合は、その施設内に機能的な関係が存在し全体を組織していると言えるが、集合住宅という建物には全体をまとめる根拠が存在していない。従って集合住宅の全体性は、住戸単位を基本とした部分どうしの建築的・空間的な関係によってつくられると言えるだろう。例えば、建物のボリュームを分節することや、外部空間における活動や動線を共有させることによって部分的な住居のまとまりが形成され、その階層的な構造によって部分と全体の関係が組織される。あるいは、統一感のある同質なデザインを反復させることによって、全体の秩序が与えられる。そのような建築的手法によって、もともと無関係な住戸どうしが無関係でないように設計され、集合体としてのまとまりが形成されているのである。しかし同時に、敷地内の住居どうしの関係が緻密に計画され、全体性が強くなればなるほど、相対的に個々の住居と都市との関係が希薄に見えてくる。集合住宅というまとまりが周囲の環境から切り離され、自立した存在としてあらわれてくるのである。集合住宅に住むことではなく、都市に住むことが目的なのだから、集合住宅という建築的単位によってたまたま閉じられる全体性を排除し、各々の住居が、集合住宅の部分としてではなく、都市の部分であるようにつくりたいだろうか。そのような思考に基づく方法論を探求することで、都市における新しい集合住宅の形式をつくりだせるように思える。

[都市空間の構成へ向けて]

前述のように集合住宅の全体構成の多くは、部分的に住居がまとめられた単位の組合せによって認識されるが、その部分的な単位もまた集合住宅である。すなわち、より大きな広がり部分として集合住宅を構成する方法は、既存の計画の中に見ることができるのだから、それを周囲の環境を含めた都市的な広がりの中で展開できないだろうか。集合住宅内の関係はもっと簡単でよく、集合住宅を部分とした都市空間の構成に向かうことで、住居と都市の連続的な関係が獲得されるように思われる。例えばネクススワールドにおけるOMA(レム・コールハース)による住棟(fig.3)は、そのような可能性を示す事例の一つとして見ることができる。2棟に分けられた住棟内の構成は、戸建て住宅の形式の一つであるコートハウス型の住居が並列されただけという非常にドライな関係によってつくられているが、低く抑えられた住棟のかたちは、背後に建つ予定であった磯崎新による2本の高層棟との関係を強く意識したもので、自分の建物がその礎石として見えるように計画されている。それは、その地域において圧倒的な存在感を示すであろう高層棟と自分の建物とをセットとして反復させることで、地域的な広がり部分として、住棟の構成とその地域全体との関係を意識させるものである。都市あるいは地域的な広がりすべてを自ら計画することはできなくても、周囲の環境を利用し取り込んだ集合形式を構想することで、その広がりを浮かび上がらせるような居住環境の計画は可能なのである。無関係なものどうしの集合は、集合住宅そのものの在り方であると同時に、都市空間の在り方でもある。都市居住の集合を設計するのだから、都市空間をつくることを考えていきたい。そのときには、どのような都市的な広がりや思考の対象とするか、また様々な要素が混在したその広がりの中で、何との関係に着目し評価するかが重要な選択となるであろう。そして、集合という形式に対する柔軟な構想力とともに、都市空間に対する分析力をもつことで、その可能性を見出していきけるのではないだろうか。



fig.1 多摩ニュータウン/ベルコリース南大沢
イタリアの山岳都市というイメージに基づいたデザインコードのもとにマスターアーキテクトによって調整された統一感のある全体像。



fig.2 熊本県宮保田窪第一団地
すべての住居が面する中庭は、各住居の内部を介してのみアクセス可能な、周囲から閉じた共有空間となっている。

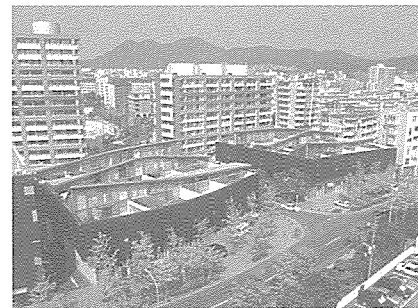


fig.3 ネクススワールド/レム・コールハース
背後に建つ予定であった磯崎新による約120mの高層棟は実現せず、別の住棟が建設されている。

建築設計製図第二/第1課題

Second-year studio Work: Autumn Semester

「ふだんの居場所を考える」

"Design a daily-use space"

担当:

青木義次[教授] 藍澤宏[教授] 大佛俊泰[助教授] 藤井晴行[助教授]

AOKI Yoshitsugu (Professor), Aizawa Hiroshi (Professor), OSARAGI Toshiyasu (Associate Professor), FUJII Haruyuki (Associate Professor)

木下芳郎[助手] 齋尾直子[助手]

KINOSHITA Yoshiro (Assistant), SAIO Naoko (Assistant)

緑ヶ丘地区周辺に、建築の学部生と、大学院生、および6類のためのスペースを計画する。毎年4年生のディプロマ制作時期におこる製図室の入れ替え、設計製図の作業スペースの不足、コンペなど課題以外のグループ作業空間の不足、課題作品や卒業設計を展示するスペースの未整備、講評スペースの不足など数多くの問題があり、来訪者への展示公開や講演会などもままならない。また、CAD、ネットワークの整備が遅れているため、学生が自由に使える端末機がないことや、図書の検索、閲覧などのスペースも準備できていないことが問題としてあげられる。さらに6類全体の学生からは、雨の日や授業以外の居場所がないことや、簡単な飲食をおこなうスペースがないこと、自由に使える外部空間の不足が不満としてあげられている。

課題はこうした学生の身近なテーマに対して、具体的な空間を提案してもらうことを求めている。

[設計条件]

計画敷地: 緑ヶ丘地区周辺内ならば各自配置する場所を自由に設定してよい。

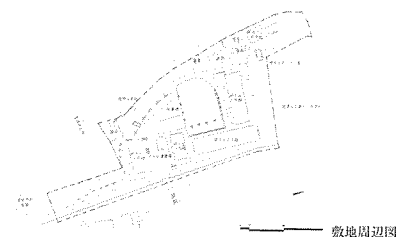
所要スペース: 大学院生製図室 / 講評会、講演スペース / 展示スペース / 飲食、喫煙スペース / その他

規模: 地上2階、地下1階以内とする。延べ面積は1000m²程度とする。

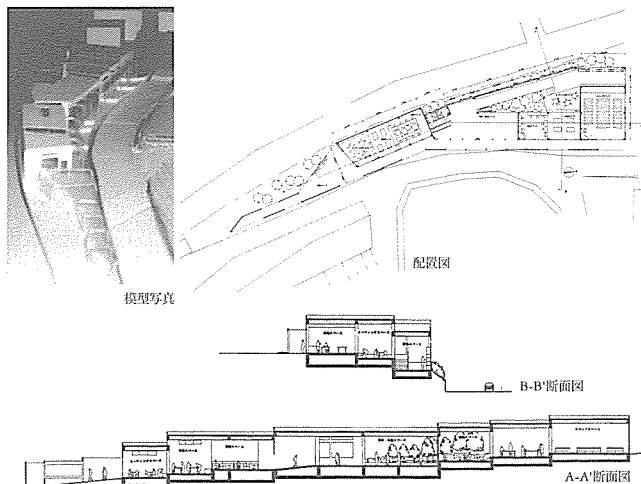
構造: 主構造はRCラーメン構造

[提出物]

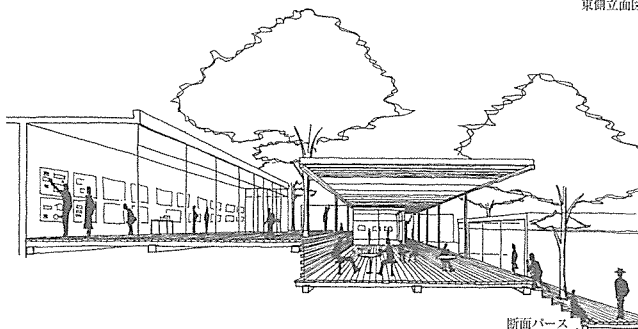
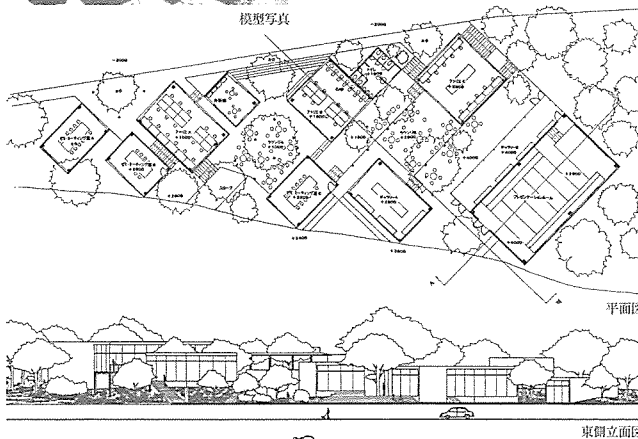
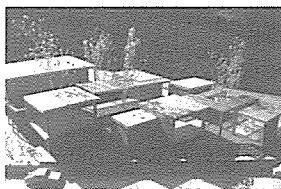
配置図(1/200)、各階平面図(1/200)、断面図(2面、1/200)、立面図(2面以上、1/200)、断面パース(1面、1/50)、矩計図(1面、1/20)、模型写真、設計主旨、タイトルをいれる。



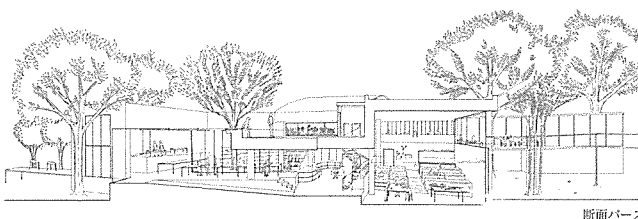
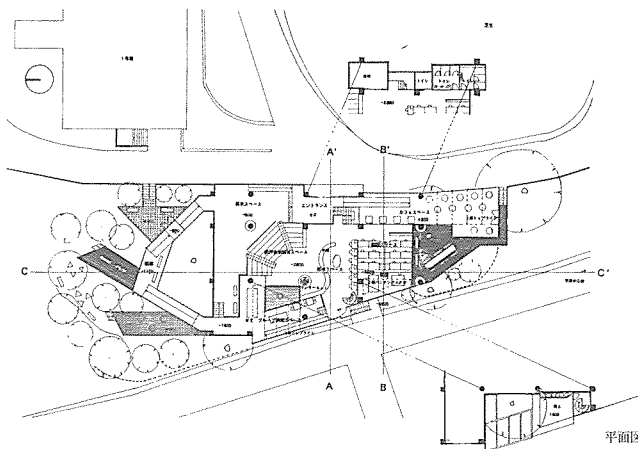
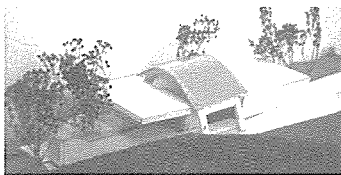
荒井茂 ARAI Shigeru



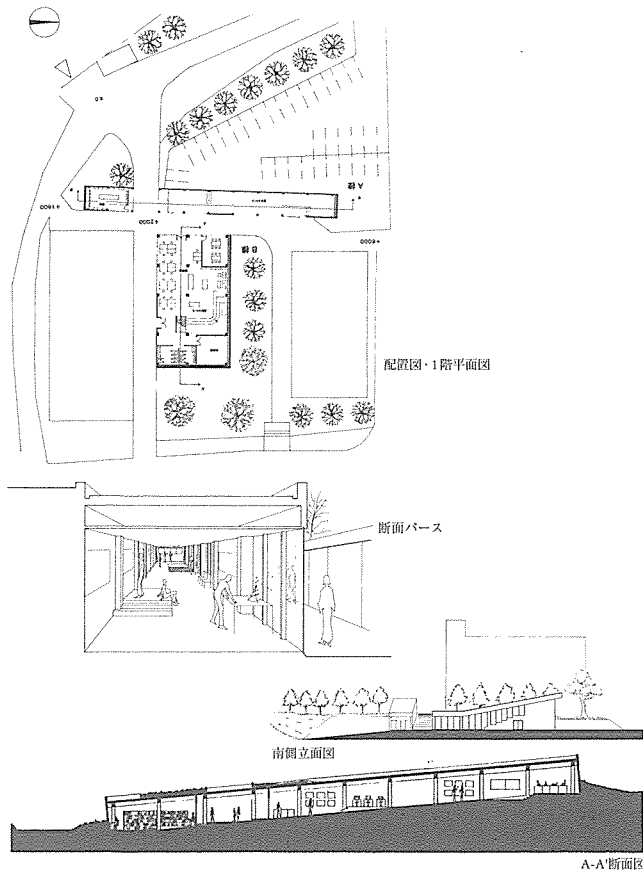
倉林貴彦 KURABAYASHI Takahiko



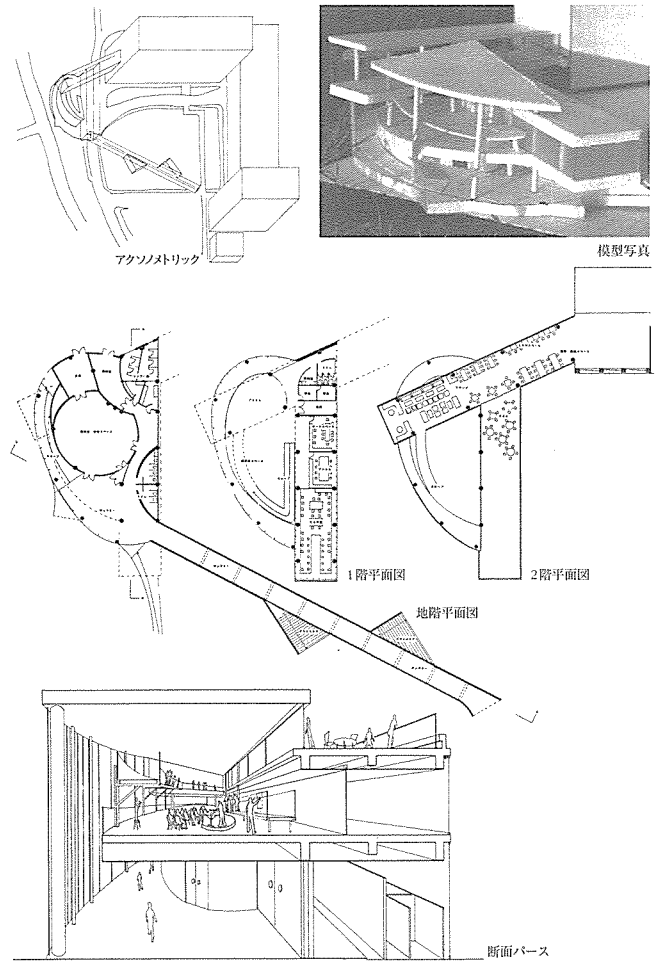
石原奈緒 ISHIHARA Nao



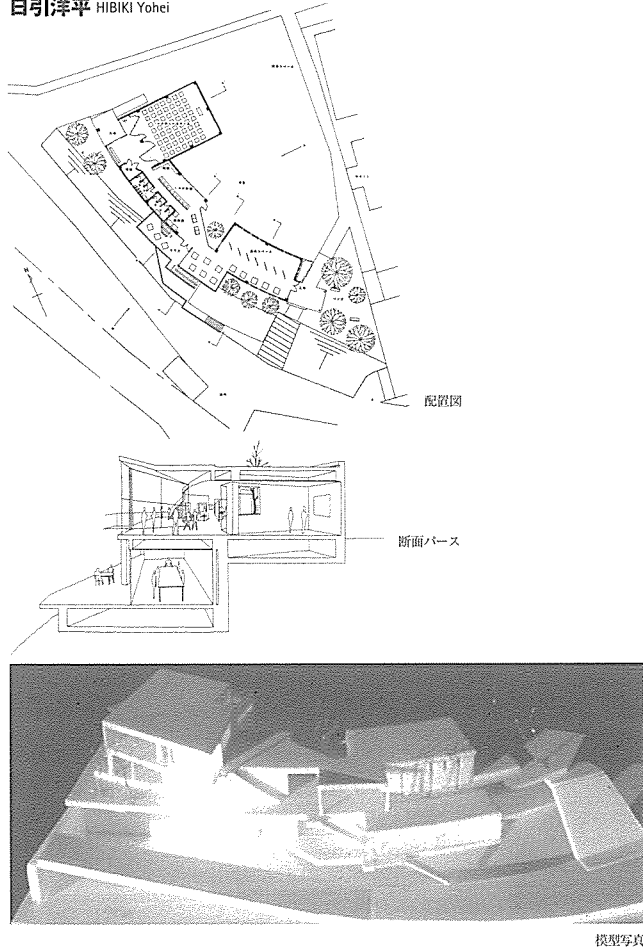
津守俊輔 TSUMORI Shunsuke



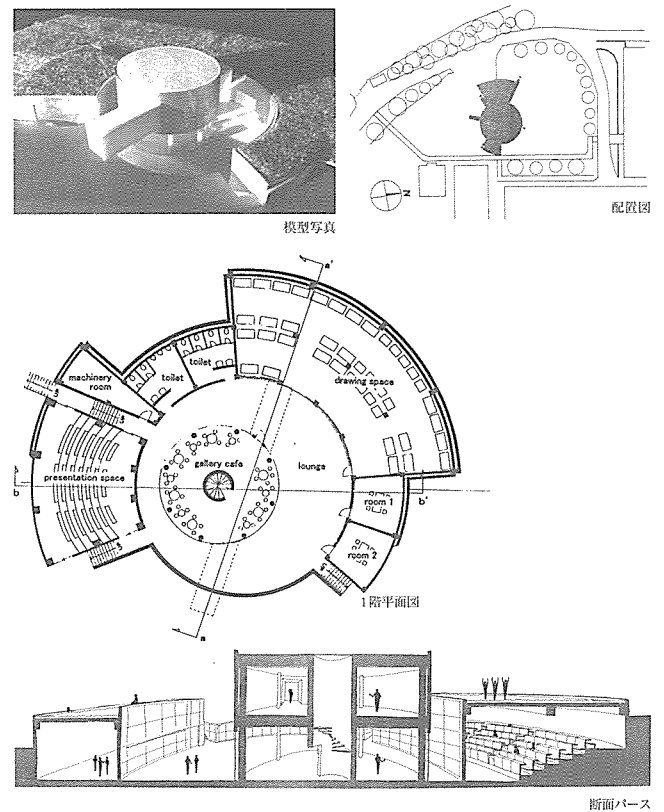
益谷哲郎 MASUTANI Tetsuro



日引洋平 HIBIKI Yohei



峰廣大輔 MINEHIRO Daisuke



建築設計製図第二/第2課題

Second-year studio Work: Autumn Semester

「都市と居住」

"City and housing"

担当:

八木幸二[教授] 奥山信一[助教授] 藤井晴行[助教授]

YAGI Koji (Professor), OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor), FUJII Haruyuki (Associate Professor)

那須聖[助手] 木下芳郎[助手]

NASU Kiyoshi (Assistant), KINOSHITA Yoshiro (Assistant)

[講評会]

青木義次[教授] 藍澤宏[教授] 大佛俊泰[助教授]

AOKI Yoshitsugu (Professor), AIZAWA Hiroshi (Professor), OSARAGI Toshiyasu (Associate Professor)

私たちが生活する都市にはさまざまな住まい方がある。例えば、一般的な住宅地と呼ばれる地域にある一戸建て住居、あるいは大規模な開発による集合住宅団地における住まい方もそのひとつである。しかし、もう少し都市に住むということを実感できる楽しい住まい方がありえないだろうか。そこでこの課題では、住商混在形式の都市型集合住宅を設計する。対象敷地は、以下に示した自由が丘駅近傍の住居と商業施設が混在しつつある地域である。それぞれの住戸内部のプランニングはもとより、住戸どうしの関係、住居部分と非住居部分との関係、街との関係、そして敷地の高低差などについて熟考し、豊かな発想力で刺激的な提案をしてほしい。

[課題の進め方]

課題は以下のように進められた。1.敷地の割り振りを決める。2.敷地模型をつくる(S=1/200)。3.基本構想をつくる(選定した敷地をいかに読むか、どのような建築的可能性があるか課題主旨をいかに解釈するか等)。4.基本設計開始。5.エスキースチェックを経て中間発表。6.さらにエスキースチェックを経て最終講評会。1から3までについては各グループ(8グループ、8人1組)ごとに議論し、その結果を統一コンセプトとしてまとめて発表した。また4から6までは各自の作業によって行われた。

[設計条件]

所用スペース:住居部分と非住居部分の比率は6:4程度を基本とする。住居部分(基本的に賃貸住居を前提とする。一住戸の規模は、25m²から60m²を目安とし、さまざまなバリエーションのある住戸を出来るだけ組み込むように努力する。)、非住居部分(業種内容は自由とする。)、駐車場(住戸数×0.7~1台分を確保すること。)。建築規模:原則として地上3階、地下1階以内とする。自由が丘という立地、施主の利益等を考慮し、リアリティを損なわないように注意すること。実際の都市計画規制は異なるが、今回は以下の条件とする。第1種住居地域、第2種高度地区/建ぺい率(建築面積/敷地面積)=60%(角地の場合70%)/容積率(延べ床面積/敷地面積)=150%/準防火地域

構造:原則としてRC造または鉄骨造。

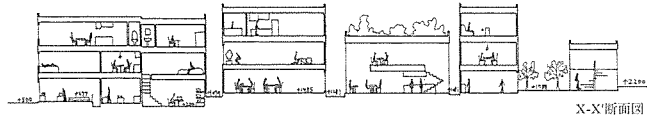
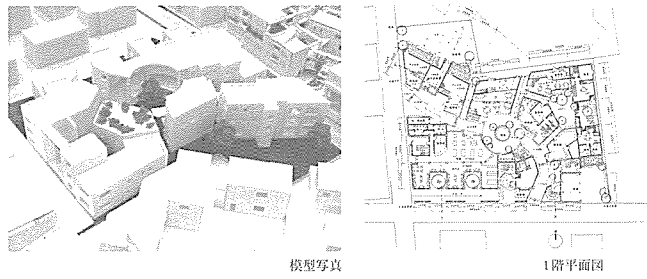
設備:基本的に個別空調システムとする。

法規:詳細については規制しないが、下記の項目については十分考慮すること。避難経路/最高高さ12m/各種斜線規制(詳しくは建築確認申請memo等で確認すること。)



以下は、1999年1月20日木本に行われた講評会の模様を、学生編集員の田中正洋[M2]がレポートしたものであり、文責は編集部にあります(敬称略)。

阿瀬真由香 ASE Mayuka

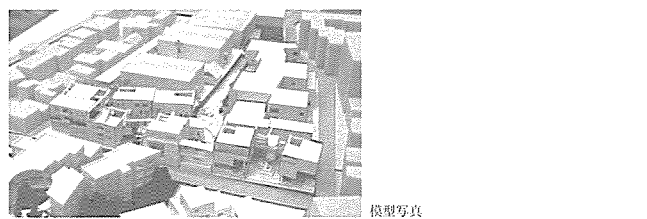
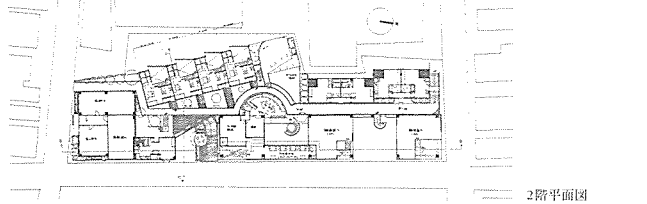


阿瀬(グループ1、敷地F)——グループでは横の空間よりも縦の空間を意識してもっと豊かな生活ができないかを考えました。敷地の2メートルぐらいのレベル差を利用して、坂道をたくさんつくりました。

奥山——平面で色んな工夫をするわりには、縦方向の計画が非常に単純すぎます。屋上も利用できるし、一番上の住戸はペントハウスのなものでもいいのかもしれない。オープンカフェとか、店舗が少し道にはみ出しているとか、道の境界線が曖昧になってるようなイメージの絵があってもよかったです。

八木——隣と繋げるともっと上手いきそうな場所もいくつかあります。これを最後の段階でひと工夫して、隣の敷地と合わせてうまく広場のになっているとか、そういう表現をすれば良かった。

石原奈緒 ISHIHARA Nao

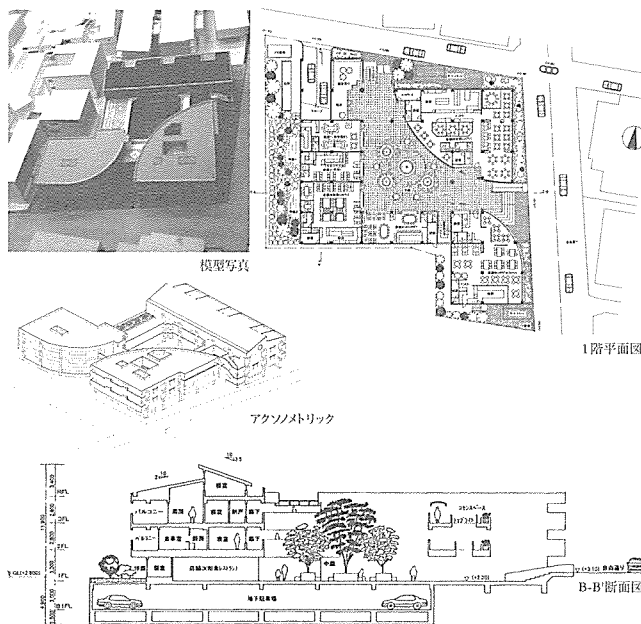


石原(グループ1、敷地D)——道を蛇行させたり、空中廊下があったりすることで、それらの場所を通ったときに視線が抜けたり遮蔽されたりするような変化のある場所になるように考えました。高いレベルにある共用の歩道からお店が曖昧に見えたりします。

八木——見えがかりをすごく気にして全体のプランをつくることは大切なことです。建築と周りがどう見えてくるかを考えることはすごくいいと思います。

大佛——平面図の描き方はもっと工夫できたかもしれません。縁があるものは一緒に図面にあった方が関係が分かり易いし、地面との関係も分かるようにしないとダメです。

梅田美鈴 UMEDA Misuzu

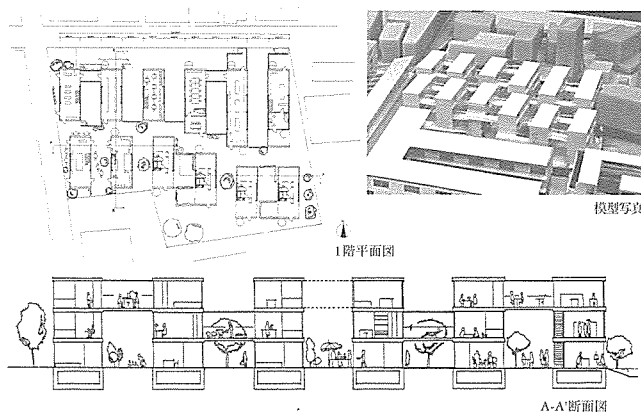


梅田(グループ2、敷地G)——グループ全体のコンセプトは、住戸に行くための繋ぎとなるような中間的なスペースをつかって、都市のエネルギーを吸い込もうというものです。商業部分と住宅部分に中間的な部分をつくらうと考え、両方の人が利用する中庭を囲む空間構成にしました。

八木——細かな図面の表現や、駐車場のなかの動線など、非常に気が配られている感じがします。優等生的な表現なのですが、なにかひとつもの凄いいこたわりがあってデザインしているという感じがしません。

藤井——他に人に比べて早い段階から決めていけるようなので、一旦案を固めてから、今度は同じ場所で少し遊びを入れたスケッチをもうひとつくらい描いたらいいのではないのでしょうか。

古閑めぐみ KOGA Megumi

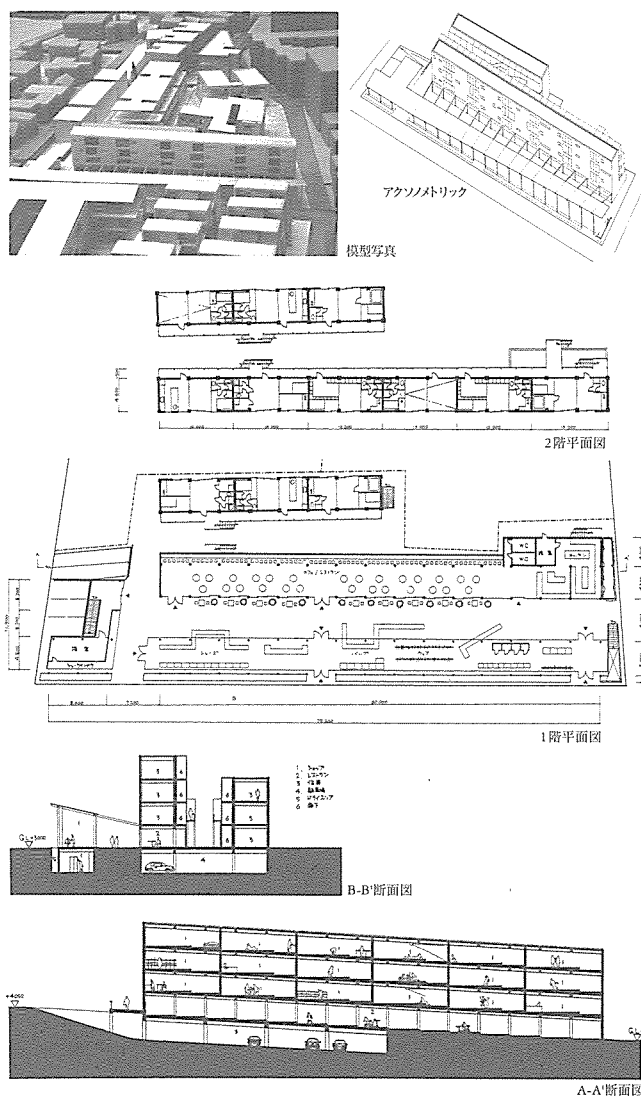


古閑(グループ3、敷地E)——建物のまとまりと住宅のまとまりのズレをつくることで、生活の場が建物の間にも広がり、街で道を歩くときに感じるような都市生活と建物との関係を、普段の生活の中にも取り込めるんじゃないかと考えました。具体的には、複数の棟を5mの間隔で並べてその間にブリッジを渡しました。

奥山——なかなか面白いと思いますが、隣り合う面が全部開放というのはしんどい。ある部分は壁にしたり、ある部分は窓にしたり、視線をコントロールするデザインを入れていかないと成立しません。

藤井——見せてもいい場合もありますが、だからといってさらけ出してしまってもいい場所にはなりません。

片柳恭志 KATAYANAGI Takashi



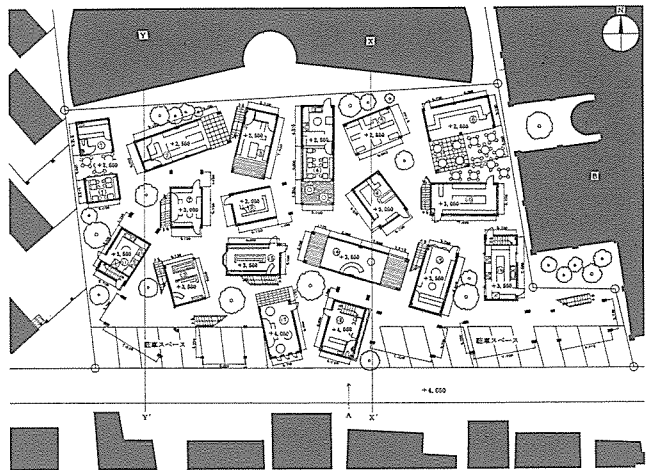
片柳(グループ3、敷地D)——敷地が長いので、長いヴォリュームを置いて敷地の長さを活かし、また27戸の住戸にそれぞれ特徴を与えました。

八木——とても上手いと思うのですが、このブロック全部を塞いでしまっているところに、通り抜けとかは考えませんでしたか？1階はどこかで隣の敷地に抜けれるとよさそうですが。

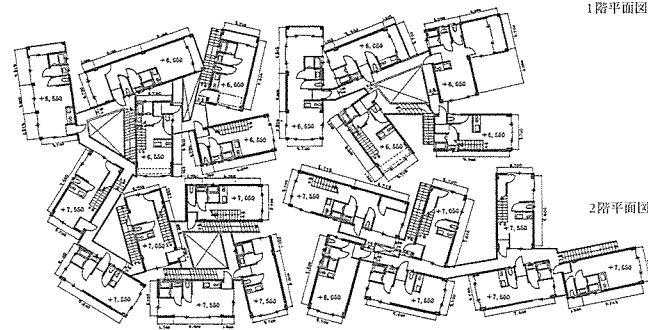
藤井——2方向避難することを考えると、長すぎて煙より早く避難することができないことがあるので、注意する必要があります。

奥山——細長い敷地で傾斜しているのを利用して、段状に建物を配置しているのは、なかなかいいデザインだと思います。ただ屋根をねじったり、幅を変化させるなど、もう少しできたようにも思います。どういう風に見えるかということも考えたらもっと良くなるのではないのでしょうか。

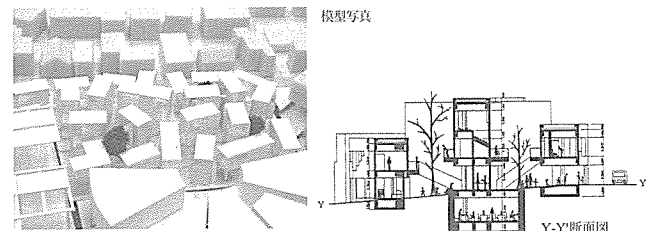
松村沙紀 MATSUMURA Saki



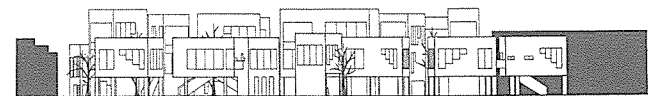
1階平面図



2階平面図



Y-Y'断面図



立面図A

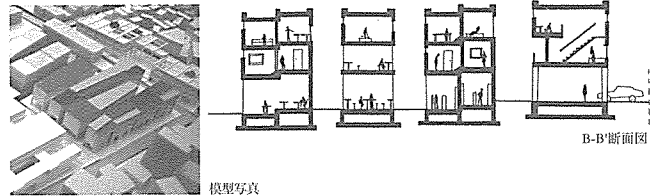
松村(グループ8、敷地C)——都市には、若い夫婦だけとか単身とかの小さな単位で住む人たちが多くを考えると、コンパクトな住戸を集合させました。店舗や施設が一階に入った小さなキューブ状の建物をにランダムに並べて、楽しい通りがつけられるような計画にしました。

藍澤——配置を決める根拠がよくわかりません。

藤井——模型で検討しながら平面図を描いていくのはいい姿勢だと思います。

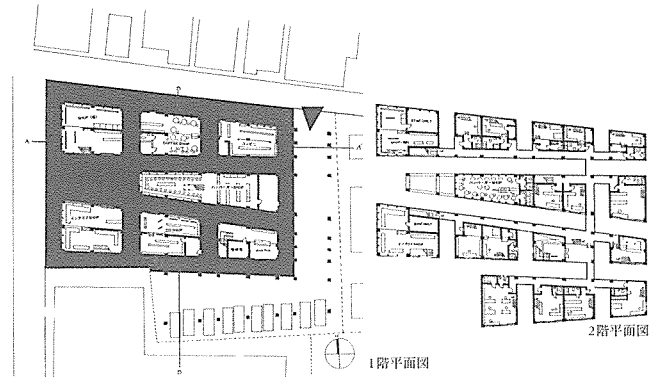
奥山——立面のイメージがいいし、模型もとても面白いのですが、平面詳細を見ると階段などのスケールがかなりおかしい。以前、増沢海の最小限住居をトレースしたのだから、その成果を活かしてください。

山口健児 YAMAGUCHI Kenji



模型写真

B-B'断面図



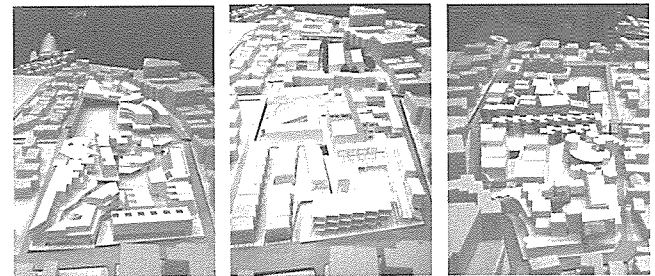
1階平面図

2階平面図

山口(グループ8、敷地E)——住人と商業施設を利用する人が、お互いに存在を感じつつも、干渉しない空間をつくらうと考えました。敷地の高低差を、商業地域の一階部分で棟と棟の間のデザインに活かして、おもしろい空間になるように計画しました。

奥山——基本的な構造デザインができていないように感じます。

その他のグループ作品



模型写真

模型写真

模型写真

【総評】

八木——今年から、広い敷地を幾つかに分けてグループで設計するという方法でやってみましたが、なかなか良い試みだったと思います。ただ、向こう三軒両隣の人たちが一緒に設計するというのは良かったんですが、途中から話し合いを思ったほどしなくなってしまったのは心残りです。こちらが意図していたことは、ひとつには、みなさんが話し合い啓発し合うことで、あまり落ちこぼれも出ないで、みんながレベルアップできるだろうということです。もうひとつは、これからは建築単体が良ければいいというのではなく、より広い視野でしっかり計画全体の環境を考えていかないと、建築が社会的に受け入れられない時代になってきますから、そのエクササイズとして違う意見をもつ8人が話し合えば、お互いに勉強になるということでした。しかし、全体の環境をどう考えるかという最初にグループごとに決めてたテーマはなかなか上手いかなかった気がします。それは残念でした。

建築設計製図第四/第1課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「ステーション・ミュージアム」

"Station Museum"

担当:

青木淳 [非常勤講師, 青木淳建築計画事務所]

AOKI Jun (Guest Professor, Jun Aoki & Associates)

坂本一成 [教授] **奥山信一** [助教授] **塚本由晴** [助教授]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor),

TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

寺内美紀子 [助手] **貝島桃代** [TA] **安森亮雄** [TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), KAIJIMA Momoyo (Doctor Course, Teaching Assistant),

YASUMORI Akio (Doctor Course, Teaching Assistant)

[ゲスト・クリエイティブ]

金箱温春 [金箱構造設計事務所代表] **城戸崎和佐** [城戸崎和佐建築設計事務所]

KANEBAKO Yoshiharu (Kanebako Structural Engineers), KIDOSAKI Nagisa (Nagisa Kidosaki & Associates)

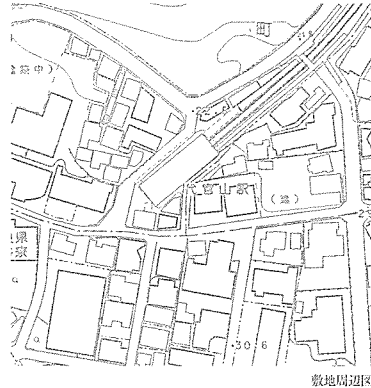
東急東横線の代官山駅の機能に美術館の機能を足した新しい駅=美術館を設計すること。

[課題1]

東急東横線の代官山駅の機能(ホーム、改札、駅事務所、トイレ、etc.)を変えないで、壁面総長さ100mのギャラリー機能を足して、駅を建て替えなさい。ギャラリーは企画展の会場として使われる。有料。ギャラリーの床面積は最大350m²。課題1では、美術館の機能として、ギャラリー以外の収蔵、調査研究、管理、教育普及、共用のための空間はないものとする。なぜなら、主眼が、駅とギャラリーの関係やそれらの組み合わせ方をスタディするため、であるから。及びどんなギャラリーが適当かをスタディするためであるから。まず、そこで開催しようと思うひとりの作家の展覧会を企画しなさい。その展覧会のためにどの作品を展示するか考え、選びなさい。その展示のために相応しい空間としなさい。

[課題2]

駅を全て建て替えること。ギャラリーの機能として、事務室20m²、収蔵庫20m²を加え、延べ床面積は最大400m²とする。そこで開催する作家は決めるが、常設展示ではない。他の作家も利用できるよう、大小の立体、平面作品の展示を可能とすること。



敷地写真

敷地周辺図



青木淳

AOKI Jun

1956年 神奈川県生まれ

1980年 東京大学工学部建築学科卒業

1982年 同大学大学院修士課程修了

1983-90年 磯崎新アトリエ

1991年 青木淳建築計画事務所設立

1994年「H」東京建築士会住宅建築賞受賞

1997年「S」第13回吉岡賞受賞

1999年「湯博物館」日本建築学会作品賞受賞

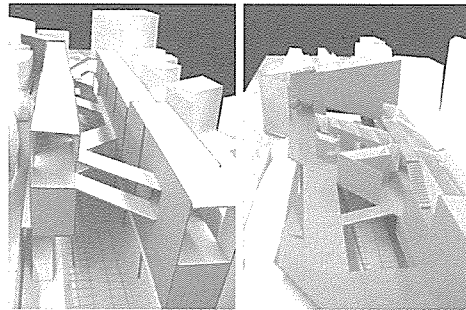
主な作品: 遊水館、湯博物館、御杖小学校、雪のまち未来館、LOUIS VUITTON NAGOYA、B

以下は、1999年11月5日(金)に担当教官にゲストクリエイティブを加えて行われた講評会の一部を、学生編集委員(谷川大輔「D2」)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

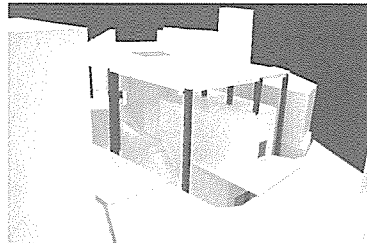
[講評会レポート]

この課題は、学生にとって身近な代官山駅をギャラリーとしての機能を持たせて作りかえるというものであった。まず課題1として、ひとりの作家を選びその展覧会を企画することを通して、ギャラリーと駅の関係がスタディされた。この課題では、各人が選定した作家のコンセプトに加えて、代官山というまちがもつ雰囲気を取り入れた展示空間が、駅との関係を考慮にいれながら、如何にリアルな空間として建築化されるかということが求められた。

また、道路や歩道に囲まれ、駅舎も含め規模の小さな周辺の建物がひしめく敷地の中で、どのようにヴォリュームをつくり、配置するのかがポイントになった。



左: 松田徹, 右: 齋藤理



高橋祐子

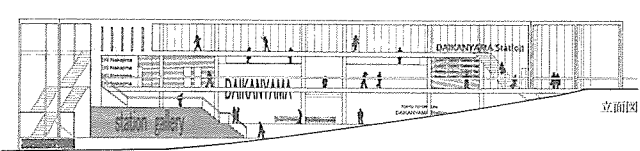
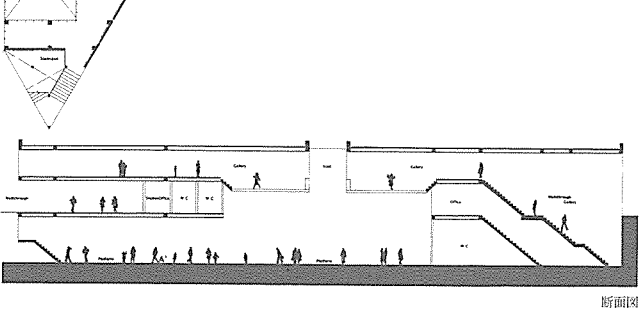
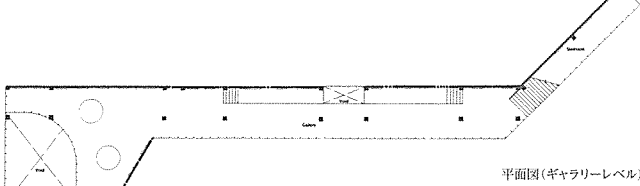
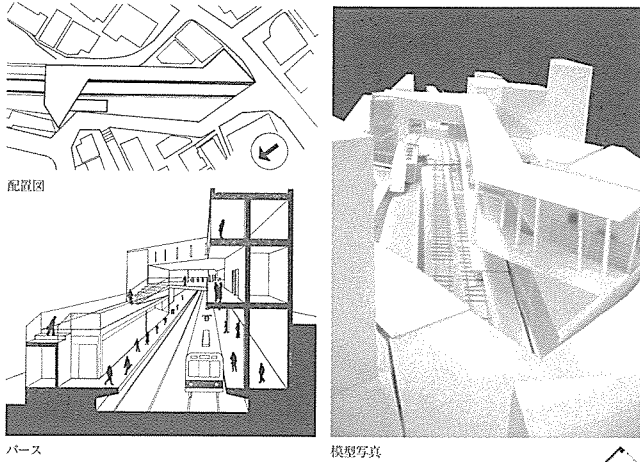
最終講評会においては、課題1の発表をもとに、駅の建て替え計画が発表された。特定のアーティストのギャラリーという形式は、ややもすると自立的で抽象的な「誰々美術館」になってしまう可能性を持っている。それは周辺環境からも切り離され、古いタイプの公共性を抱え込む建築である。けれども今課題は、むしろ代官山駅周辺の文脈を積極的に建築に取り込んで、都市の新しい公共性とは何かという提案を求めるものであったように感じた。学生の作品には、大きく二つの展開がみられ、ひとつは、代官山駅という敷地のもつコンテキストから想定される建築のヴォリュームを出発点としたもの。もうひとつは、作家の個性をふまえ、展示空間のイメージの具体化に重点を置くことを出発点として駅との複合をはかるものであった。今回は、メルボルン工科大学の学生(10人)が特別参加し工大の学生と競い合ったが、メルボルン工科大学の学生の方が、選んだ作家のコンセプトに対する意識が高く、プラットフォームや代官山駅の高低差を利用しながらミュージアムを構想しており興味深かった。

また、1/50という比較的大きなスケールでの模型を用いたスタディーは、展示空間と駅、周辺道路といった建物と周辺環境の関係をより身体的に把握する視点を学生に与えるものであり、大変に効果的であった。



最終講評会風景

神村英里 KAMIMURA Eri



神村——代官山の駅にタイポグラフィ作家の中島英樹さんのギャラリーをつくることを考えました。ギャラリーと駅を利用する人たちの動線は交わらないのですが、ギャラリーが隣接していることによって、駅を利用している人々にも、そこにギャラリーがあるということを感じてもらえるようになっていきます。中島さんのタイポグラフィで、駅全体を飾ってもらえればと思っています。

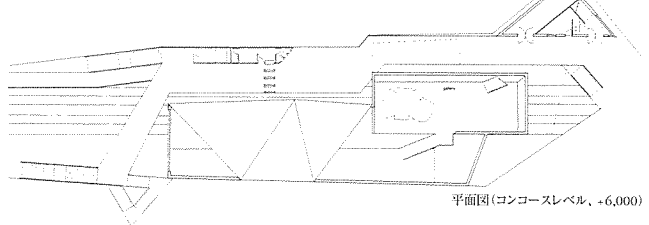
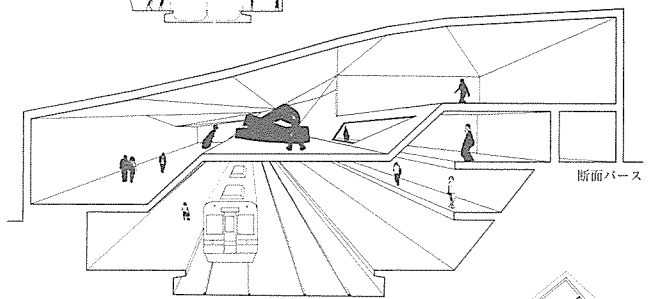
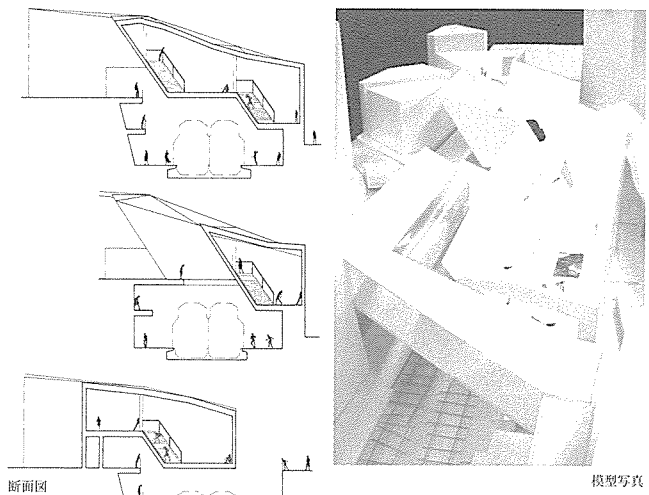
奥山——ギャラリー部分はかなり狭いよね。それは最初のイメージからあまり変わっていないんだけど、どのように考えているの？

神村——タイポグラフィは、そんなに距離をとって見るものではないと思いました。

塚本——人とタイポグラフィが重なることが面白いと思っているんだったら、もっと積極的にやらないといけな。例えば紙に印刷されたものと、透過光で見えるものと、映像と重なって見えるものなどは全然違うのだから。

青木——この案がいいのは、いわゆる駅に見えないということだと思う。ただ、問題点を挙げるとすれば、それはスケールの問題で、せっかく駅につくるんだから、他の場所にはできないようなものができた方が良く、もっとその場所の雰囲気みたいなものを考えたら建物の高さとかも変わってきたと思う。そうしたらもっと積極的に駅でもギャラリーでもない第3の空間みたいなものができたのかも知れないね。

倉方宏幸 KURAKATA Hiroyuki



倉方——敷地の東側が高く西側が低くなっているという点に目をつけて、ひとつのスロープでギャラリーをつくることを考えました。斜めの壁にすることによって同じ床面積でも広く感じさせることが可能だと思い、また屋根を折板で繋ぐことで段々と上がっていくイメージをつくりたいと思いました。

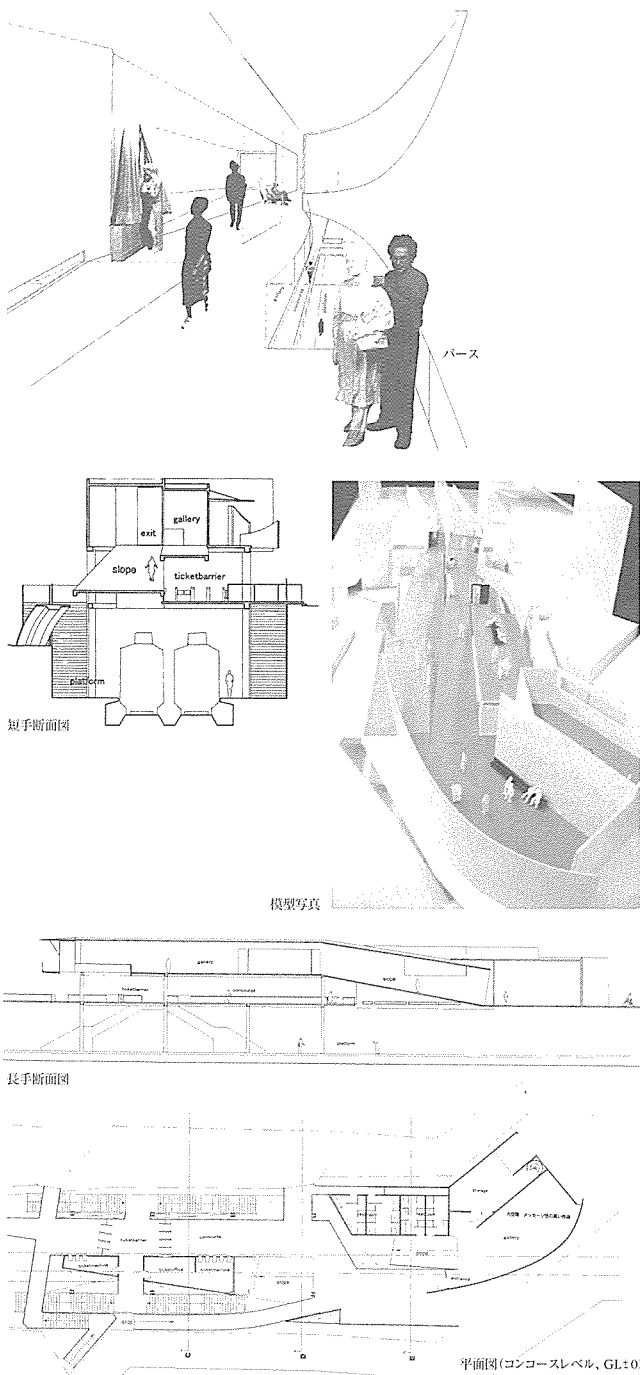
塚本——駅とギャラリーをもう少し一体化したかったね。ギャラリーが空中に浮いているような感じで独立してしまったのが入口のつくりかたにも現れている。

青木——一体化しないまでも、反対側に向かっているとか。ギャラリーとしてはうまくいっているのだから、むしろこれはかたちの問題だね。例えば、裏と表という関係をつくれる強烈な壁があるのだから、壁の裏側にいるというような感じもつくれるわけで、その壁を利用すべきだよな。

城戸崎——図面の方が空間の感じが出てますよね。上が屋根になっていて且つ、抜けて空が見えるというあたりが。ギャラリーが屋根になってくるのかなと思ったけれどそうでもない。

奥山——ギャラリーとしてこのぐらいの大きさは欲しいよね。みんな小さなギャラリーで、あれでは何にもできないような気がして。このぐらいのスケールはギャラリーとしてすごく良いですよ。

佐々木公也 SASAKI Kouya

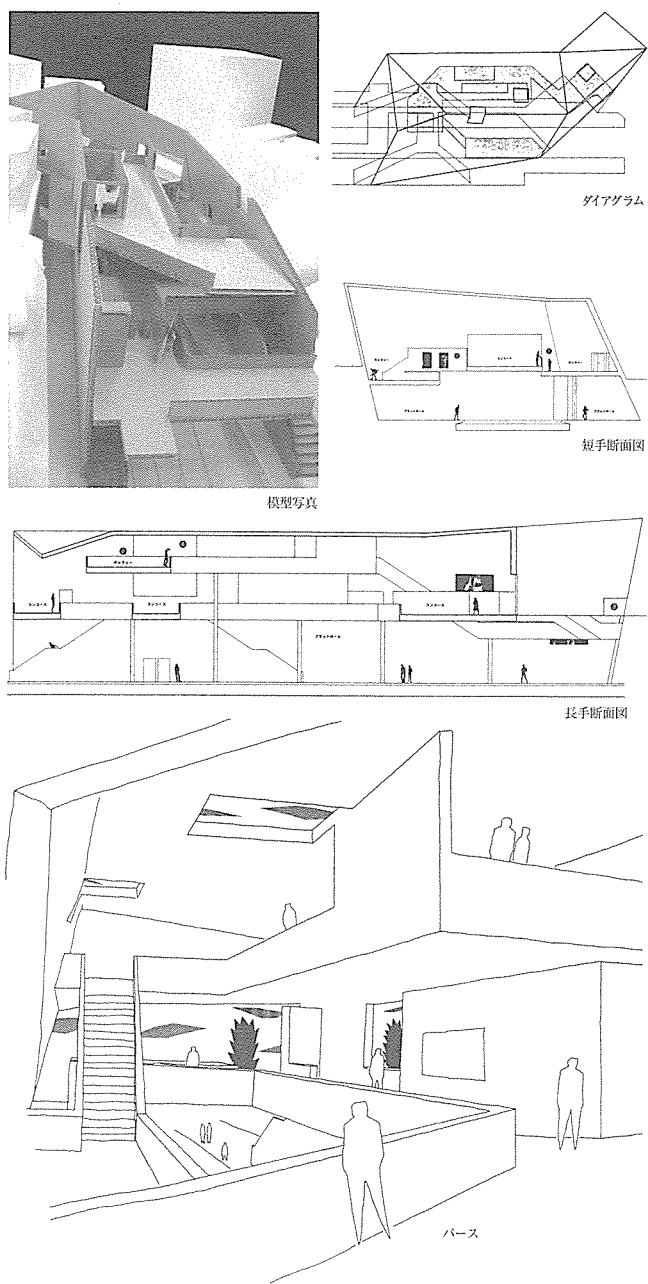


佐々木——駅のプラットフォームとコンコース等とギャラリーの違いを、人の歩くスピードの違いと考えて、駅の線路と平行に配置して歩くスピードで全てを感じられるようにしました。スロープにして壁をちょっと傾げるだけでかなり方向性ができてくるので、線路方向のスピード感などをギャラリーと同時に感じられるようにしました。またスロープの下がデッドスペースにならないようにしました。

青木——スピード感を表現するのは成功した？僕はあまりスピード感を感じない。空間の抜け方が足りないのかな。空間の感じがたかくなってる。でも構成そのものはすごくうまくいっている。ギャラリーとしても良い。

奥山——君はかたちをある感覚で決めていると思うんだけど、その不思議なかたちや、角度のつくり方はどうやって決めているの。基本的にはかなり上手いと思うけど。

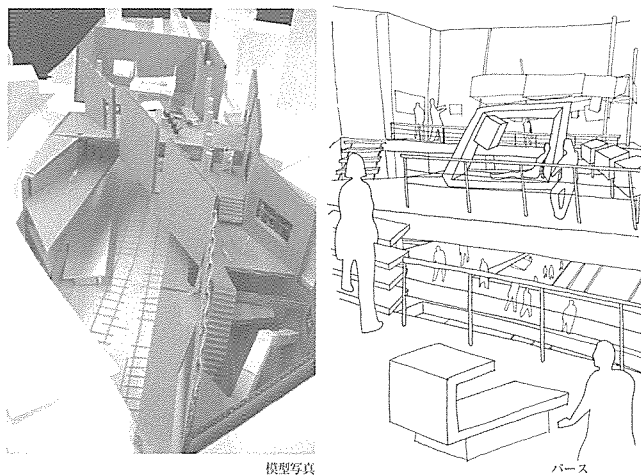
平林政道 HIRABAYASHI Masamichi



平林——駅の持つ要素がそのまま入り込むようなものを考えました。具体的には電車の音とか人の流れがギャラリーに貫入してくる構成です。マッシブな量感の強いボリュームになってしまったので、住宅地に対しては屋根を削って、商業地に対しては屋根を目立たせるようにしました。スロープの方に対して圧迫感を無くしたかったので空に向かって斜めの壁にしています。

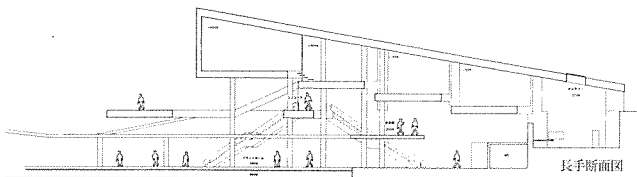
青木、塚本——うん、それが成功しているんだよね。
塚本——音響が良さそうだね。壁がいろんな方向に曲がっているから。
青木——エスキスチェックのときに彼は駅の中にギャラリーがくると、ギャラリーが貧弱になると言っていたけれど、それが今回は改善されてきているね。だからといって駅と全く分離してしまわず、それをうまくやっている。それはちょっとした壁のつくり方とか、深さとかでうまくいっている。特に下に行く方がうまくいっていて、上の方はまだちょっと弱いね。

三井祐介 MITSUI Yusuke

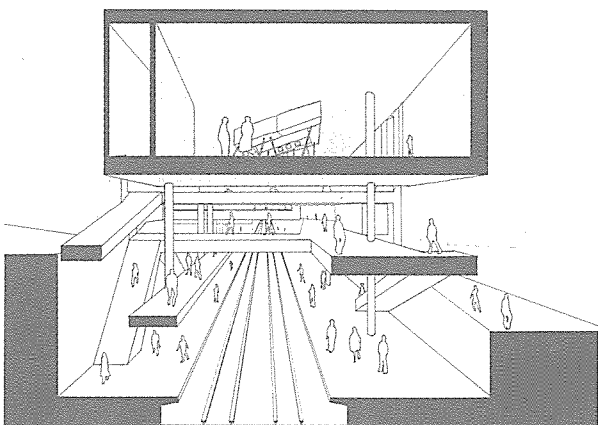


模型写真

パース



長手断面図



断面パース

三井——雑壇状にギャラリーをつくったんですけど、駅の方は3層になっ
ていて様々なレベルで切っています。それとギャラリーのフレキシビ
リティを、天井高とかスペースの広さだけでなく、駅の機能や電車や
プラットフォームとの関係、密度の変化で考えています。ギャラリー部
分を動線のための空間にせず、部分的に広がるようにつくりたかった
ので雑壇状にしました。また深いところを使ったかったので段々と繋
がるようにしました。

奥山——ギャラリーはオープンエアなんですか。

三井——はい、空気的には繋がっています。構造は魚の切り身みたい
に全部独立しています。

青木——雑壇のスラブだけあるようなのを考えていたからね。これが
一番良いところは床だけの構成で徹底しているところ。

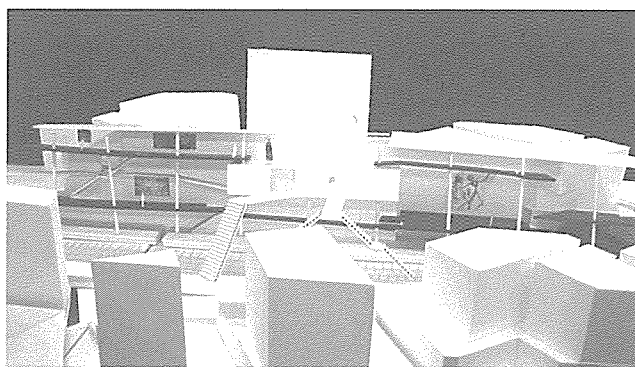
金箱——しかし、これだけ建物をぶつ切りになると、構造的にはかなり
厳しいね。

塚本——プログラムの中での重心の置き方がまずあって、その繋ぎ
方もうまくいっている。

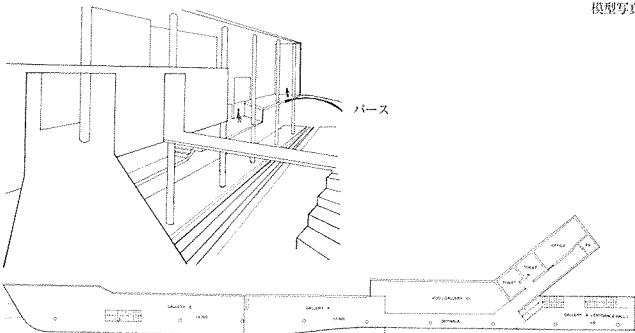
青木——そうすると、全体を使っているという感じができる。全体を使う
と他のものと絡んでくるからね。完全に分離している人が多いんだよね。

塚本——構造のことを考えていけば必ずしもスリットを入れなくてもい
いのかも。壁とスラブの話が一致しなくてもいいんだよ。

村山雅成 MURAYAMA Masanari

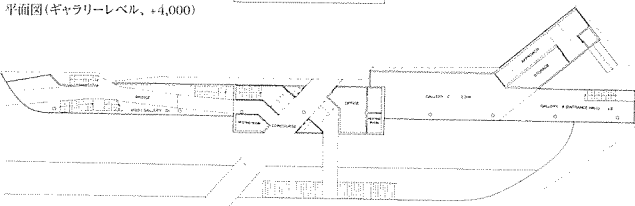


模型写真



パース

平面図(ギャラリーレベル、+4,000)



平面図(コンコースレベル、GL±0)



長手断面図

村山——駅の存在自体がギャラリーの空間を決めるような構成で考え
ています。ボリューム自体を片方のプラットフォーム側だけに収めてい
ます。片側に寄せることで電車を挟んで美術館の方が見えるというの
も、駅との関連性で面白いと思いました。

青木——片側に寄せるという案は他にもあったけれど、ガラスを使わ
ないで駅と美術館の関係がうまれるようにできるとよかったかもしれ
ないね。

塚本——これは巾がないから、部分的に巾をかせぐ平面的なアンデ
レーションがあった方がいいんじゃないかな。

青木——塚本さんが言うように、駅も美術館と無関係な物としてあつた
方がより平面的に良くなるかも。そして一度壁を付けて、壁を開けると
か、出っ張らすとかということがどういう効果をもたらすかという事もね。

【総評】

青木——今年は課題をステップごとに毎回変えて、短い時間でしたが、
一つ一つのプロセスのなかで、皆さんがどれだけ進歩してくれるのか
を期待していました。結果としては、代官山の駅という限定された場
所でしたが、当然皆さんの考えるコンセプトはそれぞれ違うわけで、
ある意味で同じようなことを考えた人は、やはり同じようなかたちしか
でてこなかったという印象をもちました。

建築設計製図第四/第2課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「ライブラリー」

"Library"

担当:

高橋晶子 [非常勤講師、ワークステーション]

TAKAHASHI Akiko (Guest Professor, Workstation)

坂本一成 [教授] **奥山信一** [助教] **塚本由晴** [助教]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor), TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

寺内美紀子 [助手] **貝島桃代** [TA] **安森亮雄** [TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), KAJIIMA Momoyo (Doctor Course, Teaching Assistant), YASUMORI Akio (Doctor Course, Teaching Assistant)

[ゲスト・クリティーク]

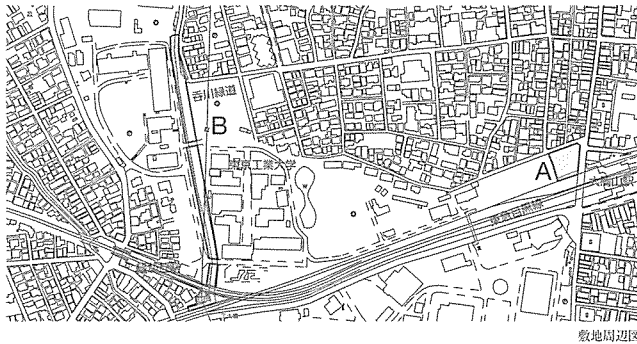
金箱温春 [金箱構造設計事務所代表]

KANEBAKO Yoshiharu (Kanebako Structural Engineers)

今日、ライブラリーは文字中心の本だけでなく、ビデオやCD-ROMなど、書籍を越えた広いメディアを使って情報をやりとりする場所に変わりつつあると思います。ですから、この課題では、静かにすわって本を読むという前提を考え直して欲しいし、また、ライブラリーに参加するということを考えて欲しいです。つまり、情報を受け取るとそれに対して個人やグループで何らかのリアクションをおこすという意味で、一方的に情報を受け取るだけではないということです。また提案する上で、人間の身体的な感覚に注目して欲しいのです。例えば本を読む、あるいは別のものを見る、聞くといった、私たちの基本的な行為に対して快適な環境条件をイメージしてください。同じ高さの本棚が平行に並ぶ場所なのか、あるいは一人用の本棚にかこまれて読む場所なのか、というふうな本棚と読む人の関係から設計が始まるかもしれないですね。

東工大の敷地の境界にA、Bという周囲の環境や形状、広さの異なる場所のどちらかを選んで、情報化社会の地域的なステーションとなるライブラリーを提案してください。建築をつくるということは、A、Bの環境を読むという当然のことや、図書館はどういうところだろうというビルディングタイプに対するスタンスの持ち方から、今挙げたような基本的な行為を深めることで、出てこざるをえない身体的なものまで含めて考えることであり、そういったことに注目して設計してもらいたいと思います。

以上、1999年11月8日 [月] スライドレクチャーより抜粋



敷地周辺図



敷地A: 大岡山



敷地B: 緑が丘緑道



高橋晶子

TAKAHASHI Akiko

1958年、静岡県生まれ。1980年、京都大学建築学科卒業。1986年、東京工業大学博士課程修了後、篠原一男アトリエ(1988年まで)。1988年、高橋寛(共同者)とワークステーション設立。

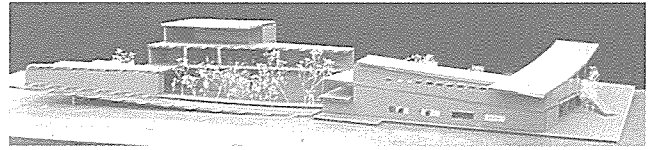
主な作品:高知県立坂本龍馬記念館(JIA新人賞)、横浜市仲町台地区センター(横浜まちなみ景観賞)、大沢野町健康福祉センター(中部建築賞)、岐阜県営住宅ハイタクン北方(高橋棟)(全日本建設技術協会賞)、佐川町立桜屋(グッドデザイン賞)、麻布大学獣医臨床センター、横浜市磯子地域センターほか

以下は、1999年12月6日 [月] に担当教官にゲストクリティークを加えて行われた講演会の一部を学生編集員(川上正倫・D1)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

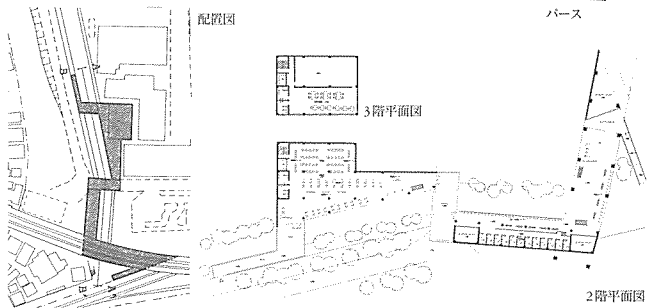
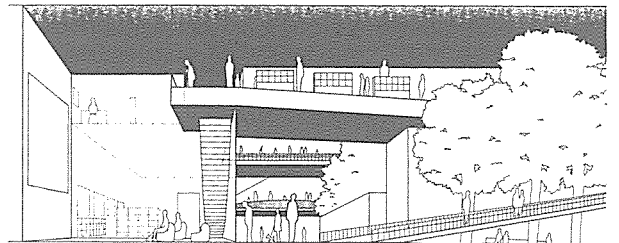
[講演会レポート]

今回の課題は、自分のイメージや作りたい図書館に合った敷地を選択するというので、どの作品も緑道や鉄道の高架、大岡山駅、敷地のレベル差といった周辺環境の読み取り方、関係の取り方などに対して、優れた提案がなされていたと思う。また、音や光といった視覚・聴覚に訴える環境要素や、本棚などに囲まれて一人になれる空間を設けるなど触覚・身体感覚に対する機能的提案も積極的に取り組まれていたと思う。しかし、一方で、建築を作るという意識が周辺環境の読みとりや感覚的な刺激を与える機能に集中してしまっていて、形態と機能のつながりに関して、建築物として説得力のあるレベルまでには達していなかったと感じられた。

岩永文英 IWANAGA Fumie



模型写真



2階平面図

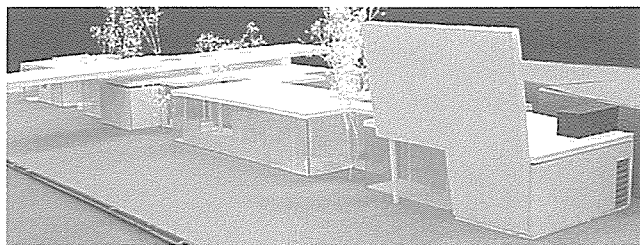
岩永——緑道と大学の関係というのは、比較的行き来がなく分断されていると思ったので、大学の方から高架下を抜けて、緑が丘の駅のほうへ抜けるような、道を緩やかに作って、さらに、原子炉研の隙間とか、自動車部の隙間に図書館を埋め込んでいきました。オーディオルームは緑道からと図書館からと両方から見えるように考えました。オーディオルームは音がメインの部屋ですが、割と図書館というのは、子供を集めてお話会などもあるので、そういった別の用途にも使えるかな、と思って作りました。

高橋(晶)——そのオーディオルームというのは、マルチルームみたいな感じですね。

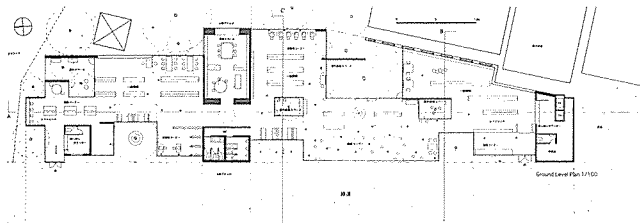
塚本——電車も通るし周りからの音がうるさくありませんか。

高橋(晶)——現実的には一樣ではない場所なんですね。そういう場所に配置する部屋の種類に意識的になったら、環境音に対してガードすれば、むしろすごく積極的に閉じたボックスになる。模型では、どこも同じような環境をつくっているように見えるのですが、その差が強調されながら、あるまじりがつくれると良いと思います。

三井祐介 MITSUI Yusuke



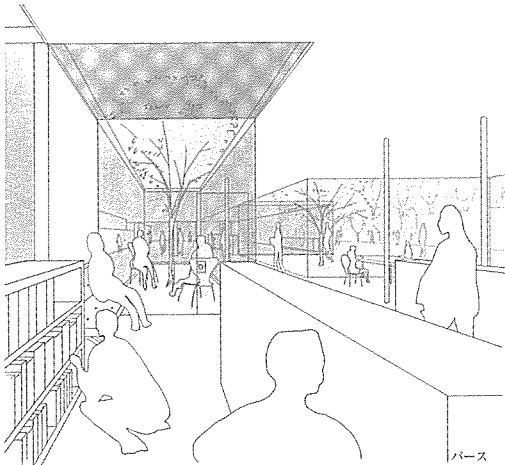
模型写真



1階平面図



断面図



パース

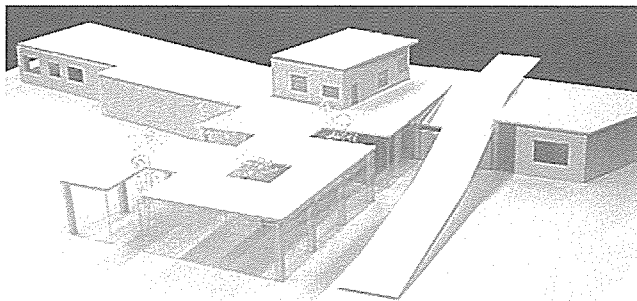
三井——原子力研と緑道との間にある既存の樹木を緑道に取り込むために、壁のレイヤーを何枚か建てていくことで、緑道が浸透してくるような図書館にしたいと考えました。また、既存の樹木のようにランダムに柱を立てることにより空間の密度を変化させ、無梁スラブを分散させたコアで受けることで水平力を分担させる構造にしました。

塚本——壁が多いですね。美術館とかならいいけど。建物を通して向こうが見えたりした方が良くないですか。

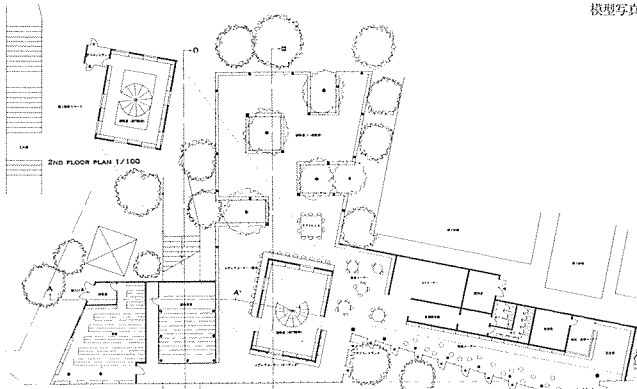
金箱——構造の説明はとっても良いね。他の人のほどこをとっても同じでしょ。彼の場合はメリハリがある。コアと鉛直荷重を支える架構の組合せというのは、非常にいいと思いますけど。ただ書棚がこう規則的に並んでいる中に、柱をランダムに並べると言うのはどういう意味があるのか。

坂本——もうひとつストーリーがあると良いと思います。ストーリーと言うのは、レファレンスが二カ所あるでしょ。それがこっちの入り口とこっちの入り口だから二カ所なんて言うのではなくて、例えば、理工系の図書と文化系の図書がわかれていて、でもお互い浸透しあっているとか、しかもそういう場所がどういう意味なのか、ということを読みとれるような物語を作って欲しい。

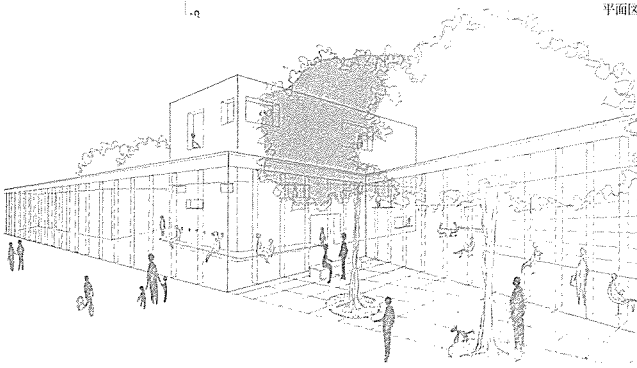
卜部祐加 URABE Yuka



模型写真



平面図



パース

卜部——図書館はなるべく低く作りたかったので、主に平屋で作りました。本を読むスペースということで、緑道に面している方をちょっと動きのあるスペースとし、奥の方に入っていくと静かなスペースにしてあります。東工大から入っていく棟の中は本棚に囲まれたスペースで、ところどころ壁とか本棚がくり抜いてあって、そこから見える景色が方向とか高さとかによって多様になるようにしています。

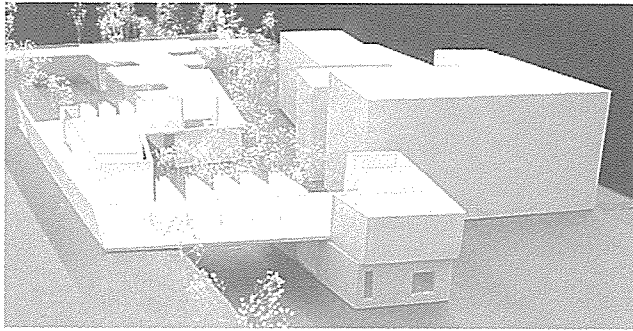
高橋(晶)——構成がはっきりしているし、シャープな表情になっていて、その適度な分節は面白いけれども、柱の置き方が不思議だね。

塚本——この作品がいいのは、全体を考える時に何か所か中心を作って、それで既存の環境を図書館用にアレンジしているところだと思います。

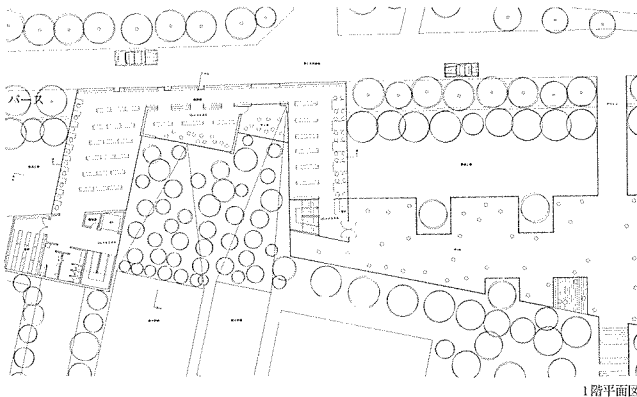
高橋(晶)——一週間で変えたんだよね。どんどん変えていったということで、そういうプロセスは評価していいなと思います。

金箱——ただ、構造に関しては、構造の仕組みを模型に反映していないんですね。平らな屋根をのせたいというイメージだけで模型をつくっているように見えます。構造をしっかり考えることによって、空間的にも魅力的になっていくと思います。

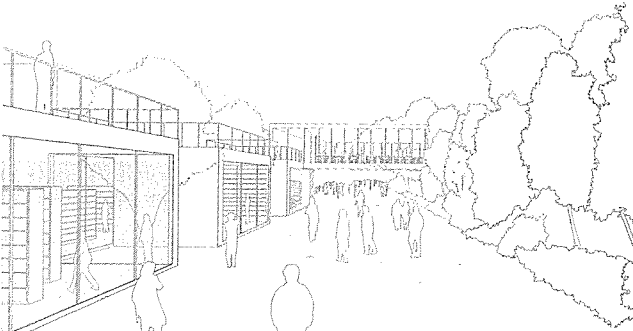
倉方宏幸 KURAKATA Hiroyuki



模型写真



1階平面図



パース

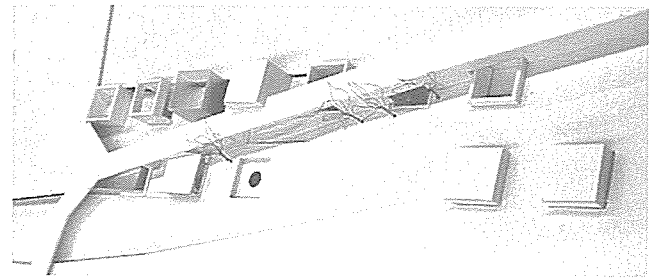
倉方——緑道の敷地を選んだのは、木の中で本を読みたいと思ったからで、木の下に行ったり上に行ったりという感覚の違いを感じられるようにブリッジをかけました。さらに、原子炉研の建物に引きをとって、その壁面に映写できるようにし、映画の上映会などをできるようにしました。

高橋(晶)——屋根と床を同じように表現してるけど、この辺の扱いが曖昧ですね。床は物や人が乗ることを考えなくてはならないから、床の加重と屋根の加重は違う。ボード一枚でぺろっと模型ではできているけれども、実際にはもうちょっと厚みがでてくると思います。あと建物内部へのアプローチを考えてみて下さい。ヒンジプランの様に本当に一点で交わっていてそこだけで上下に移動できるような考え方というのは面白いのだけれど、建築として成り立つかどうかというのは別の話だと思います。

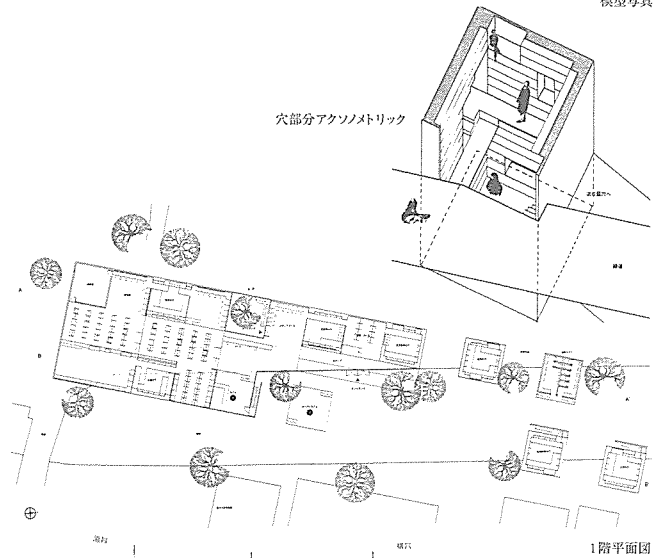
塚本——1階の事務室側エントランスともう一カ所のエントランスが離れていて、その間を行き来するために2階に上るか、外を回らなければならないようだけれども、この二つのエントランスの間に裏方の動線として渡り廊下のような空間を付属させることが必要ではないのかな。

倉方——渡り廊下をつけてしまうと、「緑道という大きな軸線から大学敷地側に入ったり出たりする」というコンセプトが崩れてしまうと思い、建物内部で裏方動線を処理するようにしました。

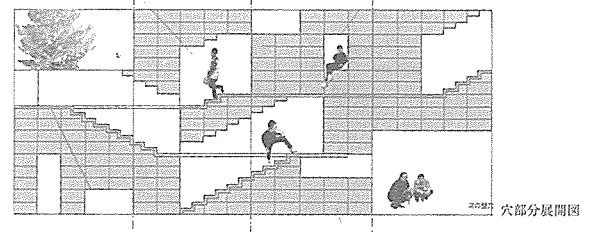
高橋祐子 TAKAHASHI Yuko



模型写真



1階平面図



穴部分展開図

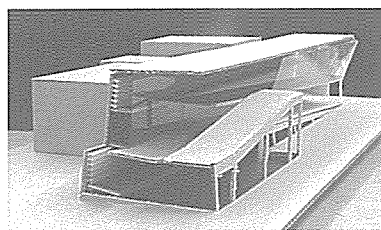
高橋(祐)——大学と住宅で挟まれた緑道に、一つのまとまった図書館を建てるというよりも、形の見えない建物を作って、緑道の場の流れを変えるようなことをやってみたかったので、ランドスケープとして考えました。まず、道からちょっとそれた軸を作って、それにそって12個の四角い穴を割り振って、スラブを道として差し込み、下の方でつなげるようにしました。差し込んだスラブは少しずつ下がって、閲覧室が連続するようになっています。

高橋(晶)——これが平面図ですって言うても、その中でどんなふうにかが置かれたり、動線が展開していくのかっていうのが情報としてないので、わかりにくいですね。プレゼンとしても、モデルが1/200、図面も1/200でみんながプレゼンする情報よりも、質量も半分になってしまう。それが残念ですね。

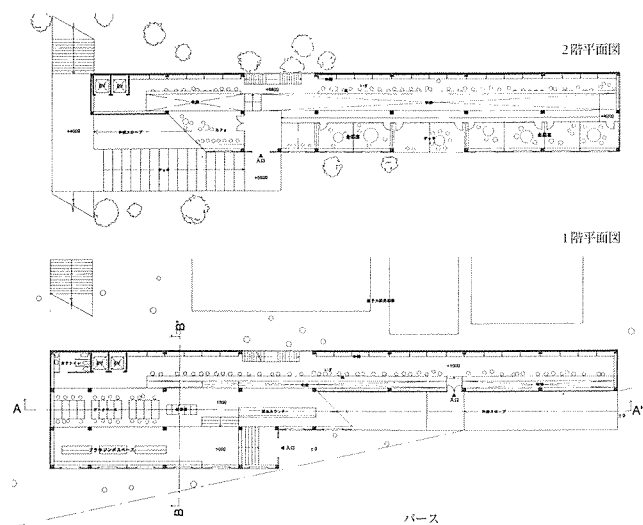
奥山——これは僕はいいいアイデアだと思う。だけれど、こんなに雑に図面を仕上げ、これでいいんだと思われたら困るんですよ。建築じゃなくてデザインワークみたいな感じで、コンポジションだけがある世界にしかならないと思う。

高橋(晶)——穴の中に入っていった時のイメージをアクソノメトリックで表現してくれたのはいいけれど、アイレベルのものも描くといいと思います。共感されるイメージ、共感の密度が違ってくると思います。自分のアイデアをうまく相手に伝える努力をしましょう。

鈴木悠子 SUZUKI Yuko



模型写真

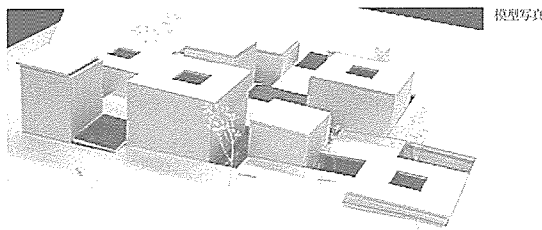


鈴木——ライブラリーができることによって、緑道が3本になると考え、その3本をつなぐとともに、もとの緑道から分岐した新しい緑道が建物の中に入っていくと、そのまわりが全て図書館になると考えました。長さ60メートルの本棚の壁のようなものを作って、本棚を眺めることも楽しめるようにしました。逆に、図書館の人は斜めのスロープが貫入することによって同じレベルにいても違う視線が得られて、真っ直ぐだけと視線の違いによって様々な場所ができるようにしました。

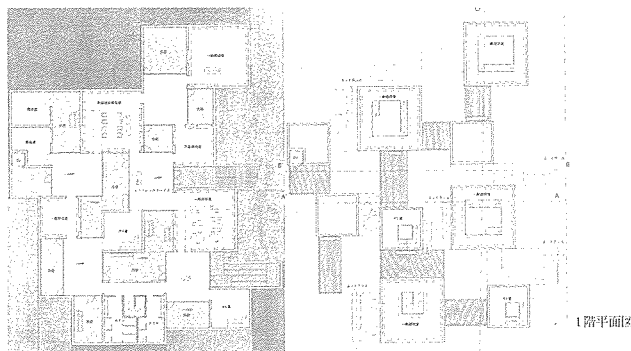
高橋(晶)——スロープの空間に展示空間があって、いつも同じ背景紙があるというんじゃなくて、本を紹介するというようなスペースにした方が面白いんじゃないかと思いました。例えば同じジャンルのあるシリーズの本があるとしたら、それをきれいにカバーするとか、またある人のコーナーにして、この人についての本がこれだけあるとか、移り変わっていったら面白いのかなと思いました。でも、あなたは全然提案してない。これは勝手に私が考えたのですが、まあ、こういう場所つくるんだったら、そういう本の紹介のしかた、ライブラリーに入っていく目的を持たない人でも、プラッと入って歩いて楽しい場所になったらいいなと想像しました。

金箱——構造を考えたときにもっと一体性を出すといったことは無いのでしょうか。この断面を見ると、床が切れているから柱立てないで床が落ちるなと思って入れているだけのように思うのですが。

齊藤元嗣 SAITO Chikashi



模型写真



地階平面図

齊藤——現在は大岡山駅前と敷地をつなぐ場所がレベル差や壁で分断されているので、スロープでその分断を取り除き、半分埋めたボリュームの一部を接触させることによって、フィルターがかかったようになんとか奥の方が見えていくという全体構成にしました。内部空間は機能に応じてボリュームを小さく分割して、マッシブで閉じた空間と開かれた空間を対比させました。閉じた部分は隙間的な場所であり、読書空間として機能させ、人の流れの激しい大岡山でプライベートな領域を作り出そうとしました。

高橋(晶)——ユニバーサルデザインじゃないんだね。ハンディーキャップの人にもエントランスをつけましょう。

坂本——非常に面白い。コンセプトが特に面白い。でも、問題はいろいろあって、それをどうやって現実にするか、現実をどう獲得するかというのは、あなた自身がより深く構想することだね。

[総評]

高橋(晶)——コンセプト(テーマづくり)からプログラミング、それからデザイン能力、プレゼンテーション能力っていうのが全て抜群に良い人もいなかったし、逆に、全部ダメな人もいませんでした。テーマづくり、アイデアに関してものすごく面白いものを出したものの、それが建築にならなかった人やプレゼンテーションで評価されずに終わった人と、またそれとは逆に一生懸命図面をきれいに描いてはいるんだけど提案とかテーマづくりに弱い人とは、はっきりとは言いにくいけど二分されていたように思います。

前者(アイデアが評価されたが実現に至らなかった人)は、途中で思考を中断してしまったのか、他にない形式を強引につくった時点で安心してしまったのではないかと思います。アイデアが本当に成立するかどうかは、自分の今の知識だけでなく、図書館に足を運び、違う立場の人から見るということを通して判断される問題です。そういう人は同じような講評を言われるのを避けないと、卒業設計をしたり、社会で設計をする時になって、かなり批判されるはずですから。自分の生み出した形式をどうやって、ホントに守っていけるのかということを考えてみてください。自分の形式に対してクレームやオーダーがかかっても、しつこく考えて行く必要があるんだということを、今はあまりわからないとは思いますが、認識して設計を続けて欲しいと思います。

1999年10月から12月までの12週間に渡って、ロイヤルメルボルン工科大学建築学科(以下、RMITと記す)の学生(10名)が建築設計製図第四に参加した。この試みは同校との新たな交流協定締結に向けての第一歩であり、非常勤講師の協力もあってプログラムは円滑に進められ活発な授業となった。以下に、RMIT側の助手として学生交流に参加した、ナイジェル・バートラム(RMIT講師 NMBW)氏とマリカ・ネウストブニー(M2 NMBW)両氏によるレポートと学生作品の紹介を行う。

rmit@titech

RMITの学生は、RMITの企画による東京についての都市研究と並行して東工大の設計課題に参加した。時間的スケジュールが厳しかったにも関わらず、研究と設計は互いに影響し合い、どちらの水準も高かったことに対して、私たちは感動した。学生たちは緊張に満ちた、しかもリソースに恵まれない環境のなかで共

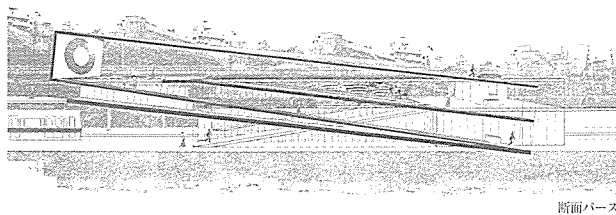
に生活し、プロジェクトを進めた。

東工大の設計課題は、RMITでの課題に比べ小規模でありながら高度にプラクティカルで複雑であった。RMITの建築学科は現在「形作り」のプロセスよりも美術や理論に注目している。しかし、学生たちは言葉の問題もあって、自分の提案をそのまま理解してもらうために長々しく理屈っぽい説明なしに、簡単に通じる形で発表せざるを得なかった。そのうえ私たちはメルボルンの学生たちが実体的な課題にチャレンジするのは、新鮮で自由を感じると同時にかなり困難であろうと予測していた。とりわけステーション・ミュージアムの場合、建築の外観とは関係なく(問題)は何なのかということをはっきり掴めないプロジェクトが成立しなかった。最初の週からいきなり1:50の模型で建築にコミットすることは学生にとってショックだったに違いない。

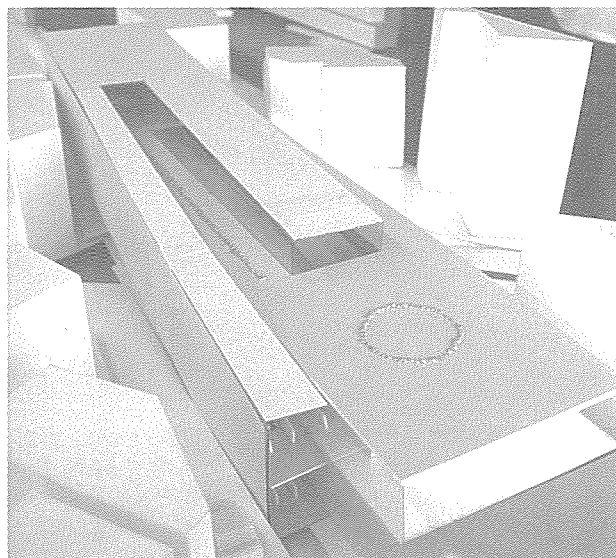
交換が一人だけでなく10名で行われたことはこのプログラムに特別な色合いを与えたと思う。一人の学生が単独留学で新しい文化環境に入るのとは全く異なり、

青木課題

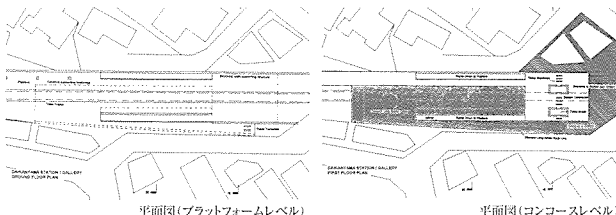
エリカ・ディアコフ Erica Diakoff



断面パース



模型写真



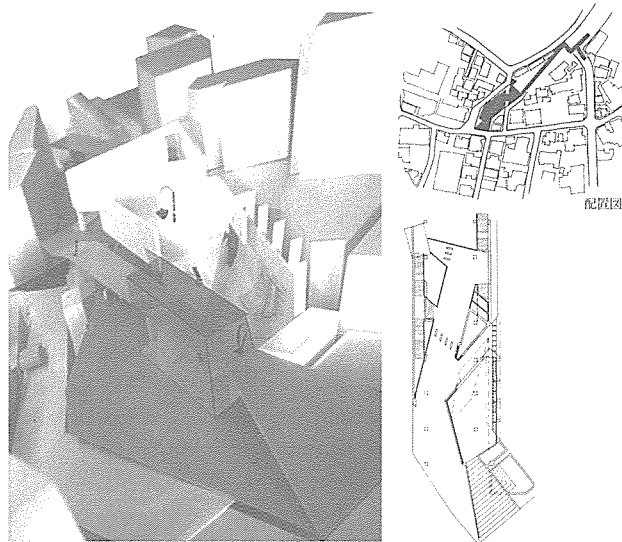
平面図(プラットフォームレベル)

平面図(コンコースレベル)

エリカ——同じ形をずらして組み合わせることにより、駅とギャラリーの関係を平面と斜面の相互作用として表し、その結果、両者が曖昧になった複雑な動線をつくりました。リチャードロングは歩きながら空間の認識を高めることに興味があるそうです。ここでは、駅とギャラリーの間を歩くと透明なガラス面と鏡により反射する面が対比的に経験されます。

講評——すごく明快なコンセプトでありながら、そのままではなくて混じり合うところが面白い。大きさに関しては、一見するとかなり巨大なものと思えないけど、アーティスト(リチャード・ロング)のことを考えるとこのくらい必要だし、このくらいのスケールのものを当てはめてみると風景としても割と成立するのじゃないかな。

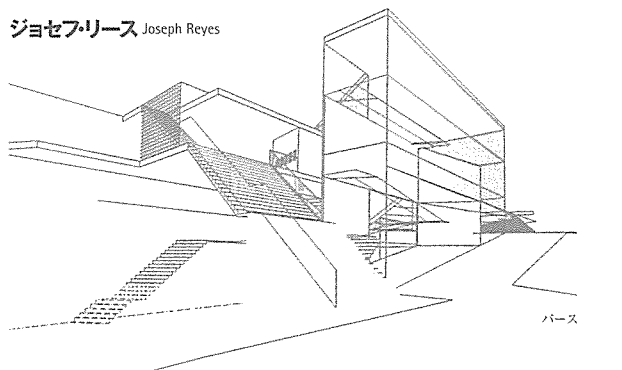
マット・ハーバート Matt Herbert



模型写真 平面図(コンコースレベル)

マット——駅とギャラリーは、二つの入口があって、上がって下がるループで繋がっています。全ての出入口で、ギャラリー、町、駅のどこにでもアクセスできるようにし、動線に見通しを効かせて昔の通りが意識できるようにしています。講評——構造の論理が理解しにくいので、全体的に物体として成立してない部分があるのでは。ループの動線はエスキスの頃より流れがきれいで、コンコースとのからみ方がイメージしやすい。そのことに周辺環境との関係を重ねることは良いけど、この動線の説得性がこのプロジェクトで一番重要な点だと思う。

ジョセフ・リース Joseph Reyes



パース

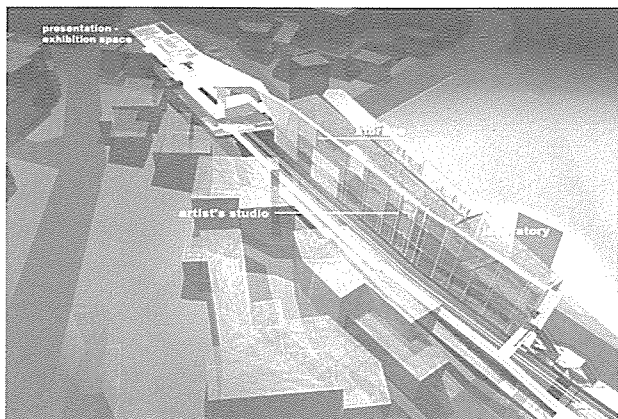
ジョセフ——この建築によって人の流れのインターチェンジが可能になることが目的です。商業や住宅からの出入りや大勢の人のまとまりを考え、4つのギャラリースペースを用意し、公共スペースが多方向の(結び目)を作っています。

講評——この場所に対する分析的確で、人の流れに安心感や快適性を考えているのが明らかですね。ただし、ギャラリーの空間は少し一般的で、他のアイデアとの繋がりがよく分からない。

RMITの学生たちはお互いに話し合いながら課題に対する理解を次々と深めていっただけでなく、彼らの雰囲気インパクトを持って東工大に影響を与え、その結果「メルボルン」と「東京」の間に健全な競争をもたらした。多人数で進められるエスキスを通じて、課題案におけるいくつかのタイプが発見され探求されること、最終的には個人が批判を受け取れる用意があることに、RMITのスタッフも学生も感銘した。このようなやり方の有効性は、過度に学生の個人差に集中することなく、課題そのものの問題に注目することであり、プロジェクトの展開から出てくる「ランダム」なグループの発生であった。私たちはこのような課題の進め方に勇気付けられ、二つの大学の間にこれからさらにインターアクションがおこるよう期待したい。

最後に、東工大はこの交換プログラムにとってもオープンに関わってくれたことを述べたい。全面的に支援して下さいた塚本先生、非常勤の青木先生と高橋先生、坂本先生ならびに他の教官、スタッフ、学生の皆さんに心から謝意を表します。

アラン・クー Alan Kueh

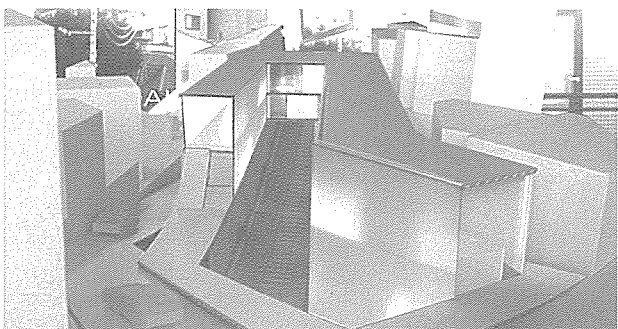


パース

アラン——代官山にはスタジオや住宅が店舗の上に置かれているパタンが多くみられることから、駅を触媒として、この関係をさらに拡大し、複雑にすることを考えました。ギャラリーは二つの部分から成り立、一つはアーティストのスタジオや生活空間を含めた生産の垂直壁で、もう一つは出来上がった作品のための水平の展示空間です。この二つが交わったところに駅の新しい迂回路をつくっています。

講評——代官山という、作ることで展示することがまぜこぜになっている現実が、建物全体のイメージに入っていることが面白い。展示することだけが美術館じゃなくて、作ることもギャラリーの重要な所であると言う意識は良い。

ジョノサン・カウル Jonathan Cowle



模型写真

ジョノサン——鉄道と代官山の町という大小のスケールによる緊張的な関係をつくり出しました。線路に面している壁面は半透明で、ギャラリーの中にいる人々は電車から離れながらもその音や影に対して意識できます。町に面している壁面は不透明な壁とガラスでできています。

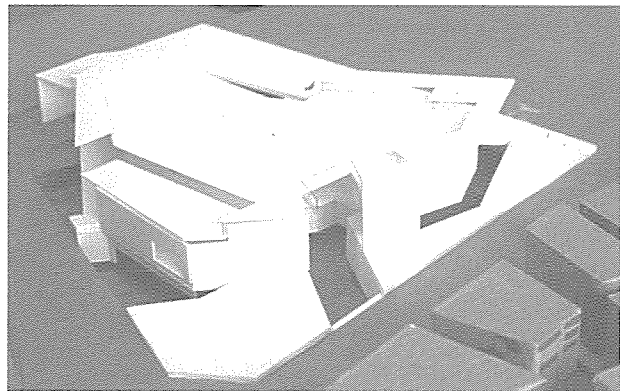
講評——道の空間の曖昧な所を建物の中にまで広げて〈公共空間〉を作ったり、仕切を空間と構造と同時に対応させるようなアイデアはまた他のプロジェクトでも展開してもらいたい。

10 students from the Royal Melbourne Institute of Technology (RMIT) came to Tokyo during October and November of 1999, by an Australian government grant. Associate Professor Shane Murray co-ordinated the programme, and we, Marika Neustupny and Nigel Bertram, were on site supervisors. The Department of Architecture, Tokyo Institute of Technology (TITech) was an open and engaging host to this exchange project. Our sincerest gratitude goes to the generosity of guest lecturers Jun Aoki and Akiko Takahashi, as well as to the support of Dr Yoshiharu Tsukamoto, the grace of Professor Kazunari Sakamoto and all of the other staff and students involved.

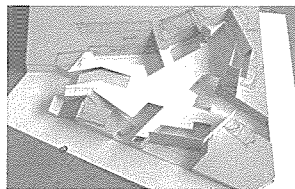
The RMIT students fully participated in 2 one month design studios for 3rd year undergraduates of TITech, run by the guest lecturers and TITech staff. At the same time, they undertook urban research on Tokyo, organised by RMIT. The aim of the research was to interact with the design aspect by giving a practical outlet for thinking about this new context, which is so often romanticised and simplified from the view outside of Japan. It was exciting when the design and research really did affect each other. The expected standard of work in both subjects was high, and it

高橋課題

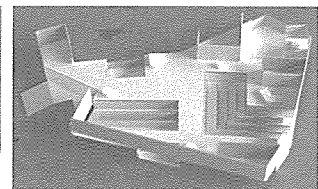
ポール・ダッシュ Paul Dash



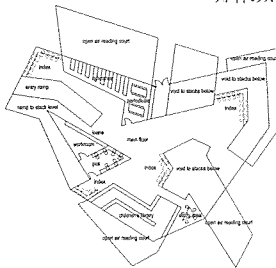
模型写真



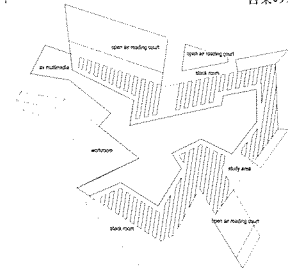
ヴォイドのスタディ



書架のスタディ



平面図(メインレベル)



平面図(書架レベル)

ポール——ネット上の資源、研究、レクリエーションといった、本の二次的な立場についての検討は、図書館の変わりつつある形状に対する思考の契機を与えてくれます。このプロジェクトでは、メインのフロアはカタログ(=本の情報)の場所であり、本は沈ませたレベルにあります。埋まっている本棚は、コートヤードに開かれて外で安全に読める場所であったり、道から直接見えて、情報が欲しい人にとって文字どおりのショーウィンドーになっています。

講評——アイデアは一杯あるのに全体としてまとまらないのが残念。埋まっている階と外周道との関係はよく考えられているが、カタログの階と道との関係や、カタログの階と本棚との関係をもっと断面的な経験として考えて欲しい。でもこの作品はほとんど展開して力強く洗練されたものになった。沈んでいる本の感じは欲求である。周辺環境の分析は明確で、特にこの作品が町に挿入されてある種の〈カット〉になっていることが効果的だと思う。

was a tight time schedule. The students were living and working together in an extremely intense environment, with limited resources. As tutors, we would like to congratulate them for lasting the distance.

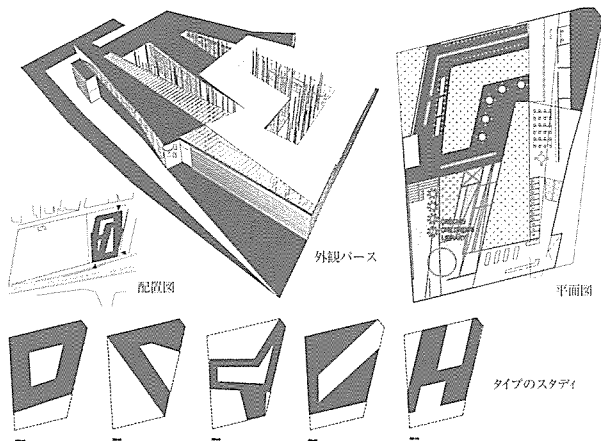
The design projects set were small, highly practical and complex, from the viewpoint of many of the past design projects which are normally experienced at RMIT. There is currently a general bias at the architecture department there towards 'art' and 'theory' rather than making form. However, in Tokyo, the language barrier forced the students to present their work without lengthy or theoretical justifications, and in a way that it could speak for itself. We also felt it was refreshing and liberating, as well as difficult, for the Melbourne students to tackle the very physical nature of a 'problem'. Particularly in the case of the station-museum, the project couldn't exist unless the problem was solved, whatever the building might look like. The immediate commitment to architecture by having to make physical models at 1:50 from the first week was a shock!

The fact that the exchange occurred with a group of 10 students lent a special force to the programme, quite different to when a single exchange student enters a

new cultural environment. Not only could the RMIT students talk with each other to intensify their speed of gaining new understandings, but also the interactive learning was more 2 directional, with the build up of some healthy competition between 'Melbourne' and 'Tokyo'. Both staff and students from RMIT were impressed by the group nature of the Japanese studio exploration and also the ability of individuals to accept criticism. Normal studio sessions at RMIT involve far fewer students at a time, but the sheer number of students criticised together at TITech meant that various types or models of 'solution' could be worked up in an interdependent way. The advantages of this method include: a focus on the nature of the problem set rather than the nature of each individual's response, and 'random' grouping of students according to their project type as it evolves, rather than pre-set grouping by friendship or architectural attitudes represented by teachers and so on. We felt very positive about the outcomes of this exchange of modes and methods of learning, and hope that more interactions can occur between these universities in the future.

Marika Neustupny, Nigel Bertram

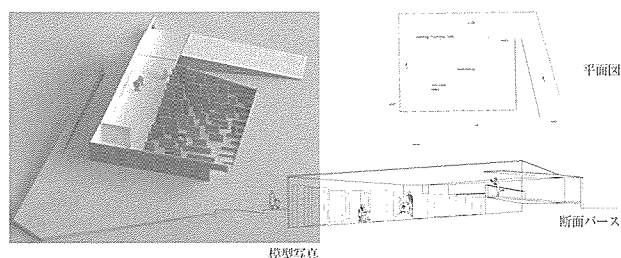
ニコラス・ヒュービツキー Nicolas Hubicki



ニック—この建築では、住宅、商業、大学といった周辺環境が期待する図書館との関係を弁証的に定義しながらもそれらが浸透し合うものを成立させようとしています。図書館を「置くこと」のための装置とするために、全体の建物を統一しつつ、その形態をコートヤードの連続によって壊すように検討しました。コートヤードのタイプや敷地環境からパターンを見つけて、それらを展開させ周辺環境に対して流動性を保つ計画としました。

講評—形態の強さが魅力的ではあるけれど、同時に少し使いにくくもみえる。しかし、この作品は大岡山の敷地や図書館というものの計画についての基本的な問題に答えている。ダイアグラムの明確さに比して、内部の経路としては複雑さを持ち、内部と各々のコートヤードとの視線関係は面白い。隣接するスーパーのことを考えて子供の図書室などを計画するのはプログラム上とても説得力がある。

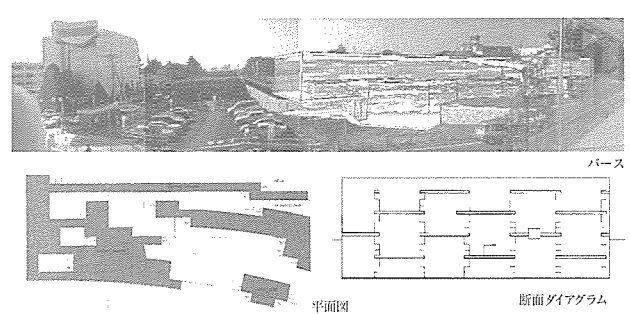
ゾエ・ガイアー Zoe Geyer



ゾエ—地下を老衰した本の巨大な倉庫とし、個人の関=領域が侵食しています。ランプが敷地外周の一番低い所から上がりはじめて、囲むように上がっていき、このランプから地下を見下ろせたり、立ち読みの場所やグループで使う小さな空間をつくっています。

講評—本棚をインスタレーション的に考えるのは可能性があると思う。敷地との調整が不十分で、90度回転させて駅に面した方が良い。しかし内と外、グループと個人の関係が断片的にずれるのを勾配床面で処理するのは良いアイデアだ。本棚が考古学の現場のような感じを与える。

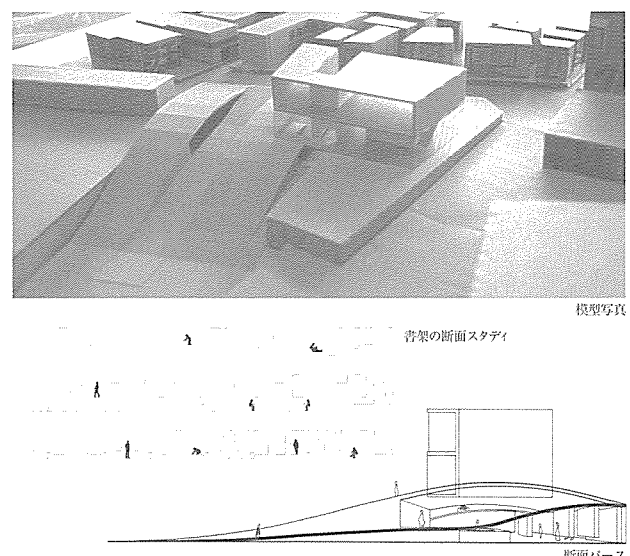
ジェシカ・リンチ Jessica Lynch



ジェシカ—この建物は、スーパー、TSUTAYAや百年記念館のような大きいスケールのものにも対応しつつ、北側の住宅や小さいスケールの商店などに面している部分は指のように分岐しています。本棚で見通しを保持しながら空間をどのように分けるか考えました。

講評—本棚を使って構造と空間の仕切を作るアイデアは面白い。でも、棚が全部一つの方向に沿うと、この敷地の多方向性に合っていないのでは。建物の形を小さく割ることは周辺都市とのスケールの関係は良いかもしれないが使用のことを考えるとどうでしょう？

イアン・リム Yiyan Lim



イアン—図書館と本屋との違いを考えると、本屋では通常椅子を備えていないし、図書館は大体固定的な座席配置です。ここでは、座ること、立つこと、コンピューターに向かうこと、どれでも本棚と多様な断面方向の関係が可能。講評—内部のスタディーの細かさは役立つが、そこからの展開が問題。オブジェクト的な建物の魅力はあるが外部と内部の関係が明快でない。

建築設計製図第四/第3課題

Third-year studio Work: Autumn Semester

「大きな集合住宅あるいは小さな集合住宅」 "Big Housing or Small Housing"

担当:

武田光史 [非常勤講師、武田光史建築デザイン事務所]

TAKEDA Koji (Guest Professor, Koji Takeda & Associates)

坂本一成 [教授] **奥山信一** [助教授] **塚本由晴** [助教授]

SAKAMOTO Kazunari (Professor), OKUYAMA Shin-ichi (Associate Professor),
TSUKAMOTO Yoshiharu (Associate Professor)

寺内美紀子 [助手] **貝島桃代** [TA] **安森亮雄** [TA]

TERAUCHI Mikiko (Assistant), KAIJIMA Momoyo (Doctor Course, Teaching Assistant),
YASUMORI Akio (Doctor Course, Teaching Assistant)

[ゲスト・クリエーター] (企画発表会)

大平旬一郎 (NTTファシリティーズ)

OHIRA Junichiro (NTT Facilities)

新しい世紀を迎えるにあたり『都市に住む意味』の重要性がますます増大しています。バブル崩壊の痛手から立ち直りつつある東京では、住宅の都心へ回帰が顕著です。都市住宅の性格も純粋な住宅だけの機能に限定されたものから、事務所や商業住宅などの複合したものまで多様な広がりを持っています。例えてみれば『戸建住宅からメガスケールの都市のホテル』のレンジの中に現在の集合住宅はありそうです。人生の通過点としてのものであれ、生涯をともに生きる住宅としてあれ、集まって住むことの今後の意味を考えてみたいと思います。

この課題では今後の都市集合住宅のあり方を、企画(ディベロッパー)と建築(建築家)の両面から提案して下さい。

敷地: 代官山(NTT社敷地、渋谷区猿樂町)

構造: ハイブリット構造可

法規: 容積率200%、建ぺい率60%、第2種低層住宅専用地域、日影規制あり(最高高さ: 12m、道路、北側斜線)

[提出物]

(スケールは1/300を基本とし、A1サイズのレイアウトする)

配置図: 1/300、周囲の状況を表現したもの

断面図: 1/300、設計意図を最も表現できるものを一面以上

立面図: 1/300、一面以上

平面図: 1/300、一面以上

透視図または模型

住戸平面図: 1/50



敷地周辺図



武田光史

TAKEDA Koji

1950年 宮崎県生まれ

1973年 東京工業大学工学部建築学科卒業

1973-78年 同大同学部同学科篠原研究室研究生

1978-85年 同大同学部同学科篠原研究室助手

1985年 インドネシア、カリマンタンにて農村開発にたずさわる

1986年 武田光史建築デザイン事務所設立

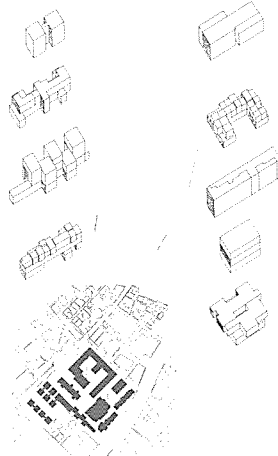
1992年 富岡の住宅(社団法人東京建築士会、住宅建築賞[金賞]受賞)

1998年 ふれあいセンターいずみ(日本建築学会賞受賞)

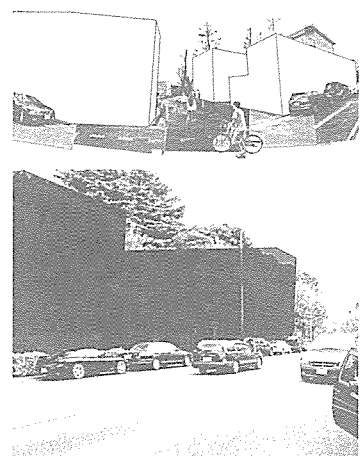
主な作品: 七尾の住宅、富岡の住宅、尾鈴山蒸留所

以下は、1999年12月17日[金]のグループ発表(企画書づくり)および2000年2月14日[用]の講評会の一部を、学生編集員(田口陽子 D2)がレポートしたものであり、文責は編集部にあります。(敬称略)

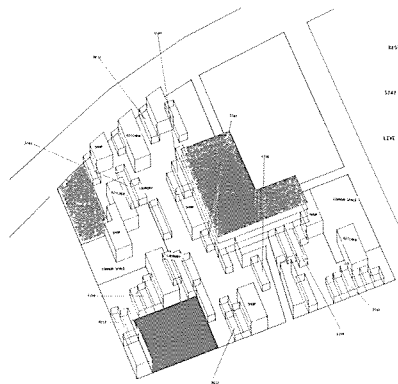
この課題では「企画」と「設計」の2段階を踏んでいる。設計に先立ち6グループに分かれて発表が行われ、設計段階で発展が期待される3案(A、B、C案)が採用された。これら3つの企画のいずれかをもとに、設計提案することを原則として課題が進められた。



A案: パブリックとプライベートのグラデーションに注目することで、都市に対して閉じることなく連続的に集合住宅をつくらうというもの。都市に住むことのリアリティを提案している。企画段階では最も抽象的であった。



B案: 集まって住むことのメリットとして、住宅の中には入らない大きな空間を必要とする機能(大ホール、映画館、プールなど)を共有しようというもの。設計段階で具体的な計画案に収束しやすかったようだ。ここに掲載された作品は、B案をもとにしたものが多い。

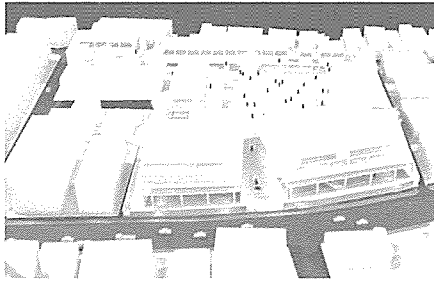


C案: 滞在時間の長短で空間構成を考えようというもの。滞在時間の短いものは、その機能を公共施設に依存させることで空間を最小限におさえ、滞在時間の長いものは、住居内で機能を完結させるための空間を必要とする。滞在時間の長短を公私の関係にリンクさせて捉えている。

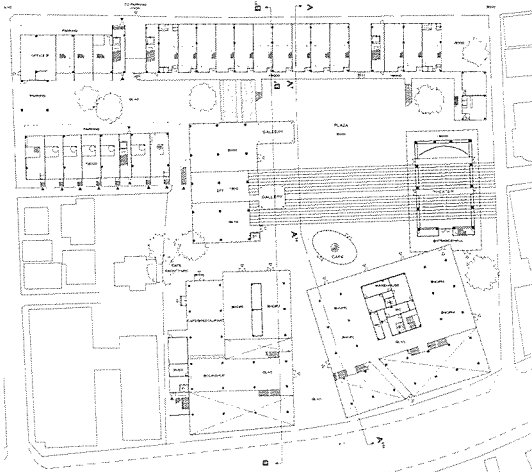
[講評会レポート]

今課題では、商業地域と高級住宅地が混在する代官山という土地柄に相応しい集合住宅の提案が求められた。集合住宅以外の機能を付加しなくてはならないという条件は与えられなかったが、代官山の場所性を考慮して、どの案も何らかの商業施設もしくは公共施設を併設しており、全体を住居のみで構成するものは見られなかった。A案は、公私の濃淡を設計の手がかりにしようというもの、C案は、滞在時間の長短を公私の関係にリンクさせようとするもので、両案とも公私に注目している点が共通である。これらのコンセプトは、直接的に空間構成を規定する要素が少なく、その分、融通を利かせた発展が期待されたが、抽象的すぎたためか、具体的な空間構成に収束させるのが難しかったようだ。B案は、集まって住むメリットとして、住宅には入りきれない大空間を必要とする機能を共有しようというもの、具体的な計画案に発展した成功例が多く見られた。全体的に見て、「企画」と「設計」の段階を踏むことでアイデアを進化させていくよりも、企画の段階で発展の可能性を自ら限定してしまった学生が多かったように思う。設計期間が約1か月であること、計画規模が大きいことを考えると、コンセプトが直接結びつきやすい図式的な解法や、部分を反復することで全体を構成する単一の造形システムによるものを選びがちである。一方A案、C案のような抽象的で難しいテーマにも、より分析的な過程を経ながら進化させることが出来れば、B案以上の解答を示す可能性があったと思う。次回、時間と手間のかけられる卒業設計に期待したい。

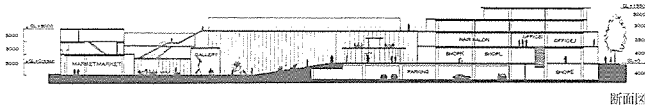
ト部祐加 URABE Yuka



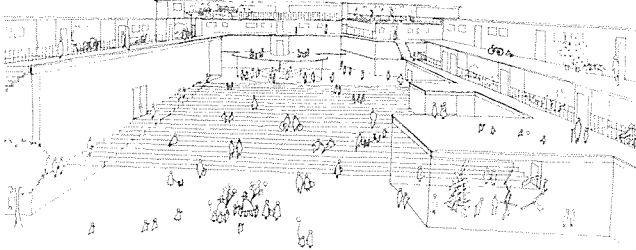
模型写真



配置図兼、1階平面図



断面図



パース

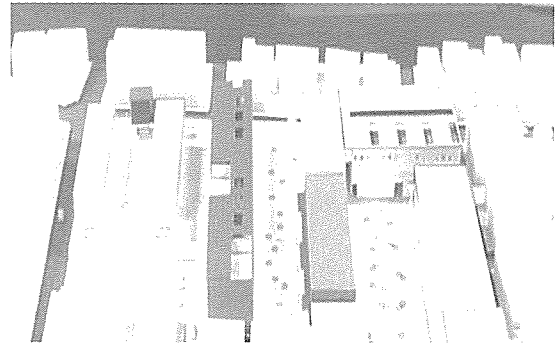
ト部——敷地の高低差を利用したプラザを中心に、各々の機能を配置しました。旧山手通り沿いにはヒルサイドテラスと連続するガラスのファサードの建物、住宅街側にはマーケット、プラザの階段部分には地形をそのままのみみむようにDIYとシアターを配置して、接地階を商業スペースとし、その上に住宅をのせました。住宅部分と商業施設は層ではっきりと分かれています、住人と外部の人が交わることを意図して、ぐるっとプラザを囲むようにデッキを設けました。

武田——中央にプラザを設けるのは十分に説得力ありそうですね。ブラックボックス化しがちなシアターのファサードの処理や、街に対して壁をつくらないところもうまい。デッキは余計ですね。事務的な通路は住宅を殺しちゃうんじゃないですか？縁を切ったり、他にいくつか方法論があったのではないのでしょうか。

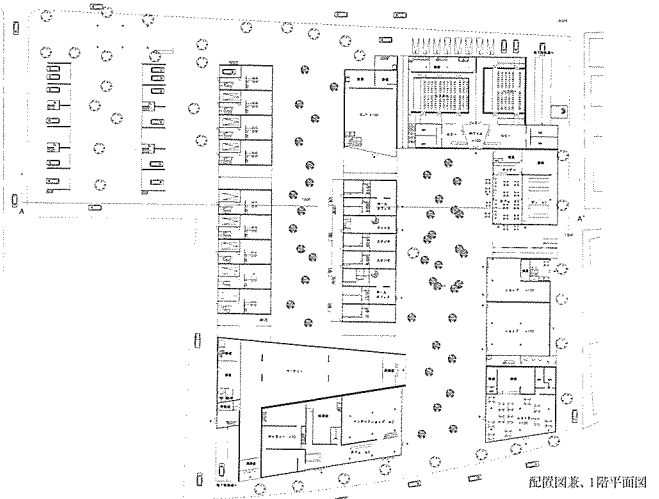
奥山——旧山手通り側の立面がかなり大雑把でドライですね。上階の住戸と街との関係などは、どうでもいいと考えたのですか？

坂本——図面がもう少しいいと、全体が生き生きしてくるんだけどね。ただのドライな図式的な図面で、意匠図という感じがしない。計画は、幾分通俗的なところがあるけれど、うまくそのことを利用しながら表現していて、成功していると思う。

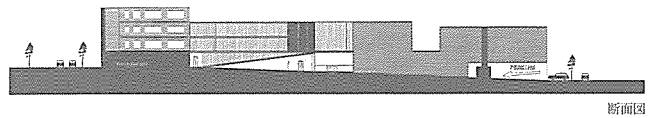
三井祐介 MITSUI Yusuke



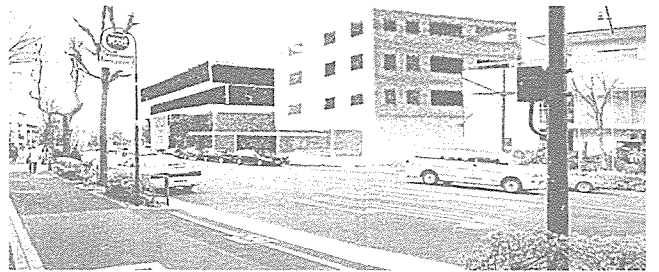
模型写真



配置図兼、1階平面図



断面図



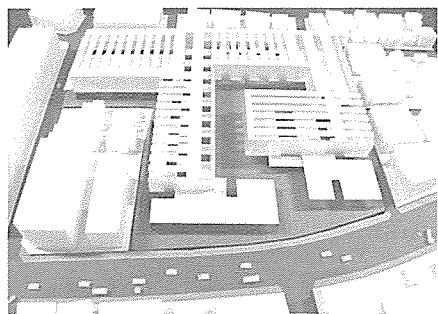
パース

三井——建ぺい率から換算される40%の空地进行をいかに殺さないか、ということについて考えました。ひとつのボリュームを曲げながら配置し、各プログラム及び住居を、代官山に見合うスケールとすることで、奥のない異なる二つのオープンスペースをつくりました。一つには商業施設が並列に集合していて、もう一方には住戸が集合しています。無駄になりがちな外部空間を、分かりやすく大きくつくることは、建築を都市に対して積極的に開いていくことになるとともに、住戸の豊かさにも関係すると思えました。

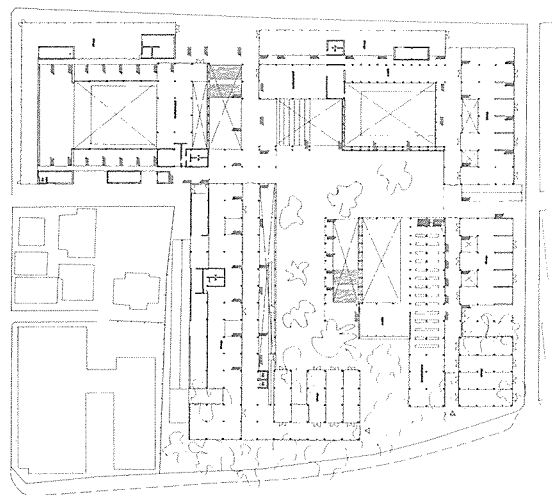
武田——空地の性格付けがすごく弱い。住棟間隔を何となくとっていますよ、みたいな話にしか残念ながら見えない。建物を格好よく配置しましたみたいな。それはやっぱり表現力の問題だね。

坂本——面白くなりそうなので、いく分惜しい感じがするんだよね。もっと場所のイメージみたいなものを詰めていかないと、曖昧なままですよね。外部空間に抜ける通路の幅を広くしたりして、積極的にやると分かりやすい。

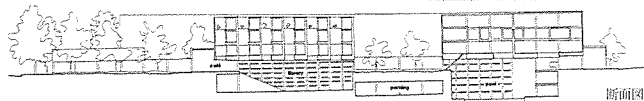
妹尾慎吾 SENOO Shingo



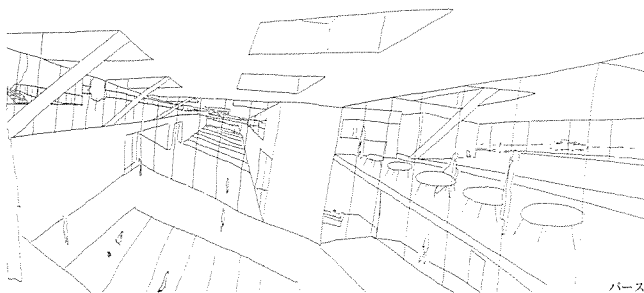
模型写真



配置図表、1階平面図



断面図



パース

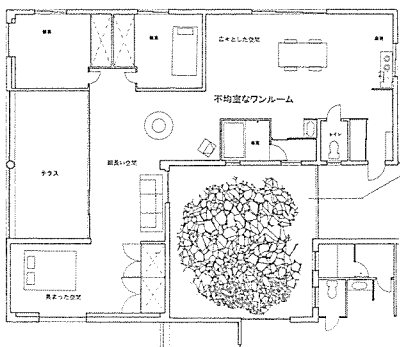
妹尾——僕は企画B案をもとに設計しました。大空間を必要とするプール、大ホール、図書館、DIYを半分地下に埋めて、グランドレベルにショップを配置しました。住宅はその上に2、3、4階と3層分あります。大きな空間の上の1階レベルに吹き抜けを設け、回廊から地下の様子が見えるようにしました。

武田——大きな施設を地下に埋め込んで、グランドレベルに吹き抜けた的に地上面にその気配が出てくる。それで1階のレベルは基本的にはショップにして、それから上を住宅にするという構成そのものは非常にいいと思います。しかし、上の住宅はどうでしょうか？

奥山——あなたの建築で一番面白いのは、ショップとか他の大きな機能の中に、壁面階段的な孔があいて、それが小さな住居の入り口に直結して到達するというアイデアでしょ。その面白い空間構成を図面でしっかり表現してほしかったな。

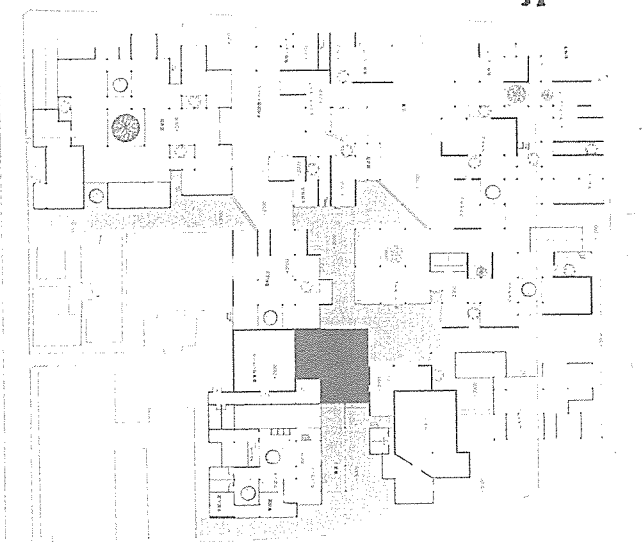
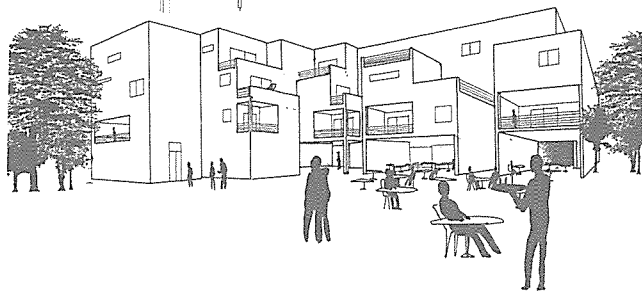
坂本——ちょっと不安なところがあるけれど、空間的な構想は面白いと思う。だけど、面白そうところが、図面で積極的に表現されていないのが残念です。

黒川智之 KUROKAWA Tomoyuki



住戸平面詳細図

パース



配置図表、1階平面図

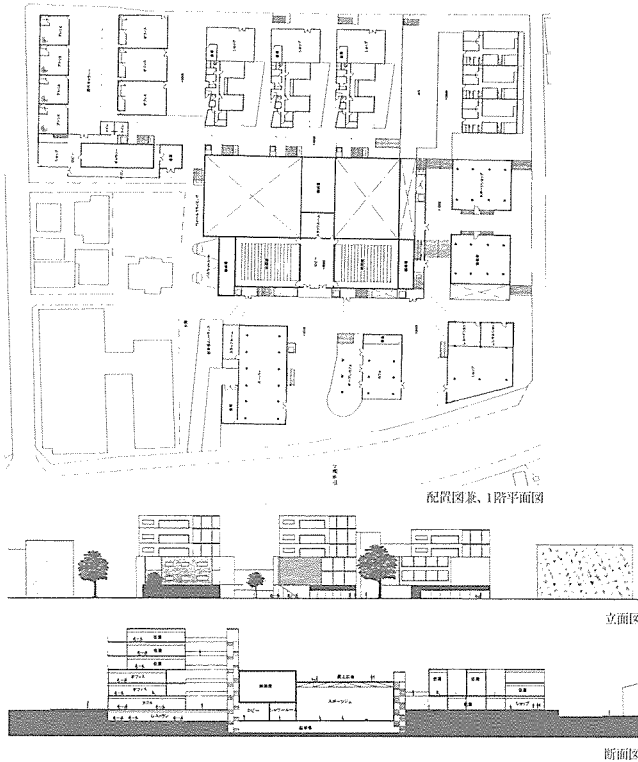
黒川——ヒルサイドテラスに匹敵する大きさなので、そういった既存計画を手がかりに、街と連続するものを作れないかと考えました。配置計画により、4つの異なる性格の通りを、引き込みつつその性格を変容させることで、敷地内にプライベートとパブリックのグラデーションを作りました。店舗を置くことで、敷地外の環境を敷地内部まで延長し、各々の外部空間にある大きさを与えることで、さらに行為を規定するというように、相互に場所の性格を変容させようと考えました。街と連続した、この場所ならではの街並みを作れないかと考えました。

奥山——この大きさの計画を代官山という場所で、ひとつの造形システムで全部覆い尽くすのは、ちょっと恐怖感を覚えるんですね。同潤会アパートの中に入ると、いろんな視線が錯綜してたり、同じシステムが裏返って中にあたりしますが、それに近い感じで、魅力的ではあるけどちょっと怖い感じがします。

武田——とても距離感が近いですね。住棟間隔をもうすこし離すか、3層目あたりから細かい分節を始めるようにすれば、もう少しまたニュアンスが違ったんでしょうね。

坂本——僕は全体にこのシステムでやるやり方は、あってもいいのではないかと思います。ただスケールの弱屈だね。

小林徹也 KOBAYASHI Tetsuya



小林—旧山手通り沿いに約6層の建物が多く建っていることに注目して、映画館とプールを含むヴォリュームを中央に配置し、周辺に残った幅約30mの環状の土地に、6層程度の住宅を配置し、各住戸間の採光や隣接道路からの距離を調節しました。

武田—君の場合は特徴があって、一種の分棟案だと思うんだけど、分棟にするときの積極的な意味を聞かせて下さい。

小林—代官山の町並みと連続するような建物をつくりたかったんです。そして、分棟にしたら立面が4面できることを利用して、店舗の独立性を確保しました。

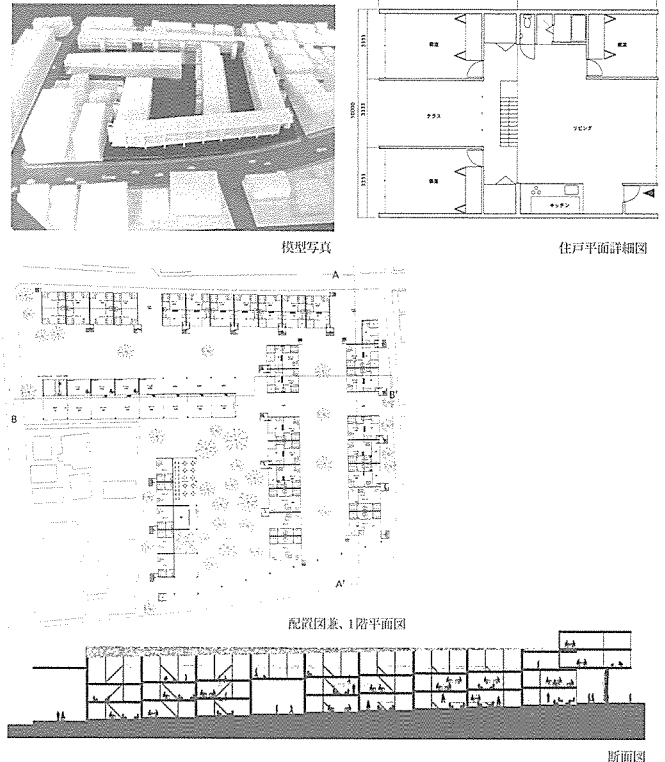
奥山—大きな機能を隠して、手前に細かい機能が張り付いている訳ですが、もっと徹底的に出来なかったかな？例えば中心にある大きなヴォリュームのまわりにショップとか多様な機能がまわり付いてもよかったと思う。代官山という比較的スケールの小さい街に、ある規模の計画をする際のアイデアとしては、リアリティーがあるだけに、方法を徹底すれば、もっと楽しい場所になり得ると思う。

坂本—楽しくなるような施設がより積極的に計画され、もっと面白くなると思う。最初のイメージに対して、わくわくさせるような具体的な提案が、まだなされてないのが残念です。



講評会風景

越路龍一 KOSHIJI Ryuichi



越路—旧山手通りを基準レベルとすると、敷地の北東の角は-3000というレベル差があるので、フラットなプライベートのヴォリュームと、レベル差に沿って下るパブリックのヴォリュームを二つ平行に配置すると、最終的には一層分の差が生じます。両ヴォリュームのレベル差の少ないところは同じ使われ方、レベル差のあるところは違った使われ方という、レベル差によってプライベートとパブリックのグラデーションをつくることを考えました。

武田—ほとんど全てをSOHOにするやり方は、十分に説得力があると思います。代官山という土地柄を考えると、オフィスの使う可能性のほうが遙かにある。住んでもいいし、仕事を持ち込んでもいいし、半分ずつでもいいという考え方で、なかなかうまく出来ているのではないのでしょうか。

〔総評〕

武田—今回は普通とは違ったやり方をしてみようということで、まずグループでコンセプトを練って企画書をつくり、次に設計図面を描くという方法でやってもらいました。企画発表で6案出た内の3案を採用したのですが、A案がパブリックとプライベートの濃度に注目して集合住宅をつくらうというもの、B案が住宅に欲しいけれど入らないものを置いて、それを包み込むかたちで集合住宅をつくらうというもの、C案が集合住宅の中に滞在する時間の長短で空間構成を考えようとするものでした。その内、B案だけは割合わかりやすい方法へ収束しました。A案とC案は原理原則としては正しい解答ですが、具体的な空間に置き換えるのが難しい感じがしました。最初にアイデアを練って、どうやってそれを進化させながら肉付けをしていくかが、建築をやっていく上での醍醐味だと思うのですが、最初のアイデアの重要性を進化させるよりは、むしろその肉付けのほうにエネルギーが注がれすぎて、もともとあったコンセプトに対して、空間がどう位置づけられて、どう意味を発することが出来るのかを詰めるところが少し甘いように思いました。

平成11年度 卒業設計・修士論文(制作)

Undergraduate Diploma 1999 and Master Thesis (design project)

去る平成12年2月28日、大学にて全教官出席のもとに卒業設計の発表講評会が、またそれに先立つ2月17日、大学院修士論文の発表会が行われた。

また平成12年度のTIT建築設計教育研究会第10回総会が、去る6月12日、蔵前工業会館で開催され、毎年優れた卒業設計および修士論文(制作)に贈られる「大岡山建築賞」の授賞式が行われた。平成11年度は、大岡山建築賞が松岡里衣子君[卒業設計]、および遠藤康一君[修士論文(制作)]に、また同銀賞が石原久一郎君、岡村航太君[ともに卒業設計]に贈られた。

以下は、卒業設計の発表講評会、修士論文の発表会、およびTIT建築設計教育研究会総会における作品発表と質疑応答の模様を、大岡山建築賞受賞作品などの評価されたものを中心にレポートしたものです。なお取材は学生編集委員の紺川いずみ(M2)、高橋寛(M2)、大村卓(M2)が担当し、文責は編集部にあります(敬称略)。

なおTIT建築設計教育研究会総会における発言者は以下の方々です(五十音順)。

青柳司[田建設計/S33卒]、金子潔[久米設計/S49修]、河野晴彦[大成建設/S50卒]、坂本一成[教授]、仙田満[教授]、只野康夫[田建設計/S39卒]、伊達美徳[伊達計画文化研究所/S36

卒]、戸尾任宏[建築研究所アーキヴィジョン/S29卒]、服部紀和[竹中工務店/S39卒]、半澤重信[半澤重信研究室/S28新卒]、日置滋[清水建設/S48卒]、三栖邦博[田建設計/S41卒]、八木幸二[教授]、山下和正[山下和正建築研究所/S34卒]



TIT建築設計教育研究会総会における発表の模様

【卒業設計】

『渋谷文化中心』

大岡山建築賞

松岡里衣子

MATSUOKA Rieko



松岡——渋谷駅東口の現在東急文化会館が建っている敷地に、その周辺に建つ学校、劇場などの施設への入口となるとともに、この場所に隣接する都市の構築物を活かした新しい文化施設を計画しました。建物内部は、高低差10mほどある敷地全体のなだらかな傾斜をとりこみながら、様々な用途に供する連続スラブが螺旋状に上がっていくようになっていきます。また建物が様々な高さで空中通路や高速道路などの構築物に隣接するので、それらとの関係を考慮しながら四方向に飛び出すかたちで、ショッピングモールや屋上公園などの人のたまるような場所を設けました。連続スラブにそっていろいろな空間が連続するとともに、周辺の駅や建物、都市構造物とも関係をもつことで、様々な建物、構築物の混在する渋谷の街の構造を織り込んだような計画を目指しました。

•大学での発表会にて

八木——建物を支えている構造はどうなっているのですか？

松岡——ほぼH型に配置した外周部の壁と、中央の二つの大きな構造壁でスラブを支えています。

仙田——駅や周辺と関係をとったという話ですが、渋谷駅の抱えている多くの問題に対する提案がないように思えます。たとえば駅前広場に向かって張り出している部分は、駅側と何の関係もないし、空間的にも駅前広場を狭めているだけのように見えますが、何のためにあるのですか？なぜこの屋上にテニスコートをつくる必要があるのですか？

八木——この張り出しはどうして駅とつながらないのですか？

松岡——渋谷駅のホームからテニスをしている人が見えるなど、人の活動が建物のファサードになれば楽しいと考えました。また張り出しの先端は、バスの待合所のような場所として利用されます。

坂本——連続スラブ上に、周辺との関係にそっていろいろな用途が並べられて全体ができているという計画だと思いますが、関係があるという抽象的な表現だけで説明がありません。

塚本——たとえば駅側の歩道橋から坂に抜けながらどういうことが起こるか、具体的に説明してください。

松岡——人は歩道橋から始まる連続スラブに沿って、ホールや図書館、外部テラスなどを交互に通り返けながら、屋上の公園まで上がって行くことが出来ます。また途中で連続スラブの外側に張り出したカフェや芝生広場などに出ることもできます。

奥山——頑張っている提案だとは思いますが、渋谷のものすごいエネルギーが集中している場所にしては、ファサードがおとなしい感じがします。

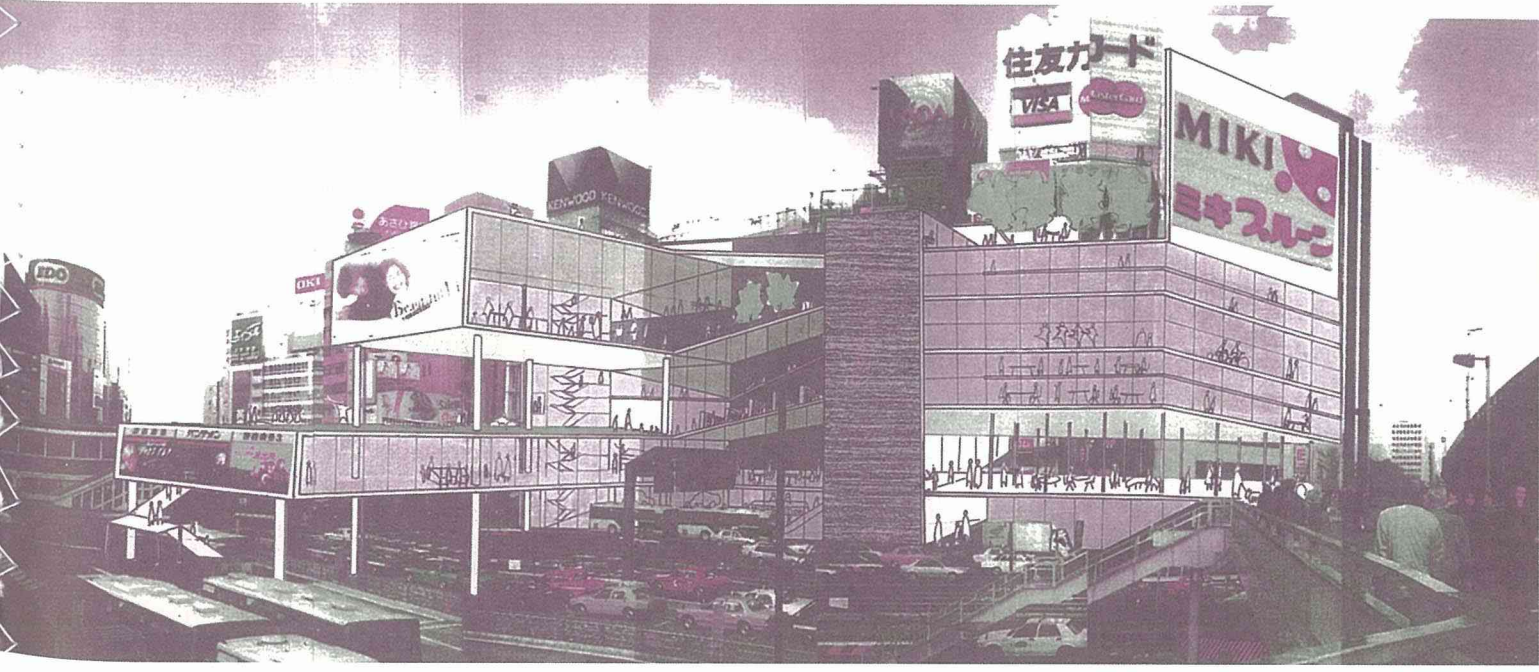
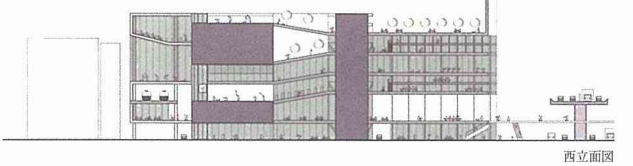
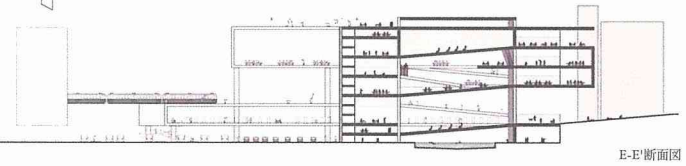
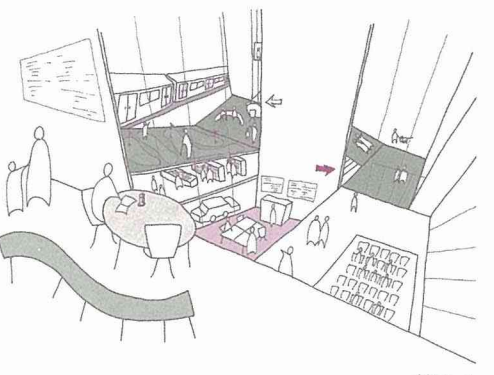
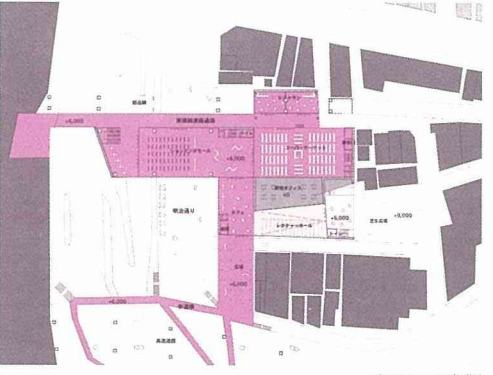
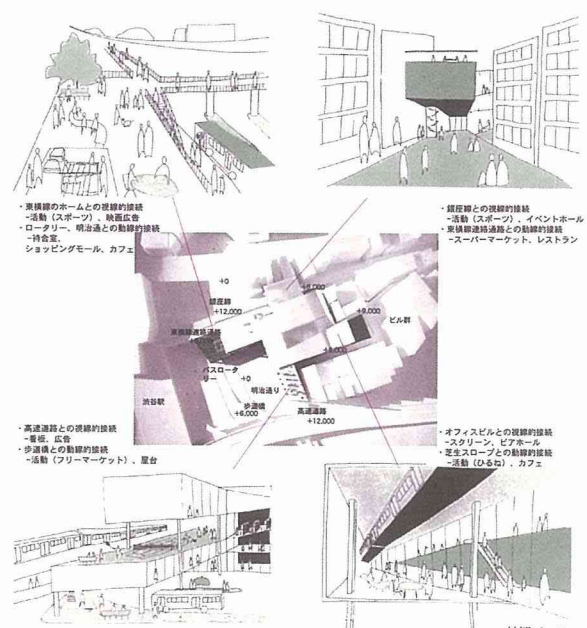
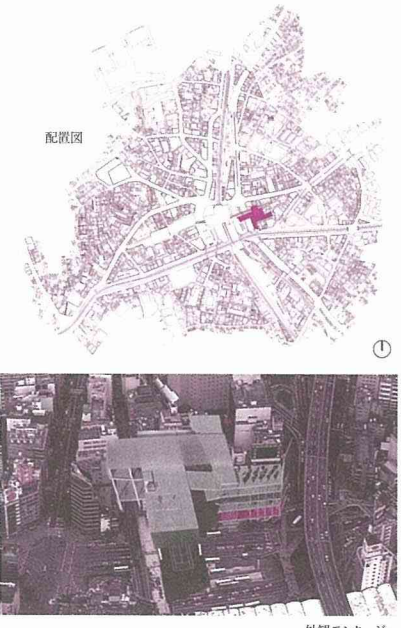
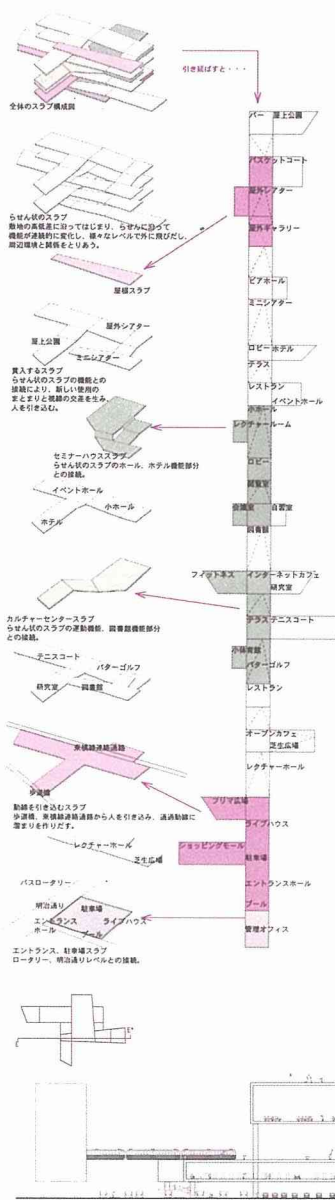
•TIT建築設計教育研究会総会にて

戸尾——駅とのつながりを考えたという割には、元々ある連絡通路一つだけでつながっているのが疑問です。もっと積極的にやってもいいのではないのでしょうか。

服部——渋谷はつくづくネットワークの街だと思います。スパイラルの連続スラブを上がっていった先に、もっと大胆に西口と東口をつなげるくらいの計画であつたらもっと面白い。

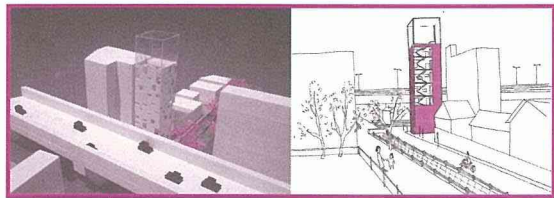
伊達——東急文化会館を壊して、また文化会館をつくるというのがしっくりきません。壊すよりも今既にある構築物をうまく改修したほうが、地球の環境に負担をかけない。また、駅前広場も合わせて全体を計画するべきでしょうし、高速道路も場合によっては付け替えなくてはならないかもしれない。そういった都市についての提案があつたほうが良かった。もっと積極的に都市空間をつくりだして欲しいと思います。

只野——松岡さんののは思い入れが感じられて良い案です。自分で考えて自分なりに解決策を見つけていくプロセスがよく見えて、情熱を込めてつくっているのが見えて良かったと思います。

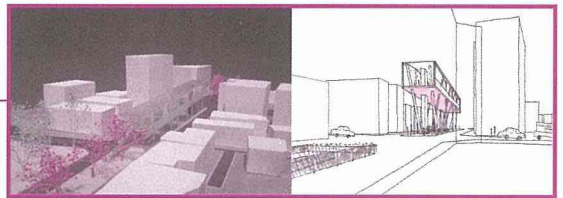


『サクラノモリノマンカイノシタ』 石原久一郎

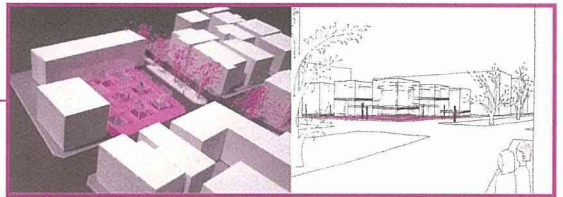
"SAKURANOMORINOMANKAINOSHITA" ISHIHARA Kuichiro



A棟



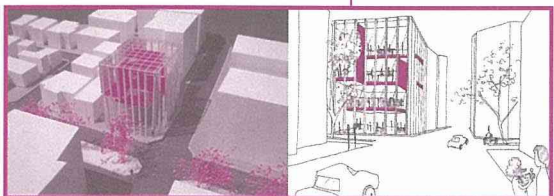
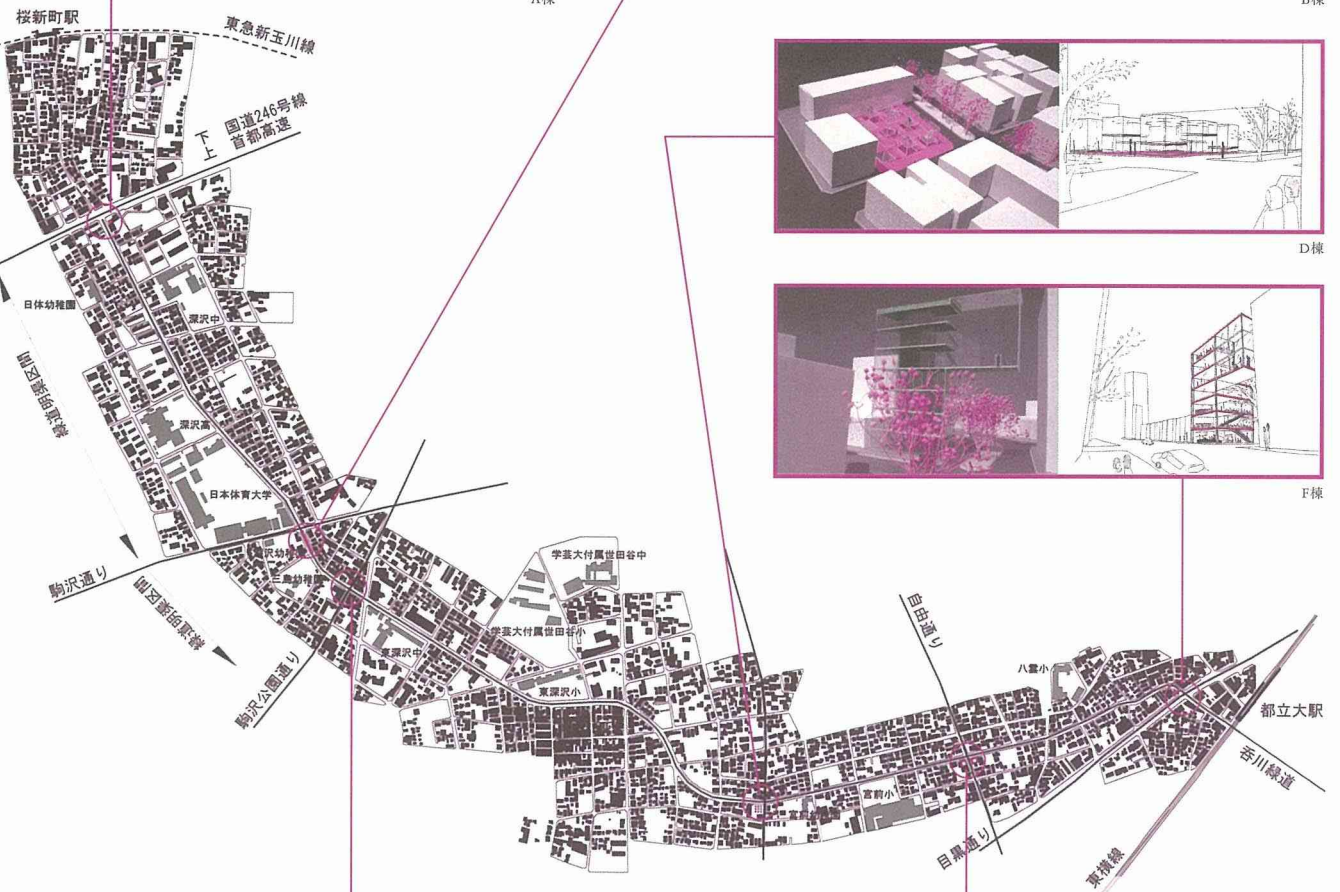
B棟



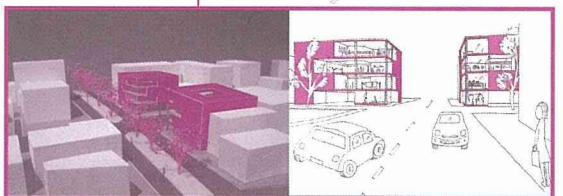
D棟



F棟



C棟



E棟

『サクラノモリノマンカイノシタ』

大岡山建築賞銀賞

石原久一郎

ISHIHARA Kuichiro



石原——桜新町駅と都立大学駅の間約3.2kmの呑川緑道に、6つのカルチャースクールを計画しました。現在の緑道は交通量の多い車道によって分断されていて、一般道からはほとんど緑道が見えません。そこで一般道と緑道が交差する6つの角地に建物を並べていくことで、緑道全体も変えることができると考えました。246号線に沿いの高い建物が壁のように立ち並んでいる場所には、さらに頭一つ高いA棟を計画しました。またD棟の敷地では、交差点に来るまで視界が開けないので、このギャラリーによって動線の回遊性をもたらし、視線が抜けるようにするなど、それぞれの敷地における車道と緑道の関係の中から、建物の形態を決定しました。これらの建物が緑道でつながり、全体としてひとつのカルチャースクールとなることにより、新たな

呑川緑道の領域をつくろうとしました。

•大学での発表会にて

仙田——B棟のピロティの意味がよくわかりません。

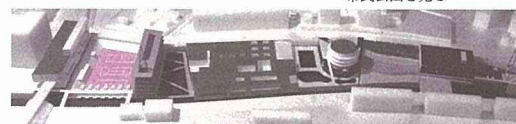
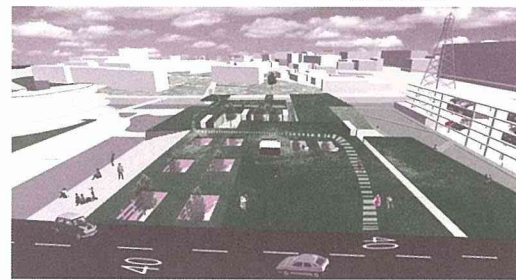
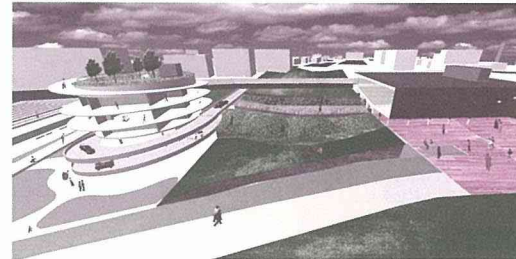
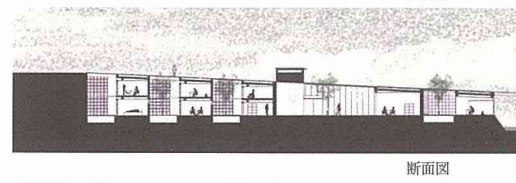
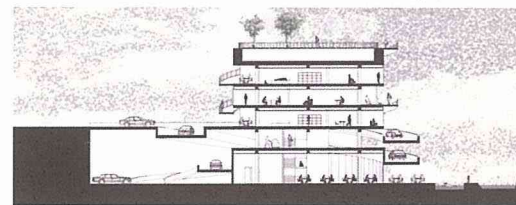
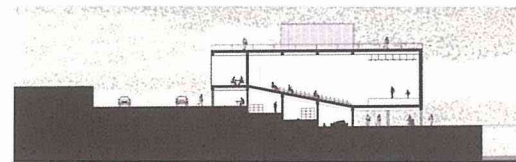
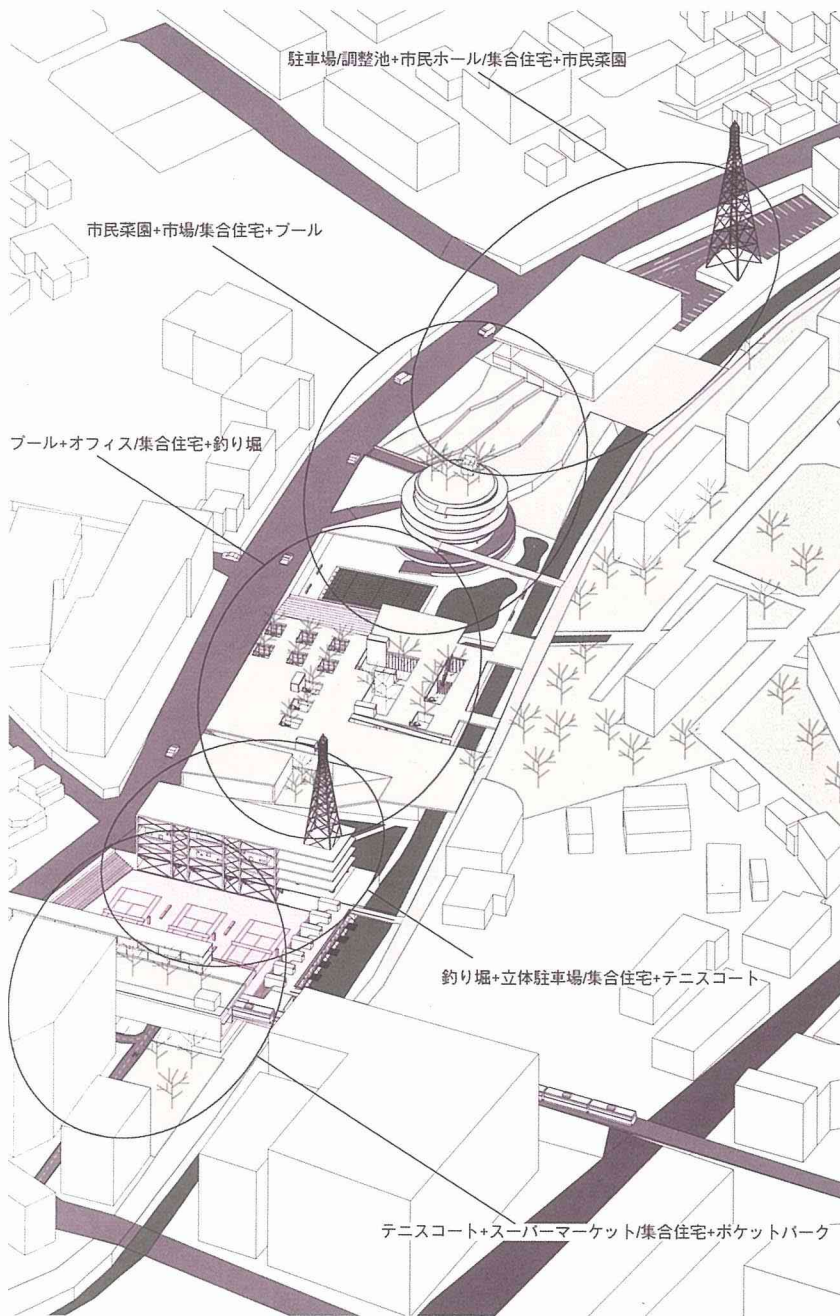
石原——ここにある洪水時のためのポンプ施設を地下に埋め、1階を人々が自由に通り抜けられる園芸品売場にするので、ここで分断されている呑川緑道を連続させようと考えました。

八木——用途はカルチャースクールでないといけない理由がありますか。

石原——地域に開かれた施設内容によって呑川を活性化させようという意図です。

藤岡——角地に建つ分棟の建物の集合が一つの施設になるという話ですが、車道から見たり、他の建物が横に建ってしまうと、そのまともあまり意識されないのではないのでしょうか。

石原——角地は緑道と一般道の接点であり、緑道に来る人が必ず通る重要なポイントです。その角地に個性的な色の建物を配置することにより、分断された緑道をつなげる手法を提示したかったのです。



●TIT建築設計教育研究会総会にて

只野——川沿いの6つの建物がカルチャースクールとしてまとめられています。施設名以外にそれらを結びつける何かがあるのですか？計画とタイトルの関係は何でしょうか？

石原——呑川緑道と建物が組合わされてできるひとつの施設が、緑道の桜並木の下をより活性化させると考え、このようなタイトルにしました。

金子——桜の季節は一年のうちにそんなに長くはないので、プロジェクトのテーマとして道を取り上げるのならば、むしろ一年間を通して地域の特性をあらわす「水が流れていること」ということの方がいいのではないのでしょうか。

山下——呑川の復活というようなことも、計画の中に何か考慮されているのですか。私は呑川沿いに中学校を設計したので知っているのですが、世田谷区の計画に入っていると思います。

石原——現在暗渠化されている呑川が復活したら、いい空間ができるだろうということは意識しながら計画しました。

『タウン・スケープ 町田集合住宅プロジェクト』

大岡山建築賞銀賞

岡村航太

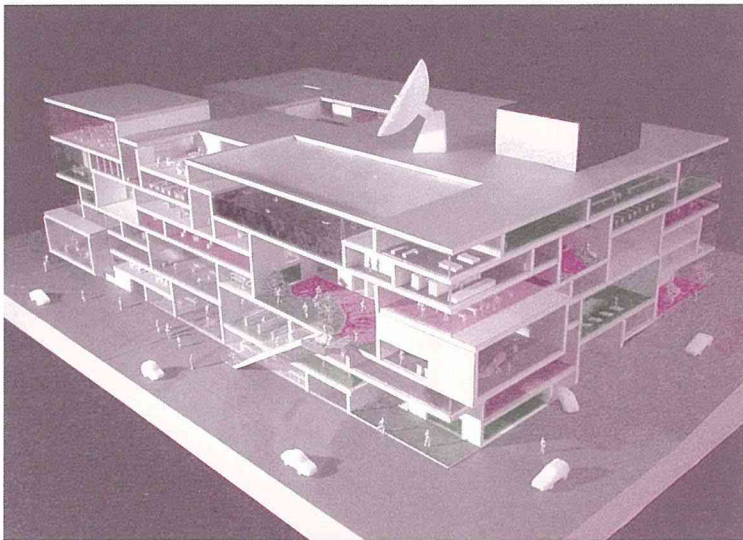
OKAMURA Kota

岡村——東京郊外の町田駅周辺の川沿いの細長い敷地に、集合住宅を計画しました。敷地周辺にある空き地や川、鉄道の高架、遊歩道、鉄塔、調整池、土手などがつくる郊外的な風景に着目し、建築とは無関係に存在しているそれらの要素をオープンスペースを介して計画に含み込むことで、この敷地の特徴を活かした住空間をつくらうと考えました。川のレベルの調整池を兼ねたテニスコートや釣り堀、また地表レベルの公園や市民菜園、さらに建物の屋上レベルの住民のためのスペースなど、様々な広さ、高さの外部空間が、そこに隣接する構築物と建築とを組み合わせ、連鎖させていくことで全体が構成されます。十分に活用されていない外部空間や様々な要素が混在する都市郊外の特質を採り入れた計画を目指しました。



「多隣接複合計画」長谷川豪

"Polyadjacent Rooms Complex" HASEGAWA Go



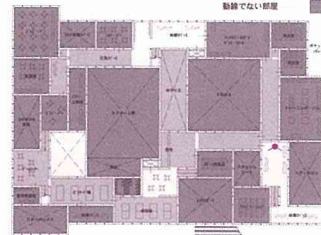
外観写真



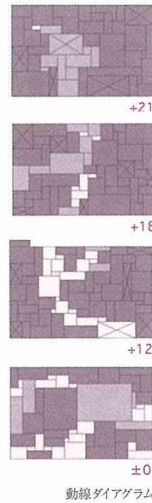
配置図



内観写真



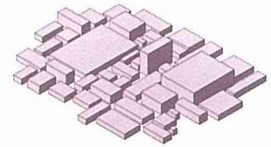
level +6平面図



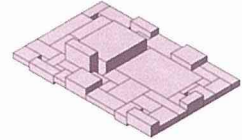
動線ダイアグラム

動線の部屋
通り抜け可能な部屋
動線でない部屋

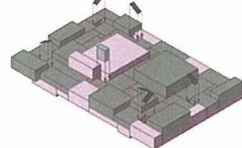
①いろいろな大きさ、形のボリュームを用意する。



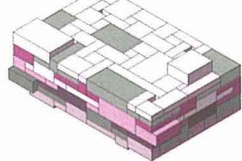
②完結したまとまりをつくらないようにボリュームを並べていく。スキマ (VOID) は気にしない。



③同じルールで積み重ねて並べ、スキマ (VOID) が下の層と重なったところには縦動線を入れる。



④いろいろな組み合わせが取り出せる部分の集合の出来上がり。



ダイアグラム

•大学での発表会にて

仙田——今のあなたの言ったことと、線路のすぐ脇に駐車場があって視界を遮っていることは矛盾していませんか。

岡村——部分的な小さな抜けによって空間のつながりや視線を調整しようと考えました。

八木——自然を様々なかたちで取り込んでいるようですが、それぞれの場所を分断した印象が強く、つながり意識が弱いように感じます。建物どうしをつなぐような要素は何かありますか。

岡村——既存の道と川岸の遊歩道に向けてそれぞれの建物が腕を出して動線が繋がっています。

仙田——川沿いに緑地が連続して繋がっていく配置の方が自然だと思います。

岡村——建物をオープンスペースとセットにして並列することで、敷地の川側と道路側とで表裏が生じないように配慮しました。

•TIT建築設計教育研究会総会にて

河野——郊外に都市的なものをつくらうとしているのですか、それとも自然共生的なものをつくらうとしているのですか？

岡村——畑や森林に隣接してゴルフ場があるなど、自然と都市的な要素とが曖昧に混在しているのが都市郊外の現状であり、そういった場所の特徴を活かそうと考えたので、どちらかというのは決定できません。

伊達——これだけのことをやるのならば、計画のなかに川をとりこむくらいのプランを考えられなかったのでしょうか。都市のインフラに対してもっと積極的に設計をして、それとの対応の中で、建築を考えるという方向も有り得ると思う。

岡村——川から連続した釣り堀やプールなど、川との関係は考えつつも、全体としては川のみによって性格づけられた場所ではなく、様々な場所を含み込んだ計画を目指しました。また都市インフラである調整池に対して、テニスコートとして開放するなどの仕掛けを考えました。

「多隣接複合計画」

長谷川豪

HASEGAWA Go

•大学での発表会にて

長谷川——都心に建つビルの多くは、積層スラブとエレベーターなどの動線のシステムによって空間が階ごとに分断されています。私は広さと天井高が柔軟に変えられる部屋という単位に着目し、それらが集合し連鎖していくことで、空間がどこまでも続いていくような建物を計画しました。隣り合った大小の部屋が組合わされ、つながることで、シアターや図書館、店舗、スポーツジムなどの様々な用途が立体的に複合されます。また動線もこうした部屋のつながりによることで、部屋の組合せをより柔軟で流動的なものとしようと考えました。部屋の仕切がそのまま構造壁となり、また開口部のペアガラスの隙間を設備配管スペースとして利用します。壁とガラスを同面におさめるなど、構造体や仕上げ、開口部といった切り分けが曖昧な表現を試みました。

奥山——敷地の一番外側に対してはどのように「完結しない」関係をもつのでしょうか？

長谷川——ファサードを建物の断面として扱い、外部も一つの大きな部屋として捉えています。

仙田——構造が成立しているかどうか疑問です。

八木——例えば傘みたいを中心に構造体があってスラブが張り出す架構や軸組のほうが、部屋がよりフレキシブルにつながって、あなたの意図に合うのではないのでしょうか？

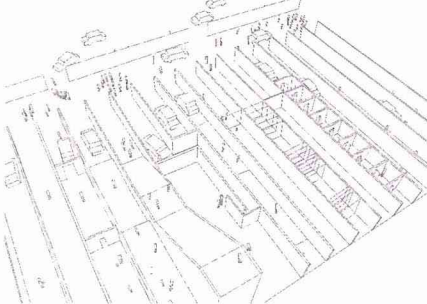
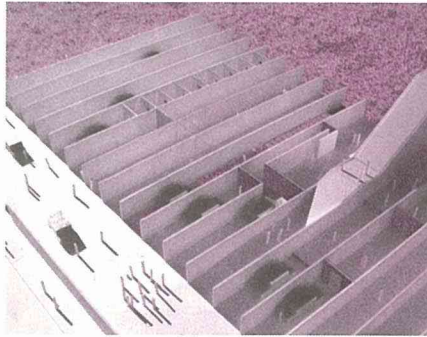
長谷川——部屋を支える壁やスラブが相互につながって全体ができるというように考えました。

滝口——しかし無理なところが多く、全体として成立していません。スラブの上に壁をたてる構造も考えられますが、ただ複雑に分散させれば支えられるというものではありません。

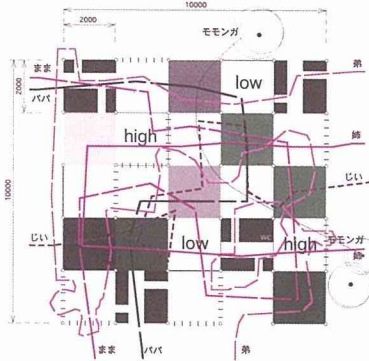
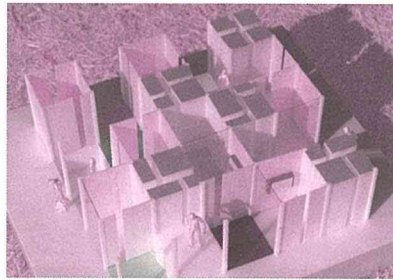
塚本——エレベーターが一番上までいかないのはなぜですか？廊下

地平線まで砂の続く砂漠に置かれた人間には、距離感覚は希薄に感じられるようである。100M先と200M先はほとんど同じ距離感覚をもって目の前に現れる。しかしひとたび150M先に誰か出現すれば、彼を境に砂漠は手前と奥に二分される。砂漠の中にいろいろなモノが立ち現れていく時、その対象により様々な距離が生み出されていき人はその幻想的な空気に包まれてしまうようである。

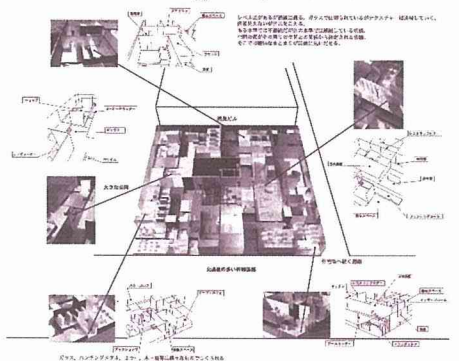
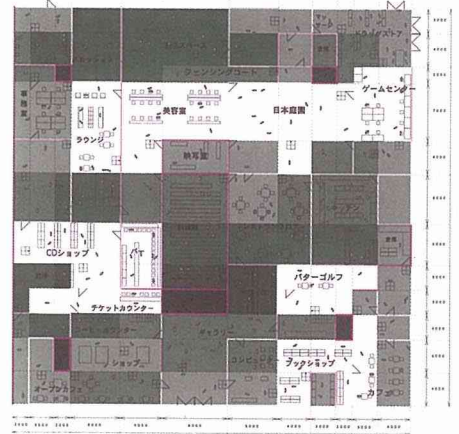
一方で、人と人の距離感、例えば敬語という言語により顕在化される。逆に敬語の使用により、ある一定の距離感を生み出すこともできる。そのような距離感や奥行き、または人間のジェスチャーによって生みだされる空間の感覚的な部分を、以下3つのプロジェクトでは、壁をたてる(空間に境界を設ける)という一つのトピックを中心にしてそれぞれ物の配列、ルート選択、内部での行為により認識可能な問題としていくことを目論んだ。



Filter Factor House2 ルート選択の家



Filter Factor House 距離感覚の家



Filter Factor Building フィルター要素のビルディング

や縦動線をなくせば不思議な空間ができるのはわかりますが、本当に動線が成立しているのでしょうか？

長谷川——独立した縦動線を入れるのは避けました。運営しだいで動線の位置が入れ替わるやり方はあると思います。また上部2層は基本的にレストランのような大きな部屋でまとめられており、下階からアクセスできるので、動線上の問題はありません。

塚本——そういう階ごとの部屋のまとまりをつくるのは、先ほどの話と矛盾しませんか？

長谷川——上階のまとまりは機能的なものなので、矛盾しないと思います。

塚本——しかし上階にもいろいろな用途が含まれ、使う人も違うのだから必ずしも機能的なまとまりとはいえません。

『モザイクスナイパー』

東伸明

HIGASHI Nobuaki

•大学での発表会にて

東——私は空間の距離感や奥行きといった質が、人間の行為やものとの関係によって成立するものと考え、そうした関係を顕在化し、さらにそのことを通して生活環境が組織されていくような住宅のモデルを3つ計画しました。「距離感覚の家」では、壁に仕切られた細長い空間の奥行きが、車、自転車、人、ペットといったモノの配置によって顕在化され、そのことによって生活の場が構成されていく集合住宅です。「ルート選択の家」では、25の多様なスペースが、家族の構成員各々の選択によって組み合わせられて成立する住宅です。例えばパパとママのルートが交わるところが寝室になるというように、ルートのずれや重なりによって生活環境がかたちづけられます。また「フィルター要素のビルディング」ではガラスや木など様々な素材の境界によって仕切られた空間に、その潜在的な質に応じた諸活動が導入されることで建築の全体がつけられます。以上3つの計画を通して、空間の質について考えてみました。

塚本——考えた結果どうだったのですか。3つやっていることの意味もよくわかりません。

仙田——計画の動機を説明してください。

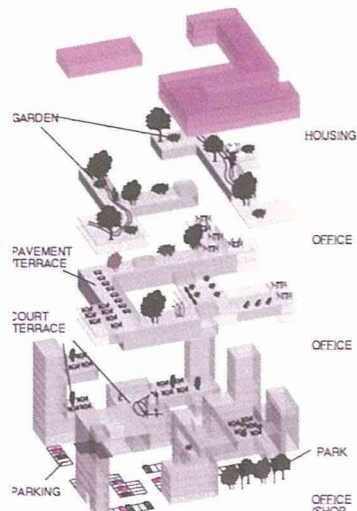
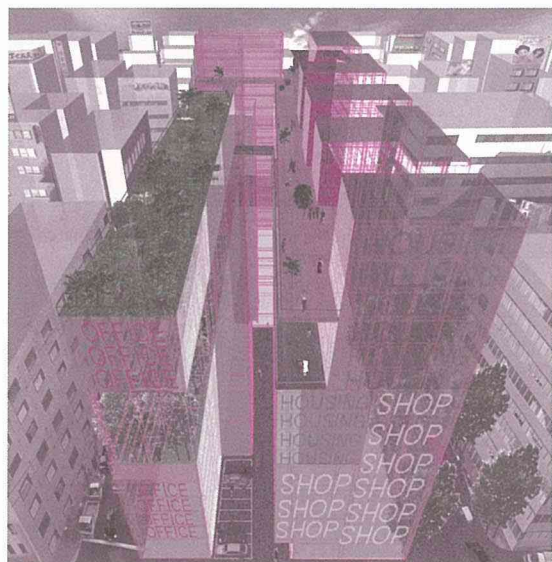
東——例えば上座や下座などは、客や主人がそこに座ることや床の間によって、人々に実体的なものとして認識されると思います。だからその実体が変われば、空間的な質が変わります。建築についていうと、部屋と部屋の相対的な関係でその質を位置づけていけないかと考えました。そしてその相対的な関係は、境界の属性からきめられるのではないかと考えました。建築が持っている床や壁といった構成材の組合せに基づく合理性とは違う、人の行為やものなどの相対的な関係による別の合理性から設計することを試みました。

大学での卒業設計発表講評会の模様

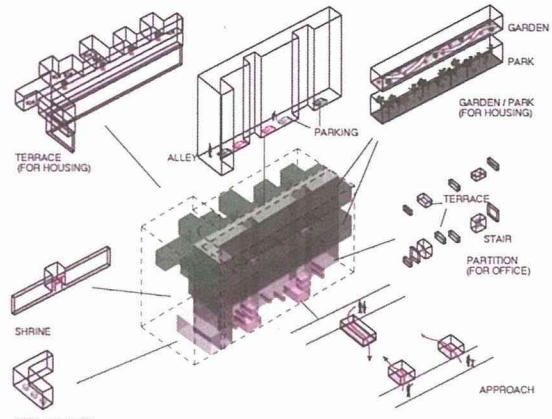


『ポーラスビルディングシステム ヴォイドの配列による高容積・高密度地区の都市再開発』 遠藤康一

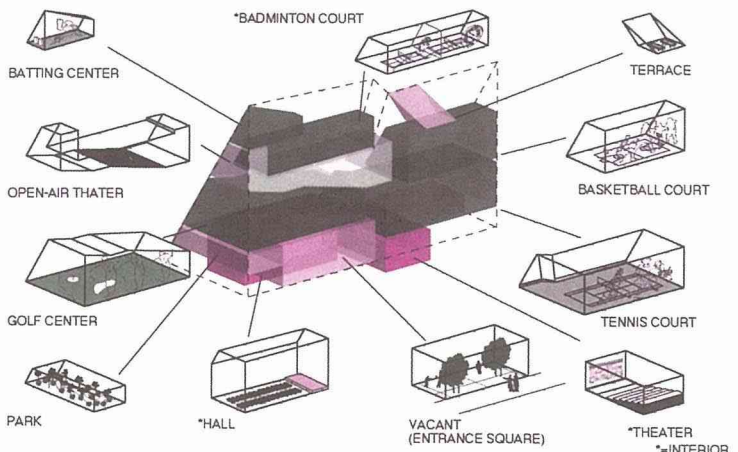
"Porous Building System in Hi-Density Area of Tokyo" ENDO Koichi



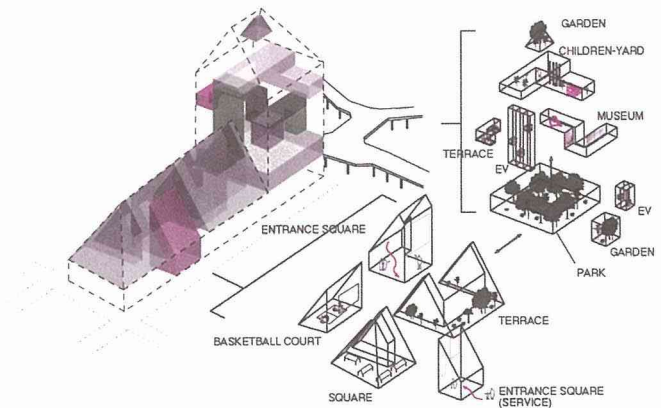
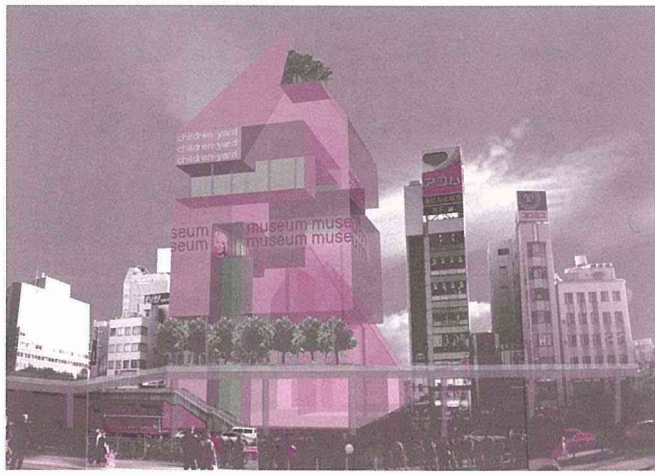
【ルーバー・ビルディング】背後から斜線制限がかかる直立面的な全体形に対し、大容積の外部空間をヴォイドとして欠きとるとともに、斜線によって生じた床の幅の違いに応じて公共的な機能を配している。斜線制限のかからない低層部ではホールや映画館といったヴォリュームに内包されるヴォイドを、上部では大容積の外部空間を配することにより背後の住居地域に対して視線の連続や採光を調節するルーバー的な役割を果たす建築となっている。



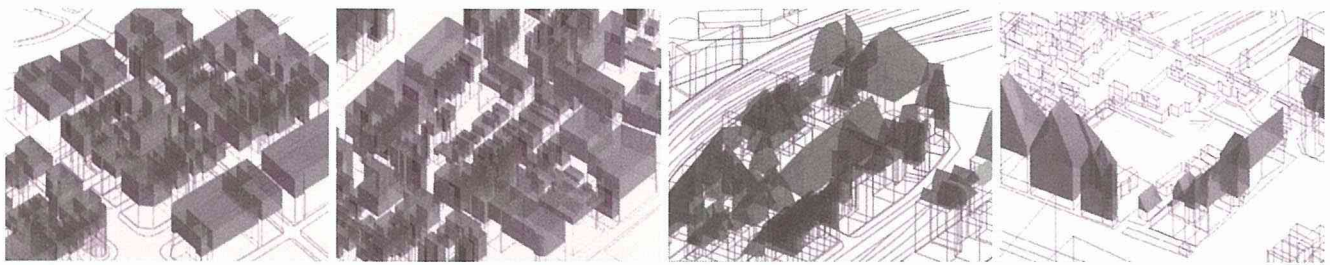
【立体路地】敷地に隣接する大通りや街路、また敷地内の路地といった道路の幅員のヒエラルキーを反転するような比率で、路地に面してはより多くヴォイドを獲得する。これによりヴォイドが住戸の採光を確保するだけでなく、住戸のテラスや庭となり、路地を拡張し活性化させる。



【スネイクビルディング】ヴォリュームとヴォイドを交互に積層することで、建物上部の残部であったヴォイドを全体形内に均等に分散するとともに、街区どうしを動的・機能的に連続させている。また地表面のヴォイドを全面パーキングとすることで周囲に分散していたパーキングを集約し、上部のヴォリュームに挟まれたヴォイドを歩道や広場、テラスとしてヴォリュームどうしを動的につないでいる。



【駅前ポーラス】駅前のペDESTリアンデッキと建物の上部や奥に展開するヴォイドが連続した立体的な駅前広場となっている。タワー部分ではチューブ状のヴォイドがヴォリュームを貫きつつ、外壁面をとりまきながらその縦やかな分節に沿って機能が切り替わり、また背後の平面的な部分では街路に面して広場のヴォイドが欠きとられている。



【都市の未利用空間】左から、銀座四丁目付近、銀座二丁目付近、上野アメ横周辺、表参道交差点付近

[修士論文(制作)]

『ポラス・ビルディング・システム
ヴォイドの配列による高容積・高密度地区の都市再開発』

大岡山建築賞

遠藤康一 ENDO Koichi



•TIT建築設計教育研究会総会にて

遠藤——都市には、建物と建物の隙間、路地や駐車場といった空地に加え、斜線制限や高さ制限によって決まる建築可能範囲内にも多くの利用されていない空間があります。こうした空間を、建物周囲に取り残された単なる残余としてではなく、より積極的なヴォイドとして建物のヴォリュームに含み込むことにより、建物への採光や動線や視線のつながりが調整され、都市環境を再編しようと考えました。そこで多数の孔=ポラスが空いたような建築の構成の考え方を「ポラスビルディングシステム」として提案しました。高容積高密度の都市再開発のケーススタディとして、東京の性格の異なる商業地域、上野、銀座、青山における4つの敷地において、内部のプログラムや周辺外部との関係に応じたヴォイドの位置や、それらの組み合わせ方を検討し、同時に容積率を調整する建築を計画しました。

山下——今ある建築とは違い、現行の法規を使っても、かなりヴォイドを含んだ形式の建築ができるという提案ですね。現行法規が現実には有効かどうかチェックする意味もでてくるかもしれませんね。

遠藤——設計のケーススタディとしてリアリティをもたせるために、現行法規を利用しました。

三栖——ヴォイドをつくる時のルールのようなものはあるのでしょうか？

遠藤——ヴォイドをつくることで、建築にどういう空間がつかれるかということをまず最初に検討しました。ヴォイドがヴォリュームどうしをつなげたり、組み合わせることで多様で複雑な空間の関係が生まれる点に、大きな可能性があると思います。

服部——東京の代表的な4つの街を取り上げているが、東京全体としてどのようにしたいから4つの街はこうありたいという意図があるのか、あるいはそれぞれは個別のケーススタディであって、互換性があったり、他の街でも自由に使えるということなのでしょうか。

遠藤——特定の場所でどんなことが可能であるのか、ということを考えました。

山下——建物内にヴォイドを取り込むだけでなく、建物の周辺のヴォイドを含めて理論化できるともっと面白かったと思います。

伊達——都市計画をやっている立場からいうと、あなたの計画は建築基準法の一番マイナーなところだけをとらえていますが、それをブレークスルーして、街並み誘導型地区計画を超えるような計画を考えてはどうか。

坂本——何年前かに活発だったプログラム論のような、用途に対してどういう建築空間が成立するかという視点に対して、ここでは容積や空間の大きさが具体的にどのようなヴォリュームとして成立するか、そしてヴォリュームの中に、どういった用途を含むことができるかといった方向から捉えようという意図があるように思います。

『ロードサイド・ビルディング 幹線道路沿線における複合施設計画』

北山修

KITAYAMA Shu

•大学での発表会にて

北山——幹線道路は都心部の密集地や郊外の緑地など様々な地域を貫いています。こうした道路と道路沿いの環境がひとまとまりとなつて、その沿線の空間がかたちづくられています。こうした沿線空間においては、量販店やファミリーレストランなど、広大な駐車場をもつ施設や車路を伴った建物のように、道路と施設が積極的に複合したものがみられますが、こうした沿線の建物は、道路と周辺環境とをより積極的に関係づける上で重要な役割を担い得ると考えました。そこで幹線道路沿線として特徴的な地域において、道路とその周辺環境の相互関係に基づいて構成される建築を「ロードサイド・ビルディング」とし、日本の都市郊外に広がる幹線道路の沿線空間の再編を目的とするプロジェクトを提示しました。

塚本——郊外やロードサイドへの意識は理解できるのですが、その場所における問題提起が明確ではないように思います。

北山——個々の場所の特色に応じて、道路とその沿線地域を結びつける建築のタイプを示そうとしました。

藤井(晴)——パーキングタワーや屋上の道路などは新しいタイプではなく、現在でもよく見かけるものですが。

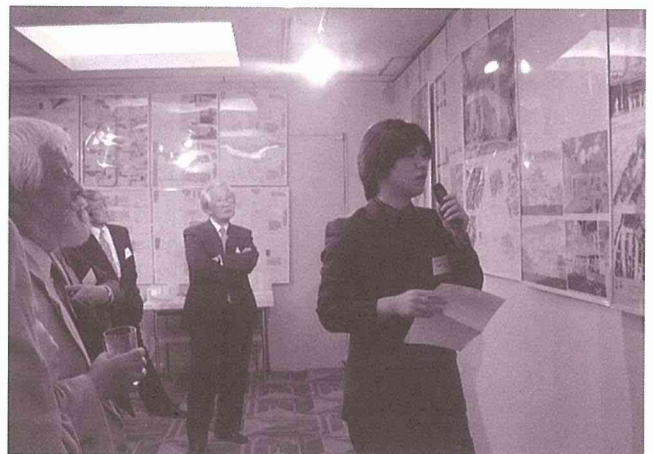
北山——個々の建築と道路の複合の仕方というよりも、ここで沿線空間と呼んでいる地域との関係を重要視したという意味です。

仙田——そういう建物ができることで地域にとってどういうメリットがあるのかよくわかりません。

八木——高密度市街地の計画は地下利用なども考えてもいいのでは。全体的に道路と建築を強引に複合させているようにも見えます。

青木——力作だと思うのですが、ちょっと大きすぎないように感じます。法規やコスト、計画主体など、前提となる条件設定をもう少しはっきりさせた方が良かったと思います。

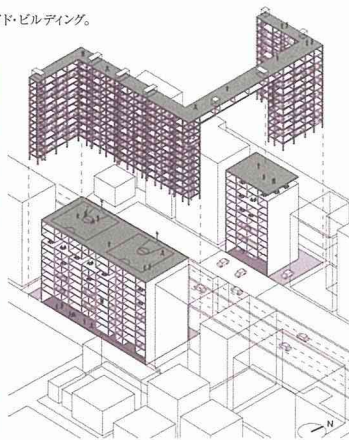
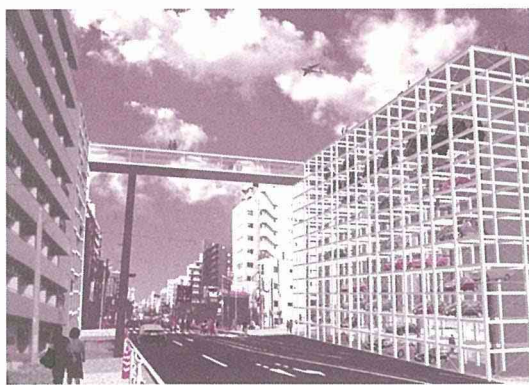
TIT建築設計教育研究会総会における発表の様相



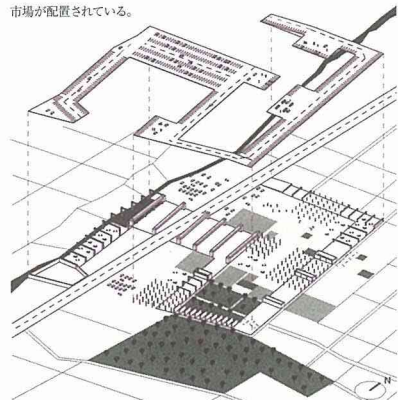
「ロードサイド・ビルディング 幹線道路沿線における複合施設計画」 北山修

"Roadside Buildings" KITAYAMA Shu

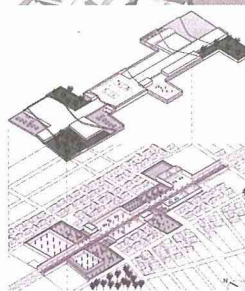
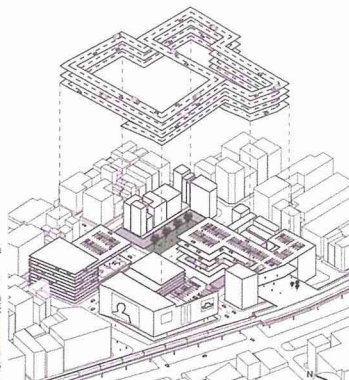
幹線道路沿線に建ち並ぶマンション群に対し、パーキングタワーを並置させた棚型のロードサイド・ビルディング。全ての住戸に対し直接自動車でアクセスが可能となる。



既存の道路を横断して農地、森林、河川を連結するチェーン型のロードサイド・ビルディング。屋上の道路に沿って地上の用途に対応した駐車場や市場が配置されている。



異なる高さの駅、公開空地、オフィスビルなどを立体化した道路で連結する螺旋型のロードサイド・ビルディング。車路の内側は交差点を含み込む外部空間をつくる。



丘陵地の頂部におけるトンネル型のロードサイド・ビルディング。上部の空間にグラウンド、公園などのオープンスペースが積層され住宅地をつなぐブリッジとなる。

「TIT建築設計教育研究会総会 総評として」

戸尾——壊してしまえばいいような不細工な鉄骨が残っていたり、斜線制限に非常に素直に従っているなど、とても今年は素直に現状を肯定した上で計画しているようです。既存のまちを直して良い環境に変えていこうという姿勢がみんなに共通してあるようですが、もっと積極的にやってもいいのではないかと思います。

青柳——一見美しいと思うのですが、何か社会工学科の卒業設計をみているような感じがしました。実際にこういう風に設計したいんだという意欲がもう少しみられたら、もっと楽しかったのではないかと思います。

半澤——彼らが三年生のときに設計製図第三を受け持ったときは、結構面白いものができていたと思うのですが、今回は全然主張が感じられず、製図第三にちょっと時間をかけたならこうなりました、というぐらい

の印象でした。他の人の作品を見ていないからわかりませんが、これらの計画がどういう基準で賞に選ばれたのかよくわかりませんでした。

日置——昨年はリニアな敷地設定に、ストリート空間を提案するものが多かったのですが、今年作品はカラフルなものも多く、毎年ある傾向がみられるように思います。先生方の指導に何らかの方向付けがあったのでしょうか。

坂本——今年作品がカラフルなのは、近年学生の設計製図でもCADやCGがますます浸透してきた結果であると思います。卒業設計は学生の自主性にまかせており、教官側からの方向付けや指導はとくに行っておりません。また修士論文(制作)では、イメージの提出だけでなく、より論理的な展開が求められるため、指導教官が必要に応じてバックアップしますが、基本的には本人が自主的に考え展開しています。

書評

Book review

「ハウジング・プロジェクト・トウキョウ」

都市環境構成研究会 編著

“HOUSING PROJECT TOKYO”



居住によって編集される都市環境

Urban Environment Articulated by Housing

久野靖広 [博士課程]

KUNO Yasuhiro (Doctoral candidate)

【建築と都市の環境要素】

サイタマトミンやチバリーヒルズといった言葉でしばしば形容されるニュータウン、ベッドタウンといった集合住宅が日本の住宅形式として一般化されて久しい。その結果、都心部の居住人口は減少し、皇居周辺の官庁街や西新宿の高層ビル街に顕著なように、夜間はヒトがほとんどみられない空洞化した都市構造ができあがっている。近年では恵比寿ガーデンプレイスや代官山の同潤会アパートの再開発など、中心部につくられた大規模な集合住宅の例もあるが、こうしたものは集合住宅自体が高層ビル群であって周辺から隔離された島状のもので、都心にいる感じがしないものが多いのではないだろうか。こうした既存の集合住宅へのカウンターとして「ハウジング・プロジェクト・トウキョウ」(以下HPT)を捉えることができるだろう。

高い建物の上に立って周囲を見渡してみると、実際の都市環境が建物だけではなく、高速道路や鉄道などの土木構築物や看板などの工作物といった様々な要素からできていて、中には銀座付近の首都高の下がデパートになっていたり、巨大な看板が建物の屋上にのせられていたりするように、

建築なのか土木構築物なのか分からないものを見ることができる。本書のなかで示される都市の環境要素と集合住宅との複合である環境ユニットたちも、あるものは皇居のお堀の護岸と集合住宅のセットが堀を渡る橋になったり、またあるものは集合住宅の細長いヴォリュームの下のプロティによって大規模スポーツ施設で分断されがちな街路どうしを接続する小径をつくり出しているといったものである。こうした建築、土木、工作物といったカテゴリーを横断するような複合のあり方は、建築と現実の都市空間の関係を考える際に新たな視点を与えてくれるものといえるだろう。

【都市を利用して住む方法】

プロジェクトは皇居周辺・霞ヶ関・永田町、神宮外苑・新宿御苑、上野公園・不忍池といった地域で展開されている。都市のなかの地形や空地、緑地といったものを評価しつつ都市空間にヴォリュームを挿入していくといったプロジェクトで、HPTと比較できるものとしてHerzog & de Meuronによるパーゼルでのアーバンスタディ・プロジェクト(1992)を挙げることができるだろう。どちらも都市内の空地や緑地に反応したプロジェクトだが、2つを比較すると居住と隣接した都市の緑地と、皇居などの巨大なヴォイドとしての都市の緑地といった、ヨーロッパの都市であるパーゼルと東京との都市構造の違いが浮かび上がってくる。

もともと東京のド真ん中である官庁街や皇居周辺の地域に住まうということ自体、途方もない話であって、HPTのプロジェクトが歴史的に形つくりされてきた都市の場に対して無神経ではないかと感じることもあるかもしれない。しかし、ここで提示される、皇居のお堀端に住んで春は千鳥ヶ淵の桜でお花見ができるとか、神宮近くに住んでスポーツしたりサッカー観戦したり、さらに公園や美術館の近くで暮らすといったようなイメージを都市における新しい住まい方の提案として考えてみてはどうだろうか。パーゼルでのプロジェクトの建物ヴォリュームがとりたてて居住を前提としないものであるのに対して、HPTではそれに集合住宅をあてはめ、公園や大学キャンパス、スポーツ施設といった都市施設や皇居のお堀、上野周辺などの地形にフィットさせることで(環境ユニット化)、

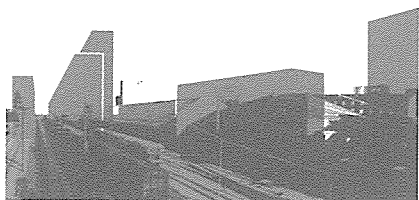
都心部での新しい住まい方までカバーしている。これらの都市の住まい方のイメージからは軽快に都心に住む楽しさを感じることができる。

最近では「郊外の庭付き一戸建てではなく、小さくても都心に住む」といった若い世代を中心とした都心回帰の考えなどを耳にすることも多くなってきている。これまでの計画学が間取りや配置計画などの集合住宅の内部の問題を中心に捉えてきたのに対し、HPTでのこうした都市におけるアクチュアルな生活へのアプローチは、単に建築による都市の構成論といったものにとどまらず、これからの都市居住の展開の可能性も同時に描き出しているように思われる。

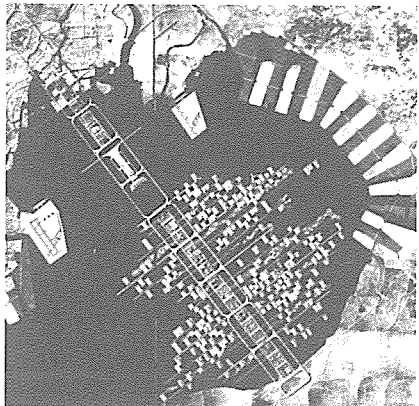
【都市の再構成】

HPTでは集合住宅のヴォリュームが、点在する都市の環境要素と手を結ぶ部品として扱われ、接着剤のような役割を果たすことで、環境ユニットによってつくられる空間が都市全域に及んでいく可能性が示唆されている。丹下健三らの「東京計画1960」をはじめとするこれまでの都市プロジェクトが、インフラストラクチャーなどの都市の骨格を新たに引き直そうとするものであるのに対し、HPTは体の中にナノマシンをとり入れて内部から組織を再組成するようなものといえるだろう。

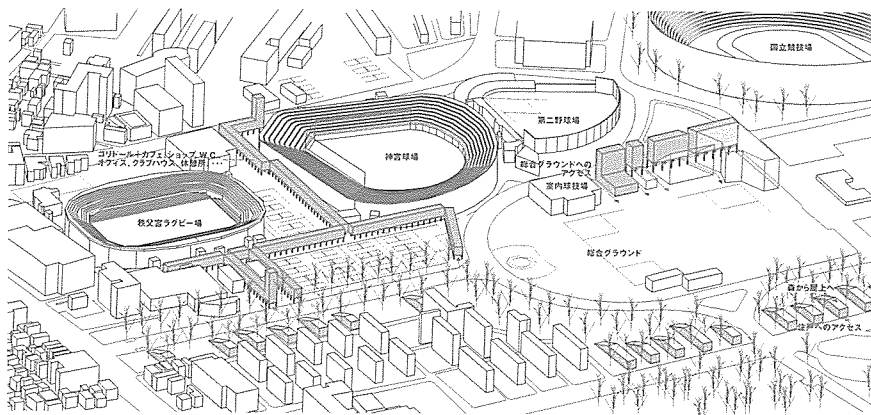
HPTで提示される都市の再構成の可能性は、なにも東京に限ったことではない。読んだ人がそれぞれの都市で特徴ある環境ユニットをイメージすることもできるのではないだろうか。そうした点で、HPTは外に出て都市を眺める際のガイドブックになりうるものである。建築の学生だけでなく都市計画や土木工学といった様々な分野から都市に関わる人たちにも手にとってもらいたい1冊である。



パーゼルのプロジェクト Herzog & de Meuron (1992年)



東京計画1960 丹下健三(1960年)



スネーク・コリダー&フォレストスクレイパー: 神宮外苑に住む。スポーツに近い生活。

副産物-東京

by-product-tokyo

マリカ・ネウストプニー [M2, NMBW]

ナイジェル・バートラム [RMIT 講師, NMBW]

Marika Neustupny (Masters Candidate, NMBW),
Nigel Bertram (RMIT Lecturer, NMBW)

1999年10月から11月にかけて、メルボルン工科大学 (RMIT) の10人の学部学生が、オーストラリア政府の補助金を受けて、シェイン・マリイ教授および現地でのM・ネウストプニーとN・バートラムの指導により、東京のリサーチを行った。この都市でどのように(新しいこと)が発生しているかを見極めようと、二週間新宿駅周辺での予備調査を行った結果、東京の都市空間の変わらない部分と変化していく部分との様々な関係を読み解く具体的な手がかりが得られた。この予備調査の結果からいくつかの主題が特定され、それらをふまえて様々な(新しいこと)が見られる西新宿、お台場、東新宿、下北沢、西新宿、渋谷と言う六つの地域で、それぞれ一週間づつリサーチが行われた。

リサーチを進めていくにつれて、(新しいこと)の最も一貫した新たなタイプは、社会の本質的な要求や論理的な産物に関連しているというよりも、むしろより一時的な、その場その場での細かな解決の集積に基づいていることが見えてきた。空間構成から考えてみると、(新しいこと)は建物/空間と出来事の可変的なコンビネーションから生じているようで、壁ではっきりと限定されている単純な空間のオブジェクトほど見分けやすくない。これらの状況をふまえると、都市づくりにおける建築のかたちの役割と方法が問い直される必要がでてくる。さらに、価値の増進から考えてみると、ここに示された諸状況は、長い間忘れ去られてきたような他の過去の決定の累積が作りだした効果によるものである。何かがありすぎたり無すぎたりする都市の余剰と不足が、都市形態の発展とそこでの人々の生活とに対して触媒として働き、相互作用をおよぼす様子が明らかになった。豊かさの過剰と欠乏が新しい可能性と問題を引き起こし、新しい解決策と形が出来上がってくる。

10 undergraduate architecture students from Royal Melbourne Institute of Technology (RMIT) carried out urban research in Tokyo in the last months of 1999. The research was sponsored by an Australian government grant, and was overseen by Associate Professor Shane Murray. Marika Neustupny and Nigel Bertram were on site supervisors. The project started by trying to identify ways in which 'newness' might occur in this city. In the first 2 weeks, the students left for field trips to the area around Shinjuku station, with aims of finding physical clues to various possible relations between stability and change. Having located the beginnings of topics to



緑が丘1号館2階アトリエでの発表会の模様 1999年12月14日(火)

centre the research on, the rest of the process involved one week in each of the specified areas: West Shinjuku, Odaiba, East Shinjuku, Shimokitazawa, South Shinjuku and Shibuya. These locations were selected by considering how each part of the city suggested different types of newness.

As we worked, it started to appear that the most consistently new type of newness in this city is not about the aims of direct or logical product in society, but rather linked to a kind of by-production, or temporary, little answers along the way. In terms of degree of spatial definition, 'newness' seems to appear in urban entities comprising variable combinations of buildings / spaces / events, and are therefore not as easily identifiable as a single space or object defined by walls. As a result, they inevitably bring into question the role and means of the architectural figure in making up the indescribable larger scale of the city. In terms of propelling values, the phenomena documented here interact with the cumulative effects of other, long forgotten, previous decisions. 'Newness' starts to make visible the ways in which surplus or lack (too much or too little of something) can act as catalysts and interact with both the formal growth of the city and the way it is inhabited. Over and under abundance generate new opportunities and problems, which in turn are responded to with new solutions and forms.

1. ばらまき施設(ジェシカ・リッチ): [新宿]自動販売機はその小ささと自立的で機能的な性格により、与えられた具体的環境に簡単に適合できる。
2. 間に合わせ常設物(ゾエガイア): [新宿]公衆トイレや水道栓などの公共インフラが整った公園に恒久的なキャンピレージを形成し、間に合わせ的なものであるにもかかわらず、不気味な一貫性がある。
3. ボトルネックと抜け道(マット・ハーバート): [南新宿]駅前では、一番狭い角を選んでチラシ配りや街頭宣伝の人たちが活動する。過密が行為をつくり、行為が過密を作る。
4. 満たされない隙間 穴(エリカ・デア・アコフ): [新宿] (建物なし)の敷地が、安定した割合のオープンスペースを提供する。そのせいで、ほんの一年間ですら、日光、プライバシー、裏庭の状態が相当に変動している。
5. 満たされた隙間 ポケット(ポール・グッシュ): [西新宿]交通体系がスピードと効率の高さを目指しているにもかかわらず、高架道路下の空間は動きの少ない場あたりの用途が混在する場所となっている。
6. 垂直リンク(アラン・ター): [下北沢]小さな住宅規模の敷地に新しいタイプの商業ビル。街路空間は、地下のコートヤードや上階の公共空間により劇的に変化している。
7. 多様な商業形態(ジョセフ・レイズ): [新宿]駅のホームから、コンコース、さらに街へと続く商業施設のサイズは、テレスコープを覗くように大きくなり、売り物の大きさも種類も多くなる。
8. プロモーション・オリエンテーション(イアン・リム): [新宿]広告の壁面下では、派手なジャケットを着たチラシ配りや呼び込みの団体が、交差点の信号がかわるたびに押し寄せる歩行者たちに近づいていく。
9. 商業インフラ(ジョン・サン・カウル): [西新宿]多くの超高層ビルに(ミニ・アトリウム・ショッピング・センター・ロビー)が生まれ、事実上の公共

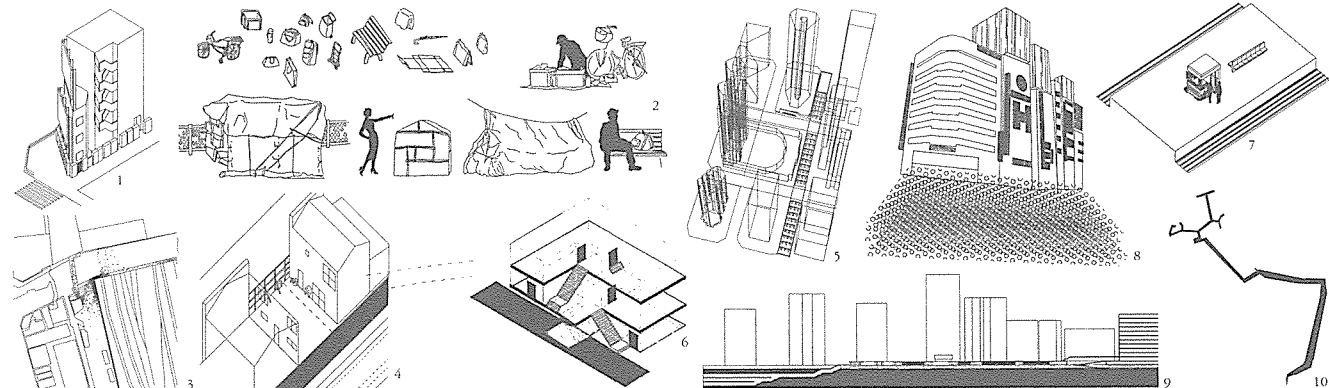
動線が成立している。不足(垂直動線のたりなさ)と余分(二つの地面レベル)の副産物。

10. 準過剰インフラ(ニコラス・ヒュービツキ): [西新宿]小田急線の空中デッキのように、機能的コネクションのイメージをもたらす巨大な構造物は、連絡橋としてよりも、自立したオブジェクトとして存在している。
1. SCATTERED SERVICES (Jessica Lynch): Shinjuku: Because of the small scale and self-contained functional nature of vending machines, they can easily adapt to a given physical environment.
2. PERMANENTLY MAKESHIFT (Zoe Geyer): Shinjuku: These groups of structures are located in a park, where public toilet blocks and water supply provide permanent services. They make a type of enduring camping village, with an uncanny consistency to their makeshift appearance.
3. BOTTLENECKS AND SHORTCUTS (Matt Herbert): South Shinjuku: Opposite the station entrance, small advertisers and groups of protestors choose the corner which forms the narrowest point between two broad areas of public circulation to hand out pamphlets and make themselves seen and heard.
4. UNFILLED GAPS / HOLES (Erica Diakoff): Shinjuku: A stable percentage of open space in the city is generated by constant and yet random periods of 'no building'. Sunlight, privacy and the sense of how big your backyard is can change dramatically over any given year.
5. FILLED GAPS / POCKETS (Paul Dash): West Shinjuku: The large pockets of excess space under the roadway allow a mixture of 'slow' and ad-hoc activities to emerge, despite the vertically split traffic system which is apparently concerned with speed and efficiency.
6. VERTICAL LINKS (Alan Kueh): Shimokitazawa: A series of new commercial building types has evolved. The space and experience of the street has been dramatically altered by the deep sense of basement courtyards and the addition of upper level publicly accessible space.
7. DIVERSIFIED RETAIL FORMS (Joseph Reyes): Shinjuku: From platform to station to street, the same convenience store companies operate a telescoping series of forms. Kiosk, stall and full-scale store offer increasing size and range of items for sale.
8. PROMOTIONAL ORIENTATION (Yiyun Lim): Shinjuku: At the base of this wall of signage, teams of promotional staff wearing brightly coloured advertising jackets move to target pedestrians who arrive in groups synchronised by the traffic lights.
9. COMMERCIAL INFRASTRUCTURES (Jonathan Cowle): West Shinjuku: Two 'ground' levels with approximately equal emphasis result in many corporate towers having 'mini-atrium shopping centre lobbies' which also act as de facto public circulation between levels. A new type is generated as a by-product of both lack (not enough vertical circulation) and excess (two ground levels).
10. QUASI-EXCESS INFRASTRUCTURES (Nicolas Hubicki): West Shinjuku: Rather than simply being links (and thereby subservient to the things they are joining), large structures carrying an image of functional connectivity such as the Odakyu pedestrian walkway extension also exist as autonomous objects.

本リサーチの詳細が掲載されたRMITからの出版物が、塚本研究室と坂本研究室に置かれる予定です。なお個人で入手されたい方は、以下のアドレスまでご連絡ください。

A more detailed publication regarding this research project has been published by RMIT University, and copies are currently being prepared for Tsukamoto and Sakamoto Laboratories. Please direct any further inquiries to:

Nigel Bertram, School of Architecture and Design, RMIT University,
GPO Box 2476V, Melbourne 3001, Australia.
e-mail: nigel.bertram@rmit.edu.au



TIT建築設計教育研究会会則

[第1条]名称

本会はTIT建築設計教育研究会と称する。

[第2条]目的

本会は東京工業大学工学部建築学科及び大学院建築学専攻における学生の設計能力の向上を側面的に支援するとともに、学生と会員、会員相互の交流を促進し、設計技術向上の相互啓発を行うことを目的とする。

[第3条]事業内容

本会は次の事業を行う。

①国内外の建築家・特別講師等の招聘、②卒業設計・修士制作への賞の授与と作品保存、③展示会・講演会等のイベントの開催、④総会・運営委員会の開催、機関誌等出版物の発行、⑤その他、本会の目的にかんがう事業

[第4条]会員

本会は本会の目的に賛同する会員によって構成される。会員は東京工業大学の卒業生を中心とした個人または、上記の個人の関与する法人とし、その会費を基金として本会を運営する。

[第5条]会費

本会の会員の会費は法人会員は1口10万円とし、0.5口(5万円)よりとする。期間は1年間以上6年間までとする。(期間削除=第8回総会にて承認)個人会員は1口1万円とし、1口よりとする。(個人会員=第8回総会にて承認)

[第6条]役員

本会は次の役員を置く。

運営委員9名(運営委員長1名及び監査役1名を含む)

[第7条]総会

会員(法人の場合はその代表)等による総会は年に1回以上開催するものとする。

[第8条]会計

本会の会計年度は1月1日に始まり、12月31日に終わる。また、会計報告は年1回会員に公表する。

[第9条]存続期間

本会の存続期間は平成2年10月1日より平成8年9月30日までとする。(この項削除=第5回総会にて承認)

[第10条]会則

本会則は平成2年10月1日より実施する。本会則の改廃は総会の決裁を得るものとする。また本会則の運営にあたっては必要により別に細則を設ける。

(以上)

<細則>

TIT建築設計教育研究会会則・第10条により下記のとおり細則を定める。

[第1条]役員

本会の役員は構成は下記による。

運営委員9名(学外運営委員6名、学内運営委員3名)

運営委員の任期は3年とし、重任をさまたげない。

東京工業大学建築学科の学内運営委員は主任教授その他2名とし、また学外運営委員は会員または法人会員の代表者のうち、学内運営委員の合議により6名を選任する。

運営委員長(会の代表者)1名及び監査役1名は学外運営委員の中より運営委員の互選により選任する。

[第2条]総会

総会は会員(法人の場合はその代表)及び東京工業大学建築学科教官(教授・助教授)出席による集会とする。

役員による事業報告、事業計画の審議、設計教育に関する意見交換等を行い、必要により会則・細則の改廃の決裁を行う。

(以上)

2000年度役員(00.10.31現在)

顧問:中島隆(1951卒)鹿島学術振興財団専務理事/顧問:林昌二(1953卒)(株)旧建設計名譽顧問/運営委員長:戸尾任宏(1954卒)(株)建築研究所アーキヴィジョン代表取締役/副委員長:山下和正(1959卒)(有)山下和正建築研究所代表取締役/監査役:藤江澄夫(1960卒)清水建設(株)常勤監査役/運営委員:岡部富雄(1959卒)(株)構造計画研究所建築技術本部常務取締役本部長、仙田満(1964卒)東京工業大学教授、服部紀和(1964卒)(株)竹中工務店取締役、坂本一成(1966卒)東京工業大学教授、八木幸二(1969卒)東京工業大学教授

2000年度法人会員(00.10.31現在)

(社名 本会への代表)

大林組/國富勲、鹿島建設/中島隆、清水建設/藤江澄夫、大成建設/光岡宏、竹中工務店/服部紀和、構造計画研究所/富野壽、環境デザイン研究所/仙田順子、日建設計/三橋邦博、松田平田/和田信昭、IAO竹田設計/竹田秀道、久米設計/伊平剛夫、建築研究所アーキヴィジョン/戸尾任宏、清田育男計画設計工房/清田育男、日本設計/高橋徹、山田守建築事務所/山田達郎、レーモンド設計事務所/森山興真、葛西潔建築設計事務所/葛西潔、金箱構造設計事務所/金箱温春、伊達計画文化研究所/伊達美穂、山下設計/井上雄治

2000年度個人会員(00.10.31現在)

(氏名(卒年))

田口武一(S10)/東久世秀禧(S10)/黒田正巳(S13) 吉江憲吉(S14)/高田清(S16)/石田繁之介(S16) 龜天義久(S19)/栗原勝(S22) 石野治(S23) 池田忠彦(S25) 遠藤正明(S25) 中島隆(S26)/佐久田昌昭(S27)/濱田昭二(S27) 中村晃(S28) 林昌二(S28) 田中正美(S29) 戸尾任宏(S29)/吉井一夫(S29)/高木賢(S30) 田口好孝(S30) 内藤昌(S30) 城間勇吉(S31)/渡田実(S32) 中神弘(S32) 松下謹三(S32)/青柳司(S33) 太田雅三(S33) 佃隆介(S33) 増田一真(S33) 清水康久(S34)/富野壽(S34)/村口昌之(S34) 山下和正(S34)/永井雄一(S35) 野村邦夫(S35) 藤江澄夫(S35)/星野利一(S35) 松野公一(S35)/森孝夫(S35) 後藤宣夫(S36)/佐々木雄二(S36) 鈴木歌治郎(S37) 最上達雄(S37)/三橋邦博(S38)/有田桂吉(S39) 岡部富雄(S39) 片野毅(S39) 仙田満(S39) 只野康夫(S39)/西野敬史(S39)/野口三郎(S39) 服部紀和(S39) 平川長(S39) 満田恒男(S39) 味生威(S40) 野崎英彦(S40)/森下清子(S40)/守谷一彦(S40) 岩沢二郎(S41) 坂本一成(S41)/志岐孝之(S41) 鈴木清友(S41) 大嶋顕世(S42)/小西敏正(S42)/光岡宏(S42) 矢口彰(S42) 奥村光男(S43)/西村博道(S43) 花島晃(S43) 細入誠一(S43)/村田靖夫(S43) 和田章(S43) 藍澤宏(S44) 佐藤俊作(S44) 清水弘道(S44) 田中享二(S44) 牧圭介(S44) 八木幸二(S44) 山口洋一郎(S44) 岡本慶一(S45) 岡本聖司(S45)/鳥羽広明(S46) 梅干野晃(S46) 山口潤二(S46) 大野隆造(S47) 猪子順(S47) 西尾秀平(S47) 杉原繁樹(S47)/菊谷武郎(S48) 日置滋(S48) 藤岡洋保(S48) 保坂一夫(S48) 森行臣(S48) 尹原基(S48) 有里公徳(S49) 高田典夫(S49) 豊田雪夫(S49) 三橋伸夫(S50) 上山博夫(S50) 河野晴彦(S50) 小林謙一(S50) 清水寧(S50) 土屋隆(S50) 高橋寛(S51) 田中一晴(S51) 宮本宗和(S51) 松永浩一(S51) 木谷靖孫(S52) 前田康憲(S52) 熊谷昌彦(S53M) 浦春彦(S53) 白川裕信(S53) 宮本文人(S53) 飯利昌人(S53) 鈴木敏彦(S54) 常木康弘(S54) 武田直

行(S54) 小室清高(S55) 三上貴正(S55) 吉田親史(S55) 伊東龍一(S56) 乾靖(S56) 仲野順一(S56) 宮本昌明(S56) 高橋晶子(S57M) 津金猛(S57M) 酒井星志(S57) 西田達生(S57) 平島信一(S57) 山口勝巳(S57) 安部武雄(S58D) 坂田弘宏(S58) 横山裕(S58) 新井貴(S59) 帽田秀樹(S59) 中村安志(S60M) 大佛俊泰(S60) 小田宏正(S60) 所司護(S60) 若松均(S60) 中村芳樹(S61M) 奥山信一(S61) 山田泰範(S61) 鈴木達也(S62) 塚本由晴(S62) 鈴木重則(S63) 今井賢治(H1) 栗原正明(H1) 鹿野秀馬(H2) 木島千嘉(H3M) 渡邊哲也(H3M) 片庭修(H3) 櫻井康雄(H4) 菅原正則(H5M) 保任秀樹(H5) 藤岡務(H6M) 村田淳(H7) 七田裕(H8M) 菅菜々子(H8) 笠井啓仁(H9) 吉田佳代(H9) 井上寿(現職)/以上165名

運営委員会

第1回運営委員会(2000年6月12日)

以下の事項について討議、議決された。

①1999年度決算報告。②2000年度予算案の検討、承認。③2000年度会費納入状況報告。④個人会員の入会状況の報告。⑤2001年度運営委員案の検討、承認。⑥創立10周年記念会の開催日程および内容について検討。

第2回運営委員会(2000年7月18日)

以下の事項について討議、議決された。

①創立10周年記念会の開催日程、内容について検討、承認(別記)。

第10回総会

2000年6月12日、蔵前工業会館にて会員53名の参加を得て開催され、以下の事項について報告、意見交換がなされた。

①1999年度決算報告。②2000年度予算案の検討、承認。③2000年度会費納入状況報告。④個人会員の入会状況の報告。⑤2001年度運営委員案の検討、承認。⑥創立10周年記念会の開催を運営委員会より提案、開催を承認。内容については運営委員会に一任。⑦大岡山建築賞受賞式。⑧懇親会。

10周年記念会

本研究会の創立10周年を記念して、以下の通り10周年記念会を開催。

日時:2000年12月14日[木]16:00-20:30 会場:東京工業大学百年記念館 内容:①16:00-19:00大岡山建築賞受賞者(1991-1995)によるプレゼンテーション ②19:00-20:30懇親会

編集：東京工業大学理工学専攻建築学専攻ka編集委員会

編集委員長＝坂本一成

委員＝八木幸二／三上眞正／五十嵐規矩夫／塚本由晴〔幹事〕／寺内美紀子／中井邦夫／足立眞

学生編集委員＝岡村航太／横山志穂／田中正洋／谷川大輔／川上正倫／田口陽子／網川いずみ／高橋寛／大村卓

編集協力：デザイン＝秋山伸＋久世健／翻訳＝デイヴィッドスチュアート

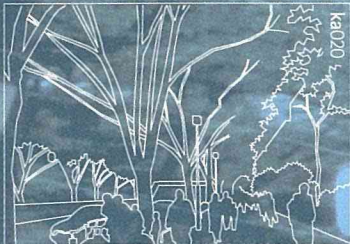
表紙：表参道と同潤会青山アパートメントハウス〔©足立眞〕

発行：TIT建築設計教育研究会〔2000年12月発行〕

定価：800円

ka020

Autumn/Winter, 2000-2001



表参道に面して建つ同潤会青山アパートメントハウス。

日本最初の公的住宅供給機関「同潤会」により

大正14年(1925年)に着工された都市型集合住宅のひとつ。

山手に現存する唯一の同潤会アパートメントハウスであるが、
建て替えの計画が決定されている。